
バカとテストと規格外

紫炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと規格外

【Nコード】

N3607W

【作者名】

紫炎

【あらすじ】

今年で2年生になる吉井明久。だが彼の周りにはとんでもない規格外の5人がいた。テストの成績、運動神経、科学力、超能力……。あらゆる面でいろいろと超越した能力を持つ5人。そんな彼らは中学時代からの明久の親友である。これはその規格外の5人と共に送る学生ライフである。

注意、本作品は半チート、こんな学生あり得ない等の要素を含んでいます。さらに紫炎の初作品です。文章に矛盾やおかしな部分を含むときがあります。それでも読むという人のみどうぞ。

不定期更新です。

プロローグ：彼らの始まり（前書き）

初めまして、今回初投稿の紫炎です。うまく書けるかどうか不安ですが、どうか温かい目で見守ってください。

プロローグ：彼らの始まり

「やばい！遅刻する！」

「そう思うならなぜ早く起きなかった！」

「だって目覚ましがまさか故障しているとは思わなかったんだもん！」

桜咲く並木道を4人組の集団が走っていた。どうやら、一人寝坊したのに他三人がそれに巻き込まれたようだ。

「だいたい、陸や二ーナ、双月が起こしてくれてもよかったじゃないか！」

「それだと、お前が寝坊が悪いという自覚が出ない。」

「無駄話はいいからサッサと走れ！」

「そうだ！遅刻するー！ー！」

真面目そうな少年が一喝すると4人ともスピードを上げた。しばらく走っていると、

「遅刻だぞ！吉井、海谷、アルレイヤ、黒斗！！！」

校門前で生徒を待っていた先生に出くわした。

「おはようございます、て・・・西村先生」

「「おはようございます、西村先生。」」

「おはようございます、西村先生。朝からご苦勞様です。」

「おはよう、黒斗、アルレイヤ、海谷。それと吉井、いま別の名で呼ばうとしなかったか？」「気のせいですよ、西村先生。」

彼は西村先生。通称、鉄人。趣味がトライアスロンだということからそう呼ばれている。また、補習担当の先生で生徒から鬼の補習をするということから相当恐れられている。

「まあいい、それとお前ら一言足りないぞ。」

「「「遅刻してすみません。」」」

「えっと、今日も肌が黒いですね。」

「吉井、お前は俺の肌の色が大事なのか。」

ため息混じりに西村先生が言う。

明久
Side

鉄人が疲れたような表情だ。なんだろう、何かあったのだろうか。

「あつ、そうだ。先生、アキトと健二は来ませんでしたか？」

あの二人はどうやら先に行ってしまったらしい。喧嘩してなければいいけど。

「ああ、アイツらなら……」

と、鉄人が校庭の方を見た。そこには、

「てめえ、今日という今日は許さねえ！！！」

「許さねえということを断る！！！」

「断るなあ！！！！！」

校庭のど真ん中で喧嘩している二人がいた。

\vdash

はあゝゝゝ。

あの二人は……

「貴様らしい加減にしろ!!!」

陸君の一喝で二人は喧嘩をやめてこっちに來た。

「おっはよう、黒鉄の先生。」

「はよう、鉄人先生。」

「貴様らはちゃんと名前と呼ぶと言ったことができるのか。」

「それができたら先生達は苦労しない（しねえ）。」

「相変わらず改める気はゼロのようだな。」

鉄人が呆れたかのようにため息をついた。前々から思っているけど誰も鉄人に向かってあんな風に話したりするの僕の覚えている限りこの二人だけだよなえ。でもまあ見慣れた光景だしね。鉄人も諦めているし。

「まあいい。ほれ、お前たちのクラス分けの結果だ。」

結果が書かれた封筒を鉄人が二人に渡す。おっと、そうだ。僕も見
ていないじゃないか。僕も二人と一緒に封筒の口を破く。

「吉井、ほかの先生がどう思っているか知らないが、先生はお前の行動は立派だと思う。結果は残念だったが…」

「いいんですよ、先生。これは僕が選んだことですから。」

「そうか…」

案の定、僕はＦクラスだった。まあ、途中退席してしまったらね。鉄人のこうゆう所、僕は好きだ。

「それはそうと…アーカーシャ！お前はどうゆうことだ！！試験監督を殴り飛ばすなど前代未聞だぞ！！」

「ヤツが明久のことをバカの屑呼ばわりしたからだ！四の五の言われる筋合いはねえ！」

「ちょ、試験監督を殴り飛ばしたの！？駄目でしょ！」

「うつせえ！」

そう言うと、アキトはそっぽ向いた。もう、昔から僕の悪口とか喧嘩吹っ掛けてきた人に対して殴ったり蹴り飛ばしたりするんだから。全く、吉井が大切なのはいいが、大切にすぎで自分の成績を０点にしてどうする。」

「別に。どうだっていいし。」

言っでどうにかなるようだったら、すでに陸君がどうにかしているしね。

「先生、そろそろ自分たちは行きます。」

「んっ、そうか。急げよ。」

陸君が鉄人に断りをいれて、校舎の方に急いだ。

そうだ、遅刻してるんだった。

プロローグ：彼らの始まり（後書き）

どうでしょうか。何か至らぬ箇所があったらご指摘お願いします。

現時点：オリキャラ設定

月宮 健二（つきみや けんじ）

文月学園一の問題児。やることなすことんでもなく、学園全体を巻き込んで騒ぐ。底抜けの明るさと行動力を併せ持つ。12歳の時にマサチューセッツ工科大学を上位で卒業。科学技術に関しては世界最高峰の頭脳を持つ。が、どうでもいいほうにその頭脳を発揮する。また、身体能力も常軌を逸した能力を持つ。その予測不能の行動から「核弾頭級の嵐」と言われている。

海谷 陸（かいたに りく）

五人の中で一番の常識人かつリーダー。暴走状態の健二を諷めることができる唯一の人間。とても冷静な性格だが、健二に対して、ものすごい負けず嫌いである。超能力のような力の持ち主である。小学校に通う一方、東大に通信教育で首席卒業した。怒りが限界を超えたらトラウマになる程の『何か』をやらかす。

ニーナ・アルレイヤ

クールビューティーな常識人。主に陸と健二と一緒に行動している。五人の中で唯一の女の子。五人の中ではインパクトは薄く、あまり知られていない。が、彼女も十分規格外である。その理由は小学生のときに全国大学模試一位をとったからである。主に誰かの愚痴を聞いている。

アーカーシャ・アキト

小学5年からの明久の親友。とんでもない筋力の持ち主なのに、某

仮面の反逆者並の体格と顔の持ち主である。彼が武術の大会にでたら、必ず優勝すると言われている。だが、文武両道とはいかず、学力はCクラスレベルである。明久に危害を加えるものは男女関係なくしばき倒す。その結果、地元では「赤き破壊の悪魔」と恐れられている。が、基本行動原理は明久を中心に動いている。

黒斗 双月（くろと そうげつ）

文月学園大型スポンサーの一人。全世界で絶大な経済力を持つ黒斗グループの長男。落ち着いた雰囲気を出し、とてもクールな性格である。卓越した身体能力を持ち、ハーバード大学13歳で首席卒業をした恐るべき人物である。しかも大手の会社の経営者。男の子なのだが、雪のように白い髪に他の女子を圧倒する美貌から、実は女の子ではないのかと噂されている。

第一話：僕の悩み（前書き）

書いてみて気付いた・・・読むのと書くのは全然違うということに。他の作者の皆様を尊敬します。

第一話：僕の悩み

問題

『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題とマグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を1つあげなさい』

姫路瑞希、海谷陸、ニーナ・アルレイヤの答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応するため危険であるという点
合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので鉄ではダメというひっかけ問題なのですが、3人は引っかけりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかった事』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例……オリエルン合金』（健二君が作った合金）』

教師のコメント

月宮君はオリエルン合金を作ってはいません。

月宮健二の答え

『問題点……俺が鍋を作らなかったこと

合金の例……オリエルン合金』（俺の特許の一つ）』

教師のコメント

鍋を作ることが問題点ではありません。オリエルン合金は確かにあらゆる面で万能ですが、まさか君が作ったとは思いませんでした。
？

「うわあ、Aクラスの設備すごいねえ」

廊下の窓から見ても分かる。普通の教室より大きいし、黒板の代わりにプラズマディスプレイ、椅子の代わりにリクライニングシートとどこか高級ホテルを思わせる設備が見える。

「まるで別世界だね」

「別世界も何も豪華すぎるだろう。あんなところで勉強できるのか、陸、ニーナ」

「どんな場所でもやろうと思えばできる。今年はここだったただけだ」
「うん」

そう言って二人はAクラスに入ってしまった。言い忘れていたんだけど、陸君とニーナはAクラスである。成績優秀、品行奉公の二人だから当然だけどね。双月君は残念ながら振り分け試験当日に会社の大事な会議があり欠席したため、Fクラスだ。二人が教室に入っていくのを見届けると僕とアキトと双月君と健二君と一緒にFクラスに向かった。って、

「どうして健二君がこっちにいるの!？」

成績はとんでもない健二君がどうしてかこっちにいる!？ 素行の問題を除くと必ずAクラスの彼がどうして。

「試験中にロボット作っていたら退場させられた」

「何をしてるんだ、お前は……」

本当だよ、何をしているだ、君は……

アキト君は最初から分かっていたらしくどうでもよさげにしていた。後で陸君に言って説教してもらおう。心の中でそう決心して僕たちはFクラスに向かった。

「うわぁ、ひどいねこれは・・・」

「・・・・・・」

「そうか？ 俺はこんな場所でも十分大丈夫だけだな？」

Fクラスに到着した僕たちの目に入ったのは、クラスの標識が段ボールで出来ていて壁がひび割れているという光景だった。こんなところで勉強できるのだろうか？と疑問に思う。陸君だったら即抗議に出向いているだろう。

「これが格差社会と言ったね」

「どう言ったってしょうがねえだろ。入るぞ」

おつとそうだった。ここで四の五の言ってもしょうがない。教室に入らないと。

教室の戸を握って、元気よく、

「すみませーん、遅刻しました」

「早く座れ、ウジ虫野郎！」

シュツ！――（アキトが吉井をどかして加速した音）

ドカン！――（僕に向かって暴言はいたやつが壁にめり込んだ音）

「ちよ、何をやっているの、アキト！」

何、今の早業！ 全然見えなかったよ！！

吹き飛ばされた人、大丈夫かなあ？ そんなことを考えていたら、
「もしもし、沼田か？ 実は消したい人間がいるんだが・・・」

「アハハハハ、ハハ、アハハハハハハハ！」

双月君！？ 何アキトより恐ろしいこと言っているの！？ その携帯電話をしまつて！ 健二君は大爆笑しているし！？

「入って早々喧嘩売ってくるとはいい度胸しているなあ・・・覚悟

はいいなあ・・・。」

あつちはあつちで止めなきゃいけないし！ あーもー！！

「なんでこうなるのーーーー！！！！！！！！！！」

2年になって早々何でこんなに疲れるの！！

第一話：僕の悩み（後書き）

補足設定なのですが、明久はFFF団に入っていません。後、オリキャラの容姿については今の時点では設定と性格で想像しておいてください。まだまだ未熟なので、書ききれませんでした。

第二話：自己紹介（前書き）

こんな更新スピードだといつ試召戦争編は終わるのか、先行きが不安です。

第二話：自己紹介

その後、健二君が復活して双月君を止めて、僕がアキトを何とか落ち着かせた。2年生早々けが人を出してどうするんだよ。先生も来て席についた。ちなみに席順は決まっていらないらしい。

「皆さん、おはようございます。今日から2年F組の担任になった。」

福原慎です。よろしく願います。」

先生は黒板に名前を書こうとして書くのをやめた。どうやらチョークがなかったらしい。どれだけ設備が悪いの、ここは。

「皆さん、卓袱台、座布団が支給されていますか。何か不備があれば言ってください。」

なんだろう、お茶の間に用意されているかのような設備は。自分の方には不備はないようだ。それにしてもかび臭いなあ、ここは。

「それでは廊下側から順に自己紹介をよろしくお願いします。」
そついわれてまず立ったのが

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。」

あの五人に次ぐ僕の親友の秀吉だ。うーん、やっぱり双月君に負けず劣らずの可愛さだ。いけない、いけない。秀吉は男だ。しっかりしろ、明久。秀吉に可愛いは失礼だ。でも性別の壁を軽くぶっ壊す程可愛いからな、秀吉の可愛さは。

「初対面の者もいるようだから先に言っておくが、わしはおと「ハツクシュン!」……」

おっと、くしゃみが出ってしまった。あれ、秀吉が落ち込んでいる。どうしたんだろ。

「…土屋康太」

相変わらず無口だね、土屋は。彼に関してはあまり言うことはない。一年の時のあの騒動で懲りていればいいんだけどね。それにしても聞こえてくる声は男子ばかり。もしかして、女の子はいないのかな

あ。

「・・・です。海外育ちで日本語は会話は出来るけど、読み書きは下手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は・・・」

いないのかなあっと思っていたら、ちゃんと女の子の声が聞こえてきた。なんだ、いるじゃないか。

「吉井明久を殴ることです」

誰だ！？ ピンポイントかつ危険な趣味を持った女の子は！？
声がした方を向いてみると、

「はろはろお」

やっぱり島田さんだ。彼女以外いないからね、こんなこと言うの。

彼女は島田美波。去年、僕と同じクラスメイトだった人。正直、好きにはなれない。

「俺の名は月宮健二！ ただの人間には興味はない！ この中で我こそは歴史を変える者だという者は俺のところに来い！ 以上！！」
クラスどころか廊下まで響いたのではないかと思わせるほどの声を張り上げたのは僕の前の席の月宮健二。僕の親友だ。彼は中学からの親友で僕たちの中でも予測不能な行動をする人間だ。いまだ、彼の考えに追いついていけないのは陸君しかない。つと、次は僕が。よし。

「吉井明久です。気軽に明久や吉井と言ってください。」

簡単な自己紹介をして座った。健二君の後に冗談言うのは難しいからね。数人ほど自己紹介が終わったとき、

ガラッ！！

「あの、遅れて、すいま、せん・・・」

「え？」

息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れた。その姿を見て数名の男子が疑問の声をあげた。

「ちょうど良かったです。自己紹介をしているところなので、姫路さんお願いします」

「は、はい！ あ、姫路瑞希と言います。よろしくお願いします」

そこには、桃色のロングヘアの姫路瑞希さんがいた。

第二話：自己紹介（後書き）

健二君は「宮ルヒの憂鬱」を読んで、こんな風に自己紹介をしたではありません。この自己紹介が彼の地です。

オリキャラ勢の自己紹介はまだ終わってはいませんよ。

しばらくは、明久の視点で話が続くと思います。次回もお楽しみに。

第三話・引き金（前書き）

書いていたら思っていた以上に長くなった。ページ数も変則かも。

第三話：引き金

「はい、質問です」

突如現れた少女、姫路瑞希に対してクラスの男子の一人が手を挙げた。

「は、はいっ！ 何でしょうか」

「何でここにいるんですか？」

聞きようによつてはとても失礼な質問だが、ほぼ全員（一部除いて）が思っていることだと思う。

なぜなら、彼女は容姿も人目を引くほどで、テストでは1ケタの順位に必ず名を連ねている学力の持ち主だからだ。当然こんな場所に來るべき人間ではなく、最高設備であるAクラスに入っている者と誰もが思う。

だから、この質問はある意味必然のものでもある。

まあ、どうしてかはだいたい想像つくけど。

「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまひまして……」

彼女を保健室に連れて行つた張本人だから分かつていたけどね。

姫路さんの言葉をきっかけにみんなFクラスに來た理由（言い訳）を始めた。正直、聞く気にならないから無視する。

「で、ではっ、今年一年よろしく願ひします！」

そう言つと姫路さんは逃げるように雄二の近くの席に行つて、座つた。雄二が姫路さんに話しかけているのが見えた。僕は少し離れてゐるから話すのは無理だ。

「えー、では次の人、自己紹介の続きをお願いしま……」

バキィ！ パラパラパラ……

「……」

い、今起きたことを説明するよ。先生が次の人を促そうと教卓に手を置いた瞬間、教卓がバラバラになつた。陰謀とか、怪力とかより

も、もつと恐ろしい何かを見た気がしたよ。ここの備品、どれだけ質が悪いの？

「えー、替えを持ってきますので少し待っていてください「先生」はい？」

「なんでしたら俺が直しましょうか？ 材料は其処にありますし」新しいのを持ってこようとする先生を健二君が引き止めて、修理を申し出た。健二君だったら大丈夫だね。え、注目するのはそこじゃないって？ じゃあ、どこなの？

「いえ、いいですよ。新品の方がいいですし「じゃあ、30秒で直しますね」えっ、ちよつと、月宮君！？」

先生が断り、新しいのを持ってこようとするのをスルーして、健二君は修理に取りかかった。

ギユイイイイ ン！ ガガガガガガ！ ギンギンギン！ ぎやあああああ！ ううー！ー！ー！ ズダダダダ！

「かんせ〜」

やり遂げたと言わんばかりの笑顔で健二君は言った。本当に30秒以内で教卓を作り上げた。すごいなあ、本当。えっ、途中の音は何だった？ 気にしない、気にしない。

修理後は前のよりも断然丈夫そうな物が出来ていた。

「え〜と、ありがとうございます、月宮君」

「どうもいたしまして」

上機嫌で健二君は席へ戻っていった。

「それでは、自己紹介の続きをお願いします」

そう言われて、僕の隣にいるアキトが席を立った。変なマネはしないでほしいな。

「アーカーシャ・アキトだ。しゃべることは特にないが、お前らに一つ言っておくことがある」

？ なんだろ。アキトはバックからクルミ三個取り出し、みんなに見せつけるようにして、

「もし、明久に危害を加えるやつは男女問わず……………」

ゴグシャ！！ さあ~~~~・・・・

「こうなるから、覚悟しろ。以上」

片手でクルミを握りつぶし、粉にした。

「・・・・・・」

僕と健二君、双月君除いて他のみんなは顔が青ざめていた。今のは下手な脅しより恐ろしい。言いたいことは言ったとばかりにアキトは席に着いた。

「何やっているの、アキト。みんな青ざめているじゃないか」

「これくらいが丁度いいんだよ」

僕は小声で話しかけて注意していた。人に恐れられるようなことをして、どうすんだよアキトは。

彼は僕の一番の親友、アーカーシャ・アキトだ。小学校からの親友で、とても仲がいい。ただ、僕に対して暴言や暴力、いじめまがいのことをしてくる相手に容赦がない。主に実力行使という方法で。そのせいで、根は優しいのに乱暴者と勘違いされがちだ。何とかしてアキトは優しいということをみんなに分かってもらわないと。

アキトが終わったので次は後ろの人だ。次の人はつと、

「黒斗双月です。勘違いされがちですが、俺は男なので」

「~~~~~なにーーーーー!!!!!!?」「~~~~~」

双月君か。まあ、初対面では男の子とは思えないよね。

彼も僕の親友。世界屈指の経済グループ「黒斗」の現頭首の弟。彼自身も黒斗グループのエンターテイメント会社「アウストラル」の経営者である。双月君自身の能力でアウストラルは一流企業に躍り出て、今熾烈な競争を繰り広げている。と言っても、彼がいなくても会社は回るようにしているからいつも学校に出ている。男の子とは思えない理由は、彼がそこいらの女性では太刀打ちできない美貌の持ち主だからだ。

なお、彼の前で行き過ぎた女性扱いをすると・・・・・・

「そんな馬鹿なっ！せつかく『君と出会えたあの日』、全182話の構想が出来たのに！」

「俺なんか『雪景色の君』の映画が上映されるところだったぞ!」
「フツ、俺なんか恋愛戯曲『冬に解け合う二人』が全世界ヒットしていたところだぜ!」

「「やるじゃねーか!!!」」

彼のブラックリストに書かれ、社会情報からプライベートまで全部調べ上げられ、脅し手帳に記され、いざという時に脅されます。ああ、あ、ご愁傷様。

双月君は席について早速、今変なこと言った人をブラックリストに書いている。彼らの人生は終わったね。

「坂本君、あなたが最後ですよ」

そう言われて、雄二が立ち上がり、教壇の方へ向かった。教壇に立つと

「代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ」

自己紹介を始めた。でも、なんでわざわざ教壇の方に行くのだろう。自己紹介ならその場ですませればいいのに。

「さて、みんなに一つ聞きたい。」

そう言くと、雄二は黙って教室の至る所に視線を動かす。つられて、みんな雄二の視線を追う。

かび臭い教室

綿が入ってない座布団

足の折れた卓袱台

割れた窓

「Aクラスは冷暖房完備の上に座席はリクライニングシートらしいが・・・」

まるでFとAの設備の違いを述べているかのようだった。なるほど、そういうことか。

「不満はないか?」

「「大ありじゃあつー!」」

Fクラスの心からの叫び。そうかなあ、むしろ僕はこれでいいけど。

「だろう？ 俺だってこの現状は大いに不満だ」

「いくら学費が安いからと言ってもこの設備はあんまりだ！」

「そもそもAクラスだって同じ学費だろ？ あまりにも差が大きすぎる！」

雄二は2年生早々に、

「みんなの意見はもつともだ。そこで代表としての提案だが・・・
FクラスはAクラスに試験召喚戦争を仕掛けようと思う！！」

試験召喚戦争を仕掛ける気だ。

第三話・引き金（後書き）

とつとつ引き金を引いた雄二。さて、ここからどう物語が流れていくか。

今後もしよろしく願います。

第四話：戦力（前書き）

少し時間をおいてしまいました。さあ、どうぞ。

P・S、わかっていると思いますが、海谷陸は『バカと発明と召喚獣』の主人公ではありません。紫炎が考えたオリキャラです。そこは理解してください。

第四話：戦力

問題

以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- (1) 得意なことでも失敗してしまうこと
- (2) 悪いことがあったうえに、さらに悪いことが起きる喩え

海谷陸、吉井明久の答え

- (1) 弘法も筆の誤り
- (2) 泣きつ面に蜂

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら“河童の川流れ”“猿も木から落ちる”(2)なら“踏んだり蹴ったり”、弱り目に祟り目“などがありますね。しかし、まさか吉井君が正解しているとは思いませんでした。成長しているようで先生は嬉しいです。

土屋康太の答え

- (1) 弘法の川流れ

教師のコメント

シュールな光景ですね。

アーカーシャ・アキトの答え

- (1) 健二の大爆発
- (2) ガソリンかけられ、火をつけられて

教師のコメント

あなたは犯罪者ですか。

二ナ・アルレイヤの答え

(1)

(2)

教師のコメント

分からないからって、三点リーダーを使わなくても

「FクラスはAクラスに“試験召喚戦争”を仕掛けようと思う!!」

壇上で自己紹介をしていた雄二のいきなりの提案。だが、いきなり言われても現実味の無い提案にクラス中から非難の嵐が巻き起こる。

「勝てるわけがない!」

「これ以上設備が落とされるなんて嫌だ!」

「姫路さんが居たら何もいらない。」

ちよつと待つて、今関係のないことを言った奴がいるよ。

試験召喚戦争は大まかに言えば、生徒が課題考査、期末考査、そして2、3年生へ上がるときに行われる振り分け試験の成績によって試験召喚獣の強さが決まる。そして試験召喚獣を使って擬似的な戦争を行う。相手のクラスの代表を打ち取ったクラスが勝者だ。

試験召喚獣は戦争中の道具と思ってくれていい。他にも用途は様々だが、中略させてもらう。召喚獣の強さは先ほど言った通り、成績によって決まる。例えば、

・40点ならHP:40、攻撃力:40。

・100点ならHP:100、攻撃力:100

といった感じで、点数が高いといい装備も貰える。点数が高いほど有利になる仕組みだ。

だからこそ雄二の提案は端から見れば無謀としか思えない発言である。

片や2学年の成績が悪かった人たちが集まったFクラス。

片や2学年の成績上位の人たちが集まったAクラス。

戦力の差は明白だった。

「そんなことはない。必ず勝てる、いや、俺が勝たせてみせる！」

だが、雄二は非難の嵐をはねのけて自信満々に言い放った。なにか根拠でもあるのだろうか。

「このFクラスにはAクラスに勝てる戦力が揃っているからな。今からそれを説明してやる！」

そうゆくと雄二は少し間をおいて、ある一カ所を見た。

「土屋。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないでこっちに来い」

「………！！（ブンブン）」

「は、はわっ!？」

雄二が言うのとビクツと肩を震わせ、必死に首と手を振り否定のポーズをとる。全然変わっていないね、土屋は。

土屋は畳の跡を隠しながら雄二の元へと行く。

「こいつ、土屋康太は知る人ぞ知る人間、寡黙なる性識者だ」
ムッツリーニ

「………!!」

雄二の発言に、クラスのどよめきが走る。なんだ、まだ続けていたんだ。懲りないなあ。

土屋康太という名前は別段有名ではない。だが、ムッツリーニとなると話は別だ。その名は男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑を、とある委員では宿敵として挙げられている。

「ム、ムッツリーニだと!？」

「馬鹿な、奴がそうだというのか!？」

「だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だ隠そうとしているぞ……」

「ああ。ムッツリの名に恥じない姿だ……」

「・・・・・・・・」

他の男子が驚く中、僕と秀吉、アキト、双月君は呆れていた。彼には迷惑しているからだ。どうしてかは今回省いておこう。

「姫路の事は説明するまでもないだろう。みんなだって、その力は知っているはずだ」

「えっ？ わつ、私ですかっ!？」

「ああ、主戦力だ。期待している。」

姫路さんは成績上位の人だから当然だね。

「そうだ、俺たちには姫路さんが居るんだった！」

「彼女なら、Aクラスにも引けをとらない」

「ああ、彼女がいれば何もいらぬ」

「木下秀吉だっているし、俺も当然全力を尽くす」

秀吉は僕と同じで学力が徐々に上がってきていてかつ、優子さんの双子の姉と演劇部のホープという要素で有名な人物。そして、雄二は・・・・・・・・なんだろう？

「坂本って、確か小学生の頃は神童とか呼ばれてなかったか？」

「それじゃあ、実力はAクラスレベルが2人もいるって事かよ？」

もしかしたら、やれるんじゃないか？」

「ああ、なんかやれそうな気がしてきた！」

クラスの士気は上がっていき、ほぼ全員やる気になり始めて来た。こういったところは雄二はすごいと思うよ。みんなのやる気に雄二の一言

「それに吉井明久もいる！」

その瞬間、クラスの時間が一時停止した。

第四話：戦力（後書き）

一つに収まらなかった。結構きついですね、一話書き上げるの。オリジナル設定も入っているから、一度整理した方がいいかな。本格的な宣そうにはいる前に設定を整理しておこう。

第五話：赤き破壊の悪魔（前書き）

時間空いたのに、文章が雑になってしまった・・・
みんな、おらに文才を分けてくれ！

第五話：赤き破壊の悪魔

静まりかえる教室……

まるでザ・ワールドが発動したかのようだ。なんで僕の名前を言うかなあ。

「誰だ？ 吉井明久って？」

「知らねえよ。無名だからどうでもいい奴じゃねえ？」

誰だ、まるで無価値のように言い捨てる奴は。ひどいじゃないか。雄二の発言に上がりかけた土気が一気に下落する。まわりのクラスメイトはざわつき始めた。

「そうか、知らないなら教えてやる。そこにいる奴が吉井明久で、学園史上初の観察処分者だ。」

雄二は僕を指さして言わなくてもいいことまで言った。雄二の奴・

「……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？」

クラスの誰かが何か言っているけど僕は気にしない。だって、陸君の指導のおかげでこの程度のことでは腹を立てることはないからね。あの時の指導は本当に鬼畜だったなあ。少し寝ればチョークミサイルが飛んできたり、毎回小テストをしたり、不合格だったら1時間延長して授業したり……

あれっ、思い出しただけで涙が出そう。

僕は辛い過去を思い出して現実からトリップしていた。その間に僕のことに関する説明は終わったらしい。

「そして、このクラスには規格外の奴らが居る！」

『規格外？』

聞き慣れない言葉を聞いてクラスメイトの大半が首をかしげた。まあ、知らないのも無理がない。本当に知っている人しか知らないからね。

「知らないなら教えてやる。常識では計ることが出来ない力を持つ

奴らのことを言う」

そんな風に言われても分かるはずがない。説明不足だぞ、雄二。

「お前ら、オリエルン合金って知っているか？」

「オリエルン合金って今有名なあの万能金属のこと？」

雄二の質問に島田さんが答える。

オリエルン合金。ありとあらゆる物に利用可能な金属。家庭で使う料理道具から車までと、その利用範囲は広い。耐久力も高く、今世界に普及し始めている新種の金属だ。制作者は不明だが、特許は取っているらしい。実はこの制作者、僕の前でなんかの装置を作っている……

「その制作者が、そこで機械いじりをしている月宮だ。」

健二君だ。って、どうして雄二が知っているのさ。

「何っ！？ あの金属を作り出したのはそこにいる月宮だと！？」

「ありえねえ！ 学生が作れる物じゃないぞあれは！」

がやがやと騒ぎ出した。当然の反応だね、僕の知ったときはびっくりしたし。それに作った理由が単純すぎるし。

「んあ？ 確かにあれは俺が作ったけど？」

なんかの装置を作るのを止めて、みんなの疑問に健二が答えた。

「……………」

みんな啞然として言葉が出ないようだ。

「それに知っている奴も多いと思うが、黒斗双月も規格外の一人だ」これにはみんな納得している。双月君は彼の経営する会社が新聞やニュースなどで取り上げられているため、みんな顔も知っているし、実績も知っている。彼の實力はみんな知るところだろう。

「そうだ。将来結婚したい人ランキング上位の『彼女』を知らないわけがない！」

「黒斗さー！ん！ 結婚して！」

……………別の意味で知られていたらしい。

双月君がため息をついている。だよねえ、露骨にそんな扱いされればね……………

「最後に一人、代表格とも言える人物が居る！」

ざわつくみんな落ち着かせて雄二が言い放つ。

「今や都市伝説にもなっている人物『赤き破壊の悪魔』がこのクラスにいる！」

ざわっ・・・・・・・・。。。

空気が凍り付いたような気がした。当然だ、『赤き破壊の悪魔』は・

・・・・・・・・

赤き破壊の悪魔。その名を聞けば恐れない者はいないと言われているこの世に降臨した悪魔。紅蓮の炎を携えて、破壊をもたらす。悪魔の標的にされた者は無事ではすまない。襲われた者は皆口々に「悪魔に襲われた」と言う。噂が噂を呼び、今や都市伝説になっている。

その悪魔がこのクラスにいるのだ。みんな、冷静にいられるはずがない。

実を言うと僕はその悪魔が誰か知っている。えっ、誰かって。それは・・・・・・・・

「その都市伝説はお前だ！アーカーシャ・アキト！」

僕の大親友のアーカーシャ・アキトだ。

第五話：赤き破壊の悪魔（後書き）

「この作者、中二厨？」なんて言われても気にしません。だって、それも僕だから。

第六話：宣戦布告（前書き）

初の感想、涙が出るくらい嬉しいであります。
本当にありがとうございます。

第六話：宣戦布告

Fクラスは完全に静まり、一人の人間に視線が集中していた。あれ、これって二回目？

雄二が話した『赤き破壊の悪魔』。都市伝説となっている者がここにいるのだ。そして、その人物はと言うと……

ぐう。

寝ていた。

………

「つて、おい！ 寝てんじゃねえー！ 起きろ！」

思わぬ反応に雄二は焦る。雄二、場の雰囲気を読まないのは彼らにとっては常識だよ。とはいえ、この空気は何かしないと。

「ほら、アキト、起きて」

僕がアキトを揺らして起こそうとする。それに反応してアキトは起きた。

「ん、ふあゝ……もう、昼なのか、明久」

「いや、ただけど。場の空気を読んでね」

「はあ？ 場の空気？」

アキトは辺りを見回して、自分に視線が注目していることに気づき、「何で俺に注目しているんだよ？」

僕に説明を求めた。僕はさっきまでのことを説明した。

「はあ？ 『赤き破壊の悪魔』？ 知るか、そんなの」
自分は違うと否定した。

「まあお前が知らないのも無理もない。お前にやられた奴らがそう言っているからな」

雄二が補足説明をした後、

「これだけの有名人が揃っているんだ。お前ら、勝って当然だろ？」

「そうだ！ これだけの人物がいるんだ！ 絶対勝てる！」

「もしかしたら打倒Aクラスも夢じゃない！」

「そうだ！ 俺たちに必要なのは座布団じゃない！ リクライニングシートだ！」

雄二がみんなの士気を底上げした。みんなもそれに乗せられる形で盛り上がっていく。

「まずは俺たちの力の証明としてDクラスを征服したい。皆、この境遇には大いに不満だろ！？」

『当然だ！！』

「ならば全員筆を執れ！ 出陣の準備だ！！」

『おおー！ー！ー！ー！ー！ー！』

「俺たちに必要なのは、卓袱台じゃない！ Aクラスのシステムデスクだ！！」

『うおおー！ー！ー！ー！ー！ー！』

「お、おー………」

「できたー！ー！ー！」

雰囲気を押され、姫路さんも懸命さが見て取れるように小さく拳を挙げる。健二君もなんかの機械ができたのか、雄叫びを上げていた。でもすごいなあ。ここまで『彼』の予想通りに事が運ぶとは思わなかった。考え事をしていたら、

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

ふっ、昔の僕なら二つ返事で了承したけどそうはいかないよ。

「待った雄二。下位勢力の宣戦布告の使者って、大抵酷い目に遭うよね。そんな危険な役はごめん被るよ、僕は」

下位勢力との試召戦争など、面倒だし、ハイリスクローリターンでしかない。要は迷惑極まりないのだ。しかも下位勢力からの宣戦布告は断れない。だからその使者に八つ当たりをすることがあるらし

い。

「安心しろ明久。去年の2年生の中で宣戦布告の使者が酷い目にあったという事実はない。もしあったら問題になっていただろ？」

「むっ……」

言われてみればそうだ。宣戦布告をするたびに怪我人が出ては話にならない。雄二の言うことは一理ある。

「大丈夫だ、騙されたと思って行ってみる。俺は友人を騙すような事はしない。」

「そこまで言うなら分かったよ。使者をやってあげる。」

渋々ながらも僕は宣戦布告の為に教室を出た。さっさとすませよう。

No side

ある程度時間がたった頃、

「さすが明久だな。簡単に騙されやがる」

明久がボロボロになってDクラスから帰るところを想像してほくそ笑んでいた。

「やはりそんな魂胆じゃったのか、雄二よ」

「それ以外何があるんだ、秀吉」

ため息をはきながら秀吉は雄二に言った。それに対してさも当然とばかりに返事を返した。

「だったら残念だったな、坂本」

「？ 何がだ」

「今に分かる」

其処に双月が微笑みながら雄二の考えを否定した。雄二はどういうことが聞こうとしたとき、

ぎゃあ—————！！！！

「！？」

どこかから悲鳴が上がった。何が起きたと皆困惑する中、双月と健

二、秀吉は落ち着いていた。

「アキトが明久と一緒に宣戦布告に言ったからな」

「ああ、あいつ“アキコン”だからなあ」

「おおよそ、宣戦布告の使者として来た明久をボコボコにしようとしたDクラスをアキトが返り討ちにしたんだろ」

「可哀相に、一日再起不能だな」

「“アキコン”にさらに磨きがかかっていたからのあ」

この話を聞いて、雄二はまさかと思った。これは明久が酷い目に遭っていて、その悲鳴だと思った。

すると、教室のドアが開いて、

「ただいまあ」

明久が無事に帰ってきた。よく見れば、アキトが後ろにいて雄二を睨みつけていた。

「無事じゃったか、明久よ」

「うん、アキトがDクラスの人々を返り討ちにしたからね」

「で、何人ぐらい叩きのめしたんだ？」

「10人程かなあ。いや、15人かも」

「程々にしとけよ、アキト？」

「知るか、襲ってくる方がわりいーんだよ」

会話から察するに、双月の予想通りだったらしい。雄二はおもしろくなかった。

「さて、坂本ゴリラ」

会話が終わると同時にゆっくりとアキトは雄二の方に向いた。その雰囲気は正直、怖い。

「てめえ。覚悟は出来てるだろうなあ？」

「よーし！ ミーティングするから島田に土屋、姫路にお前ら、屋上に行くぞ！」

「あつ！ てめえ、待ちやがれ！」

アキトの制裁を恐れて雄二は早々に屋上に向かった。それをアキトが追う。

「逃げたな」

「逃げたね」

「逃げたのお」

わかりやすい逃げに幸先が不安になる明久、秀吉、双月であった。

第六話：宣戦布告（後書き）

明久コンプレックス。通称、アキコン。

明久が大事な余り過保護になること。明久のためなら実力行使、情報操作もいとわない人のこと。

新単語が出たので、説明を。

第七話：ミーティング

（明久side）

屋上で最初に見た光景はアキトが雄二にキヤメルクラッチを食らわしている光景だった。別に雄二がどうなるうと構わないけど、そんなことでアキトの手を汚してもらいたくなかったからやめるように言った。

「で、明久。時間は伝えたのか？」

「うん。今日の午後からって伝えたよ。だから先に昼ご飯だね？」
持ってきたご飯を広げてみんなで食べ始めた。

「うん？ 明久、お前遅刻寸前だったのに弁当作る暇あったのか？」

「いや、ないよ？」

「だったらなぜ弁当があるんだ？」

一緒に登校してきた双月君からの質問。ふっふーん、これには理由があるんだよ。

「実は宣戦布告の時の帰り道に陸君に会って『どうせ弁当ないだろうからこれでも食つとけ』って言われてもらったんだよ」

本当に陸君は用意周到だね。いい親友を持ったよ。

「陸の弁当は本当に旨いから羨ましいのう」

秀吉が羨ましげにしている。まあ、無理もない。陸君は料理とかには妥協はしないから、手の込んだ料理を作る。いざ蓋を開けようとした時

「おっと、手が滑った。」

と雄二がわざとらしく手を僕の弁当に伸ばして、

バシッ！（弁当箱が手で弾かれて飛んでいった音）

グチャ！（中身をぶちまけて地面に落下した音）

弁当が食べれなくなった瞬間だった。

「雄二、きさまぁー！ー！」

「ワリイ、ワリイ、明久。わざとだ」

そんなの分かっているよ、そんなことは！ あー、陸君の弁当が・・・。

悪びれもせずに謝る雄二を尻目に恐らくきれいに盛りつけされていた弁当は今や無惨な形になっていた。もはや三秒ルールを使えない。

「雄二よ、なんたることを・・・。」

「あゝあ、俺知くらね」

「はあ？ 何が」

疑問に思った雄二が聞こうとしたが

「さああああもおとおお・・・。」

何かの声が聞こえた瞬間雄二は逃げ出したが、あえなくアキトに捕まり、

三分後

みごとアキトにボコボコにされていた。話し合いもあるのでたたき起こしたが。

「あ、あの、明久君！ 良かったら私が、お弁当作ってきましょうか？」

「いや、いいよ。明日は二ーナが作ってくるって言っていたし」

「えっ・・・。そうなんですか」

姫路さんが少し落ち込んだどうしたんだろう？

「ふーん。瑞希って、随分優しいのね。吉井だけに作ってあげようか、なんて」

「あ、いえ！ その、皆さんにも作るつもりでしたよ？」

「あ？ 俺たちにも？」

「はい。そうです！ 明日皆さんに作ってきますね」

女の子の手料理を断るわけも・・・。

「悪いが俺は遠慮させてもらう」

「俺も」

二人ほどいた。健二君と双月君だ。どうしてもかはこの際追求しなかった。理由は検討つく。

「本題に入らせてもらうけど坂本、何でDクラスなの？」

「ん？ ああ、そうだな」

本題に入って美波が疑問に思っていたことを聞く。美波の疑問はもつともで、段階を踏んでいくなら、クラスの総合成績が近いEクラスから行くのが妥当だ。勝負に出るならAクラス。だからなぜDクラスから攻めるのか分からなかったのだ。

「簡単だ。姫路にあいつら3人に問題がない以上、正面からやり合ってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスとやり合っても意味がないからな」

「それならDクラスと正面からやり合っても厳しいの？」

「ああ、確実に勝てるとは言えないな。だが、心配ないだろう」

美波の疑問に答えていく雄二。そして極めつけに一言。

「いいか、お前ら。俺たちのクラスは

最強だ！」

みんなを煽った。それに乗せられる形でみんなも盛り上がっていく。

「いいわね。面白そうじゃない！」

「・・・・・・やってやる」

「そうじゃな、Aクラスの連中を引きずり下ろしてやるかのぉ」

「が、頑張ります！」

それぞれみんな気合いの一言を言っていく中僕たちは・・・・・・

「てめえ！ それ俺の弁当じゃねーか！ 返せ！」

「断る！！！」

「んだあ、ゴラァ！」

「やめなよ、アキトに健二君！」

「少しは空気を読め、お前ら」

弁当の取り合いとそれを宥めるのに必死だった。

「……お前ら人の話を聞いていたか」

「あ？ 聞いているはずねーだろ」

雄二がため息を吐きながら、

「……ともかく、今から作戦を言うから静かに「却下だ」・
……なんだと」

作戦を言おうとしたら、アキトがそれを拒絶した。

「訳を聞こうか」

「簡単だ、坂本雄二。俺たちはお前をリーダーとして認めてない、
それだけだ」

「大体、明久を不幸に貶めようとするお前の指示に従っていたら、
明久を守れないだろうが」

「それだけの理由か」

「それだけで充分だ、俺たちは」

アキトは健二君との取っ組み合いをやめて、雄二と向き合った。互
いに睨みあっている。

「そうか、じゃあ配置だけはこっちで決めるからな。それ以降何の
指示もしない」

「ああ、いいぜ。それで十分だ」

話は終わったとばかりにアキトはまた健二君と取っ組み合いを始め
た。

「よいのか、雄二よ」

「ああ、別にいい。あいつらが居なくても別どうともなる」

雄二はアキト達を見て、

「個人だけの力なんてたかが知れているからな」
と吐き捨てた。

だが、後に雄二は知ることになる。彼らが暴れるだけで戦況を覆すことになることを。

第七話・ミーティング（後書き）

次の話ではとうとうアキトと明久が大暴れします。

設定：現時点？（前書き）

5人の追加設定と明久についての設定を書いとききました。
でも、もしかしたらまた変更になるかも・・・

ちゃんと決めろ！ 私！

設定：現時点？

月宮 健二（つきみや けんじ）

容姿

黒髪の短髪で顔は整っている。身長は雄二ぐらい。

趣味

機械いじり、新技術開発、ロボット作り

実は彼の体にはある秘密がある。

海谷 陸（かいたに りく）

容姿

黒髪の短髪でイケメン。身長は健二と同じ

趣味

読書、囲碁、チェス、弓術、検定獲得

超能力ともう一つ能力がある。

ニーナ・アルレイヤ

容姿

金髪のポニーテールで出るところが出て、締まるところが締まっている。

趣味

料理、紅茶、槍術

生まれてすぐにある人から『ある物』をもらっている。

アーカーシャ・アキト

容姿

血のような赤髪で、紫の瞳をしている。体型は前述の通り

趣味

武術、チェス、明久と遊ぶこと

規格外残り4人から『アキコン』と呼ばれている。また、体型と腕
つ節が矛盾している。

黒斗 双月（くろと そうげつ）

容姿

雪のように白い髪と黒い瞳。体型は秀吉といい勝負である。

趣味

剣術、株、カードゲーム

彼もまた体型と腕つ節が矛盾している。

？

吉井明久の設定

原作と違い、学力はアキトと同じくCクラスレベル。歴史系は40
0点以上。

幾分かまともな思考を持っていて、FFF団に所属していない。

身体能力も5人を目指して向上している。

性格も5人の影響で少し変わっている。

第八話：Dクラス戦、開幕（前書き）

書いていたら、今までで最長になった。

苦手な戦闘シーンをうまく書けたか不安です。

第八話：Dクラス戦、開幕

問題

以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that my grandmother had used regularly.

」

姫路瑞希、海谷陸、二ーナ・アルレイヤの答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「これは私の祖母が使っていた本です。」

教師のコメント

惜しいですね。今回の文法では「使う」ではなく「愛用する」となり、「本」ではなく、「本棚」です。それにしても吉井君の答えが珍回答ではなくなってきましたね。これなら他の回答に珍回答は・・・

島田美波の答え

「これは

^^^」

教師のコメント

いましたか。

？

雄二side

「そうか、先遣部隊が敵と接触したか」

「・・・・・・今のところは互角」

俺は本陣で土屋の報告を受けていた。今のところはそこまで戦況に変化はない。

屋上での話し合いの後、Dクラスとの試召戦争に向けて全員の配置と作戦を一部除いて伝え、配置を終えた後すぐに試召戦争が始まり、今に至る。

今回の目的は全員の召喚獣の操作の慣れとモチベーションアップ、そしてある3人の力の確認だ。ある3人とは俺が言った『規格外』3人のことだ。

実を言うと、この3人については教室で言ったことしか俺は知らない。学力や本質、行動理念などは全く分からない。去年1年の行動を見てもアキトは分かるのだが月宮や黒斗に関しては全くの未知数だから挑発を込めてあいつらに好き勝手やらせてみようと思い、あのような言い方をしたのだ。まあ、アキトとは元々からあんな感じだが・・・・・・

俺の予想では学力はAクラスレベルで、操作技術は先生より下、と

言う見立てだ。いくら『規格外』だからと言っても1年生の時の実習だけでそんなに扱えるようにはならない。それこそ、明久のように観察処分者でもない限り。だが、それはあくまで俺の予想で実際は違うかもしれない。だから今回、それを見極める。

中堅部隊に突撃命令を出そうと紙に指示を書いて横溝に渡そうとすると、

「坂本、補給試験受けさせて」

中堅部隊を率いていたはずの島田が教室に戻ってきた。どうしてだ？「それはいいが、どうしたんだ？　まだ中堅部隊は戦っていないだろ？」

土屋から中堅部隊が交戦状態に入ったという報告は受けていない。だから中堅部隊は点数は消費すらしていないハズ。なのになぜ補給しなければならぬのか。

「実はある女子に手酷くやられて死亡寸前なのよ」

「いや、俺が聞いているのはそう言うことではなくて……」

「驚いたわ。アキトとアキの二人でDクラスの先遣部隊を全滅したなんて」

「！？」

なん……だ……と……

「たった二人でDクラスの先遣部隊を全滅したと！？」

「えっ、ええ。そうよ」

ありえねえ！？　たった二人で！？

俺は何人かは倒すだろうと思っていたが、全滅させるなんて予想外だ。しかも、さっき前線部隊が敵と接触したと聞いてから15分かたっていない。何をしたんだあいつら。

「それで二人は？」

「ほとんど点数が減っていないからそのまま本陣に攻撃をかけるって木下と先遣部隊を連れていったわよ？」

なんてことだ……もしかしたらこのまま……

「よし、島田は補給試験を受ける。他は俺に続け！」

「Fクラス！」

「アーカーシャ・アキト！」

「吉井明久！」

「Dクラス全員に勝負を申し込む！！ 召喚獣召喚、サモン！！」

アキトは右腕を、明久は左腕を振り上げて高らかに宣言する。その瞬間、二人の足下に幾何学模様の図形が現れて、その後に召喚獣が姿を現した。

明久の召喚獣は改造学ランに日本刀を持った犬耳と尻尾がついた少し愛らしいデザインだ。

対するアキトの召喚獣は流麗な白いフォルムのロボットの装甲を身に纏い、腕には小さい盾のような物を、腰には剣を二本帯刀している。全体的にロボットのような印象を持たせるデザインだ。

「いくぞー！！！」

二人が雄叫びを上げ、Dクラスに突っ込んでいく。他のFクラスのメンバーも二人に続いて召喚獣を召喚していく。

「ひ、ひるむなぁー！！ かかれえー！！」

Dクラスも負けじと召喚獣を召喚して襲いかかってくる。1人がアキトに向かって襲いかかる。

「くたばれ！」

「遅え！」

アキトは斬りかかれる前に相手の懐に飛び込み、剣を抜刀して相手の首を両断して、相手の召喚獣を一撃で葬った。

「なっ！ い、一撃！？」

「次！」

戦死した相手に構うこともなくアキトは次の敵に移る。そして、戦死した彼の元には、

「戦死者は補習！」

「て、鉄人！？」

西村先生が現れて、あっという間に担がれて補習室に連行された。

その時の会話は

「さあ来い、この負け犬が!!」

「いつ、嫌だ! 鬼の補習は嫌だぁー!」

「鬼の補習? そんなことはない。今からやるのは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕上げてやろう」

「いつ、嫌だ! 誰か、助けっ……ぎゃあぁー!」

である。これを聞いた誰もが戦慄した。

「嫌だ、補習室に行きたくない!」

Dクラスの1人が補習を恐れるあまり逃げようとするが、逃げれば敵前逃亡で補習室送りになるのを思い出し踏みとどまって、近くにいた明久に襲いかかった。

「し、死ねえ!」

「隙だらけだよつと!」

武器を上から振り落としそうとした相手の召喚獣の手を左手で弾き、日本刀を喉に突き刺した。それを横に薙いで、戦死させた。

「う、嘘!?」

一撃で戦死した事実には驚いた彼は、その後補習室に連行。

「なら、二人で!」

1人がダメならと二人で左右同時に襲いかかるDクラスの人たち。明久はまず右の召喚獣の攻撃を避け、頭に日本刀を突き刺し、敵の召喚獣を蹴り飛ばした。それを受け止めた左の召喚獣を上から一刀両断した。

「な、何!?」

二人同時にやられ驚くDクラスの人たち。と、そこに後ろからDクラスの1人が来て、

「覚悟!」

と、不意打ちを掛けてきたが。だが明久は焦ることはなく、後ろを振り向かないで居た。
ドスッ!

何かが突き刺さる音と同時に不意打ちを仕掛けたDクラスの1人が戦死した。

「なっ、何で!?!」

訳が分からず後ろを振り向くと、アキトが帯刀していた剣の一本を投げて召喚獣の左胸を貫いていた。

「戦死者は補習!」

戦死した数名を西村先生が補習室に連行する。

「な、なんでだ!　なんで一撃で戦死するんだ!?!」

Dクラス全員が訳が分からず、困惑する。その中を歩いて明久はアキトの剣を拾って、アキトの元に行く。着いたらアキトに剣を手渡した。

「助かったよ、アキト」

「別にいいぜ、礼なんてよ」

お礼を言って、明久は残りのDクラスに顔を向ける。アキトの同じく顔を向ける。

「ねえ、どっちが沢山倒せるか勝負しない?」

「いいなあ、乗った」

明久が一つ提案をして、互いに笑いながら頷いた。

『な、なめるなあーーーー!!』

明らかに嘗めている態度に腹を立て、Dクラス全員が襲いかかる。

「ゲーム……」

明久とアキトは互いに身構えて、

「スタート!!」

Dクラスを向かっていった。

第八話：Dクラス戦、開幕（後書き）

全部に収まりきれなかったなあ。
次で終わるかなあ？

第九話：Dクラス戦、中盤（前書き）

今回

美春のターン ターンエンド Fクラスのターン
といった感じですかね。

時間が空きすぎてすみません。飽きられていないか不安です。

第九話：Dクラス戦、中盤

中堅部隊 side

前線で明久、アキトが大暴れしている頃、島田美波率いる中堅部隊はと言うと……

「お姉様ああー！ー！」

「しつこい！」

苦戦していた。

Dクラスの一部隊が階段に待機していて、前線部隊に合流しようとした中堅部隊に奇襲を仕掛けたのだ。そのせいで前線部隊と合流も出来ず、突然の攻撃だったため悪戦苦闘していた。体勢を立て直すうとしても指揮官である美波は清水美春の猛攻に指揮を出せずにいた。

「小林がやられた！」

「こっちもこのままじゃあ、やられる！」

元々学力では劣るFクラス。一対一に持ち込まれば負ける確率は高く、そこに敵の奇襲。Fクラス中堅部隊はもはや壊滅状態だった。

「このっ、どきなさい！ 美春！」

「いやです、お姉様！ 美春はずっとこの時を待っていたのです！」

お姉様と触れ合えるこの時を！」

科学

島田美波 41点

清水美春 78点

徐々に点数差が開き始めている。

このままではやられてしまう。そしたら補習室に……

「い、いや！ 補習室は嫌っ！」

このままいけば訪れるだろう未来に焦りを感じ、美波の召喚獣の攻撃が単調になっていく。攻撃を先読みした美春が避けて一撃を与えた。とどめを刺されたと思った美波だったが

島田美波 12点

点数が僅かに残った。どうしたのか困惑していると

「フッフッフ……」

がしっ！

突然美春が島田の腕を掴み補習室とは違う方向に連れて行こうとしていた。

「ちよつと！ どこに連れて行こうとしているの！」

「どこに？ 愚問ですわ、お姉様……」

ゆつくりと美春が美波の方を向いて

「今なら保健室には誰もいません！ さぁお姉様！ 美春と共に大人の階段を上りましょう！」

目を爛々に輝かせて言った。美波は顔から血の気が引いていくのが分かる。

「いやよ！ 前から言っているけど、ウチは普通に“男”が好きなの！」

「大丈夫です、お姉様！ 初体験は怖いかもしれませんが、美春が手取り足取り気持ちよくしてあげますわ！」

「いや！ だ、誰か……」

「無駄ですわ、お姉様。他の豚野郎どもはあの通り、豚同士で争っていますわ。助けなど来ません！」

美春の言うとおり、他のFクラスはDクラスの相手をしていて助けにいけない。このままでは自分の貞操が危ない。でも、どうすればいいのか。八方手詰まりだった。それでも誰か助けしてくれると信じて美波は助けを求めた。

「誰か助けてえーーーーー！」

「サモン!!!」

ザンツ！

清水美春 0点

「えっ！？ な、何が起こったのですの！？」

どこからか声がしたと思ったら、美春の召喚獣が戦死していた。消滅していく美春の召喚獣の後ろには……………

「大丈夫！？ 島田さん！」

「手間掛けさせんじゃねーよ」

「よ、吉井！ アキト！」

明久とアキトの二人と召喚獣が居た。隙だらけの美春の召喚獣を二人で真つ二つにしたのである。

「戦死者は、ほっしゅうー！」

何が起こったのか理解できないまま美春は鉄人に補習室に連行された。

「二人とも、どうしてここに」

「前線の敵を全滅させたから応援に来たんだよ」

「俺たち以外の奴が残りの雑魚を片づけているがな」

そう言われて周りを見渡してみるとさっきまでとは逆にFクラスが前線部隊と合流して一気に優勢になっていた。少し待つとDクラスは全滅した。

「明久、アキトよ。中堅部隊以外は全く点数は減っておらんぞ」

「じゃあこのまま一気に本陣まで攻め落とそうか」

「そうだな」

このままの勢いで一気に本陣を攻め落とそうとする明久とアキトに秀吉が制止を掛ける。

「待つのだじゃ。雄二の作戦では本隊と合流して放課後の廊下で雌雄を決する予定じゃ。ここで立ち止まった方が……………」

「虎穴に入らずは虎児を得ず。多少の危険は犯さねーといい結果は取れないぜ」

「そう言うこと。下手に体勢を整えられても困るしね」

秀吉の制止を聞かず、明久とアキトは前線部隊を率いてDクラスの本陣である教室に向かおうとしていた。秀吉はしょうがないとばかりにため息をつき、美波に振り向いて

「島田よ。お主達は一度本陣に戻り、現状の報告と補充試験を受けてくるのじゃ。わしはこのまま明久とアキトに付いていき、Dクラスの本陣に攻撃を仕掛ける」

美波に指示を出した。美波はそれに頷き、中堅部隊に指示を出そうとしたが、ふと気になったことを聞いてみた。

「ねえ、木下。応援にくるのが早かったけど、どうして？」

秀吉は美波の疑問に対して

「明久とアキトが二人だけで敵を全滅させた後、双月から『中堅部隊が奇襲を受けている』と連絡を受けて即座に中堅部隊の援護に向かうことにしたのじゃ。」

「ふ、二人だけで全滅！？ 本当に！？」

「本当じゃ。わしらは見ているだけじゃったよ。しかも、点数がほんの少ししか減っていないと来たからの」

言い終わったとばかりに明久とアキトのところに向かう秀吉。美波はあまりにも衝撃的な事実に驚くばかりだった。

「島田さん？」

Fクラスの男子が声を掛けられて我に返った美波は残った中堅部隊を連れて教室に補充試験を受けに行った。

第九話：Dクラス戦、中盤（後書き）

どうでしたか、今回の話は。

次でDクラス戦は終結です。

原作とは全く違う展開を見せていますね。

第十話：Dクラス戦、閉幕（前書き）

とうとうDクラス戦、閉幕。長いような短いような気がしました。
さあ、どうぞ。

第十話：Dクラス戦、閉幕

屋上 side

「ひまだ〜」

屋上ではパソコンを使いながら戦況を確認している双月と健二が居た。健二は双月にパソコンを貸しているため、やることなく暇でしようがないらしい。

「もうすぐ終わるから待て」

パソコンで情報を明久とアキトに伝達している双月。それをヨガのポーズをしながら健二は見ていた。

何故この二人が屋上にいるのかというとDクラス戦で健二と双月は出る必要はないと判断して、双月は明久とアキトに情報伝達と戦況報告に徹底するため、健二は自前のパソコンを双月に貸して、戦争から身を隠すために屋上にいる。闘えろとばかりに期待していた健二は余計に暇だった。

「これでよし」

終わったとばかりに双月は健二にパソコンを返した。健二は待つてましたとばかりに受け取る。双月は返すと床に寝転がり、空を見上げた。早く終わらせろと心に中で愚痴り寝始めた。

Dクラス教室 side

「代表！ Fクラスがすぐそばまで来ている！」

「なっ！ くっ、教室を出て移動するぞ！」

代表の平賀源二は余りにも予想外のFクラスの攻撃力に焦っていた。Fクラスが宣誓布告してきたとき、宣誓布告の使者が吉井明久だったのを見て、下手に扱つとんでもないことになると考えた平賀は、穩便に受けようとした。だが、他のクラスメートが迷惑とばかりに

襲いかかろうとした。それを止めようとしたが、時すでに遅く、後ろから現れたアキトに襲いかかったクラスメート全員、一瞬で顔を床に埋められた。

こうしてDクラスの戦力は減り、最初から不利な状況で戦争に挑まざるを得なかった。戦争を申し込まれた以上は勝つと決め、作戦を決めて戦争に挑んだ。だが、奇襲はうまくいったものの、それ以外は散々な結果だった。考えた作戦はFクラスに少しの打撃しか与えず、むしろ悪い方向に向かっていった。その結果、Dクラスは風前の灯火となった。最後のあがきとばかりに教室を出て、Fクラス先遣部隊と交戦する前に、Fクラス本隊に攻撃を仕掛けようとした。だが、悪いことは重ねて起こるらしく、

「Fクラス！」

「吉井明久！」

「アーカーシャ・アキト！」

「そこにいるDクラス全員に勝負を申し込む！ サモン！」
高橋先生を連れたFクラス先遣部隊に出くわしてしまった。

Fクラスside

教室から出てきたから彼らが最後の部隊と思い、先に召喚した二人に続いてFクラスメンバーも召喚していく。

召喚獣を召喚して最後の攻撃を仕掛ける。Dクラスの人たちも召喚していく。

総合点数

吉井明久

点数：1793点 F

アーカーシャ・アキト

点数：1782点 F

VS

Dクラス×8

平均点数：1437点 D

最初に一番前に居るDクラスの召喚獣に斬りかかった。相手もそれに気づき、避けるけど

「お見通しだよ」

返す刀で一刀両断して、戦死させた。後ろから攻撃しようとした人もいたが

「てめえのあいてはこの俺だ！」

その後ろからアキトの召喚獣が剣を突き刺し戦死させた。他のFクラスメンバーも交戦状態に入る。雑魚を無視してDクラス代表に迫る明久とアキトだったが、

「やらせない！」

どこからか矢が飛んできて、それを避けた。

「誰だっ！」

矢の飛んできた方向を見てみると、そこには

「やらせないよ、アキちゃ……吉井君！ アキト君！」

玉野美紀がいた。その瞬間、明久とアキトは顔をしかめた。何故かというところの少女は架空のアイドル『アキちゃんズ』が純粋に大好きな少女だからだ。

ここで説明しておこう。『アキちゃんズ』とは健二の悪ふざけで女装した明久とアキトのことである。しかも秀吉や優子も調子に乗ってメイクまでした状態である。元は演劇の手伝いでやっただけなのだが、そこをムツツリー二こと土屋康太に盗撮されたため一躍学園の隠れアイドルと化した。

正体は不明なのだが、偶々居合わせた玉野美紀に正体を知られ、それ以来、会ったたびに「あときの衝撃をもう一度！」とばかりに女装を迫られている。アキトも彼女の想いだけは純粋なので、武力行使が出来ないでいる。

「ここは通すわけにはいかないの！」

陸が矯正を入れて公私の使い分けができるようにはしたが、彼女が苦手なのはこの二人にとって変わらない事実である。

「僕たちの快進撃はここまでか……」

「少し残念だぜ」

二人は終わったとばかりに意気消沈していた。その様子を見て平賀はまだ勝てると指示を出そうとしたが、明久が平賀の方を見て

「後は任せたよ。秀吉」

と言った。平賀はまさかと思い、後ろを見た瞬間、

「サモン！」

ザンツ！

平賀源二 点数：0 D

戦死した。

「なっ、いつの間に……」

いつの間に自分の後ろに移動したのか平賀には分からなかった。

「Dクラスが明久とアキトに注目しているときにこっそりと近づいてもらったのじゃ」

やりきったとばかりに秀吉は晴れやかな笑顔で言い切り、明久とアキトのところに向かい、

「ナイス、秀吉」

「やったな」

「うむ！」

パンツとハイタッチをした。高橋先生はそれを見終わると終戦の宣言をした。

「Dクラス代表戦死のため、この戦争Fクラスの勝ちです！」

この宣言にFクラス先遣部隊は勝利に喜び叫んだ。

ちなみにこの宣言と同時にFクラス本隊は先遣部隊と合流した。

第十話：Dクラス戦、閉幕（後書き）

どうでしたか？

この次は日常に少し戻ります。

第十一話：終戦後（前書き）

今回はほんの日常の一幕です。どうぞ。

第十一話：終戦後

問題

以下の問いに答えなさい。

(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を1つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次の内どれか。？
？の中から選びなさい。

？ $\sin A + \cos B$

？ $\sin A - \cos B$

？ $\sin A \cos B$

？ $\sin A \cos B + \cos$

$A \sin B$

姫路瑞希の答え

(1) $X = \pi / 6$

(2) ？

教師のコメント

そうですね。角度を『 π 』ではなく『 $\pi/6$ 』で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え

(1) $X = \pi$ およそ3

教師のコメント

およそつけてごまかしたい気持ちは分かりますが、これでは回答に近くても点数は上げられません。

吉井明久の答え

(1) わかりません

(2) ?

教師のコメント

潔くていいと思います。

アーカーシャ・アキトの答え

(1) 答える気はねえ！

(2) ?

教師のコメント

分らないなら吉井君のように潔くなってください。答える気がないなら、何で(2)は答えているのですか。正解している辺り、腹が立ちます。

「そうか、Dクラスに勝ったのか」

「うん。これでAクラスに一步近づいたね」

学校の帰り道、明久、陸、ニーナ、双月、健二、アキトの6人が話しながら歩いていた。

Dクラス戦が終わった後、みんなが喜びに満ちあふれる中、明久とアキトはさつさと教室に帰り、身支度をして下校した。もちろん、戦後の会談は雄二に丸投げである。教室に戻ったとき、丁度放課後になったので廊下であった健二と双月と共に下駄箱まで行った。そこで陸とニーナに会い、今に至るのである。

「さぞかし満足だろう？ アキト？」

「満足できるハズないだろう？ 全員、全然弱いし、玉野に会うし」
「アハハ・・・そうだね」

玉野美紀と戦場であつたことを思い出し、苦虫を噛み潰したような表情にアキトはなつた。明久も苦笑いしている。

「アキトはまだいい方だろう？ 俺なんか戦争に参加してすらいないし」

「お前が出たら速攻でケリが付くだろう？ 我慢しろ」

「でも不完全燃焼もいいところだぜ。はあ」

健二は未だに試召戦争に参加できなかったことを愚痴っていた。双月がそれを我慢しろと言うが、それでも暴れたかったと愚痴り続けている。

「それにしても驚いたよ。まさに陸君の言つた通りの展開になるんだもん。すごいよね」

「坂本の性格を考慮すれば当然のことだ」

明久は陸の予想が的確に的中したことをすごいと賞賛して、陸はさも当然のごとく答えた。

ここで疑問を一つ解決しておこう。さきの試召戦争で明久、アキトの点数が補充試験を受けていないのに点数が表記されていたのに、疑問を持った方もいるだろうか？

アキトは「試験監督を殴り飛ばした」、明久は「途中退室」と言つた理由で本来なら0点のハズ。では、なぜ点数が表記されたのか。答えは簡単。2学年が始まる前にテストを受け直したからである。

陸は明久とアキト、健二に双月がFクラス入りになると聞き、すぐにテストを受け直させた。理由は、陸は去年一年の坂本雄二を見て、恐らく坂本雄二が試召戦争を仕掛けるであろうと予想したからである。坂本雄二は『学力』に関して何かしらの葛藤のようなものがあると思ひ、来年何かすると予想した。そして、それは試召戦争という形を用いた『証明』。表面上の理由など何通りか予測が付くが、深くはわからない。

試召戦争に関してのことなら、必ず学力は必要。故に再試験の要請

を学校側に出した。もちろん、クラス振り分けは関係なしに。

それならばと許可が出て、4人は試験を受け直した。結果、二人は点数が0点ではなかったのだ。

「お前、どんだけだよ」

「いいだろう、別に」

アキトが呆れるが、陸はそれを受け流した。

「明久」

「んっ？ 何、ニーナ」

さつきまで聞いているだけだったニーナが、突然明久に声を掛けた。

「明日の弁当、楽しみにしててね」

「うん。楽しみにしているよ」

二人は互いに笑顔でやりとりをしている。それを見ていた残りの4人は

（あれで付き合っていないって言うから不思議だよな）

（そうか？ あの二人はあれでいいと思うぞ？）

（まあ、ニーナなら妥当かもな）

（お似合いかなぁ・・・）

二人の様子を見て、それぞれの感想を述べていた。上から健二、陸、アキト、双月の順である。

「？ どうしたの、4人共」

「？」

「いや、なんでもない」

4人だけで会話しているのを見て、明久が声を掛け、ニーナが？を浮かべていた。それを陸がなんでもないと微笑みながら切り返す。

これが彼らの些細な日常の一コマである。こうして、6人は仲良く家路につくのだ。

当然のことながら陸の弁当がひっくり返されたのは最初、合流したときに言っていて、陸が「覚えていろ、坂本・・・」と恨み

を込めて呟いていた。

第十一話：終戦後（後書き）

どうでしたか？

今回は急ピッチで作ったため、変な部分もあるかもしれませんが。

気がついたところがあったなら、ご指摘お願いします。

第十二話：お昼ご飯（前書き）

恐怖の最終弁当兵器、登場です。（笑）
まだ導入です。

第十二話：お昼ご飯

問題

以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であつて、（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よく出来ました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の回答に、先生はいつも度肝を抜かれます。

吉井明久、木下秀吉の答え

『波濤』

教師のコメント

それっぽいですが、違います。というより、よく書けましたね。

黒斗双月の答え

『粒子であり、昨今この研究は進んでおり、アニメや漫画でしか表現できなかったことが作れるようになっていく。例を挙げると、ビームライフル。光の研究をするにつれて、副二物として、作れるのではないかと私は思っている』

教師のコメント

いろいろ言いたいことはありますが、小論文を書けという問題ではありません。

明久side

「うあゝ、疲れた……」

「なんで、テストを受けなくちゃならないんだよ……」

「全くだぜ」

「健二は分かるが、お前達二人は昨日、大暴れしただろ」

午前中のテスト地獄が終わって、僕たちはだれていた。そんなに点数減っていないのに何で受けなくちゃいけないの。

Dクラス戦の翌日、僕たちは朝からずっとテストを受けていた。昨日の試召戦争で消費した点数を回復するためだ。しかし、僕たちはそんなに点数が減ってないので、受ける必要はないと思う。だが、Fクラス全員が受けるので、渋々僕たちも受けることに。で、今に至る。

終わってみても、理不尽のよに感じる。

「よし、昼飯でも食いに行くか！今日はラーメンとカツ丼とカレーと炒飯にすっかな？」

「そんなに食って、よく太らないのお」

「ゴリラだから太らないんだろっ？」

「何だとダメエ？」

アキトが挑発して、雄二が睨みつける。やめてよ、やっとテストが終わってだれているときに。不穏な空気が流れる前に、双月君が二人を諷めた。

「あの、皆さん」

みんな食堂に行くみたいな雰囲気になりかけたときに、姫路さんが声を掛けた。

「ん？ どうした姫路…… って、あれ？ その重箱は？」

「あの、昨日の約束の」

昨日の約束？ って、ああ、あれか。みんなも思い出したらしく、一部を除いて喜んだ。

「へえ、本当に作ってきたのか。しかも重箱にだなんて、大変だったじゃないか？」

「いえ、そんな事は…… だから、ご迷惑でなければ」

「ああ、そうだな。ありがたい」

「そうですか？ よかった」

心底安心したかのように安堵の表情を浮かべる姫路さん。うーん、やっぱり可愛いな。

「せっかくの姫路の手料理を、こんな汚いところで食うわけにはいかないな」

「そうじゃの。屋上で食べるというのはどうじゃ」

「そこは面白く理科し「テメエ」の意見は通させねえぞ、健二」
「チッ」

健二君が何か横やりを入れる前に、アキトが被せてなかったことにした。ナイス、アキト。

「それじゃ先に行って場所を確保していきな。飲み物買ってくる」

「あつ、それならウチも行く。1人じゃ持ちきれないでしょ？」

そう言つて、雄二と島田さんは一階の売店へ。僕たちは屋上に向かった。

「風と日差しが心地いいね。絶好のさぼりポイントだ」

「ああ、だがさばれば陸にしめられるからな」

「おぬしら、来て早々にそのような会話をするのか」

屋上に来ての感想を僕とアキトで述べると、秀吉が突っ込む。率直な意見を言っただけだけだなあ。床にシートを広げてみんな座ると、みんな姫路さんの弁当に集中する。二ーナの弁当もあるけど、どんな感じが気になるから後回しだ。

「あの……あんまり、自身がないのですが」

そう言つて、姫路さんが重箱の蓋を開けた。

「……おおっ！」「……」

見事な出来に、僕たちは声をあげた。弁当の具材の配置も女の子っぽくて可愛い。そして、どのおかずもおいしそうだ。

「すごいなあ。さすがは姫路さん、料理も出来るんだね」

「うむっ、いいお嫁さんになりそうじゃ」

「そっ、そんな……」

僕と秀吉が褒めると、姫路さんは恥ずかしそうに照れていた。

「それじゃ、一つもらって……」

「いただき」

ヒョイ。

「あっ、アキトに康太、ずるいよ」

もらわないと損だと思い一つもらおうとすると、アキトと康太が先にエビフライを取って、先に食べようとしていた。

パクッ×2 バタン！×2 ガタガタガタ……

食べた瞬間、二人は倒れて康太は痙攣を起こし、アキトは動かなくなった。

えっ……？

第十二話：お昼ご飯（後書き）

次の話ですが、姫路ファンには少々反感を買いかもしれません。

第十三話：始末（前書き）

今回、真面目な話が入ります。それと同時に美波ファンや姫路ファンは少し注意かも……

第十三話：始末

問題

ベンゼンの化学式を答えなさい。

姫路瑞希の答え

C 6 H 6

教師のコメント

簡単でしたね。

土屋康太の答え

ベン＋ゼン＝ベンゼン

教師のコメント

君は科学をなめていませんか。

吉井明久、アーカーシャ・アキトの答え

B E N Z E N

教師のコメント

後で土屋君と一緒に職員室に来るように

月宮健二の答え

専門的な説明…… よってベンゼンの化学式はC 6 H 6 になる。

教師のコメント

……とりあえず正解にしておきます。

？

僕たちが居た屋上では心地よい風が流れていたが、今では体を冷やす風でしかない。僕たちは時間が止まったかのように硬直していた。目の前には痙攣している康太。倒れたまま動かないアキト。二人は姫路さんの弁当のおかず、エビフライを食べた瞬間倒れた。

「わわっ、土屋君！？ アーカーシャ君！？」

突然倒れた二人に驚いて、姫路さんは配ろうとした割り箸を落とした。心配させないためか、康太は死力を振り絞って起き上がり、

「……（グッ）」

親指を立てた。おそらく「おいしい」と伝えているつもりだろう。

「あ、お口に合いましたか？ 良かったです」

康太のジェスチャーが伝わったのか、姫路さんは喜んでいる。でも、康太の足は未だにガクガクと震えている。

「良かったら吉井君も食べてくださいね」

姫路さんが笑顔で僕たちに勧めてきた。視線が外れた康太は、その場でまた倒れた。笑顔で勧めてくる弁当は、今僕たちにとって脅威になった。

（……土屋はともかく、アキトが倒れるほどの威力か）

（演技には見えなかったの）

（まさかと思うけど、毒物が入っていたり……）

（明久、身内を暗殺するような奴に姫路は見えないぞ）

僕たちは目の前で起こった現状を見て、どうすればいいのか困惑していた。どうしよう……、それしか浮かんでこない。

「……なあ、姫路」

「はい？ 何でしょうか？」

悩んでいると健二君が姫路さんに質問していた。何のつもりなんだ、健二君。

「二人が倒れるほどの旨さなんだ。どんな隠し味を使っただ？」

ナイス、健二君！ 知らないより知っている方が心構えが出来る！ ナイスプレーと心の中で健二君にお礼を言っ、姫路さんの言葉を待つ。

「あつ、はい。実は「おう、待たせたな！ へー、旨そうじゃないか」あつ、坂本君」

雄二「……………」！ 何て間が悪いんだ、お前はツ！

肝心なところを聞こうとしたときに雄二が現れて、姫路さんの意識がそっちの方に向いてしまった。くそっ！ 人が犠牲になっているというのに、何て気楽そうなんだコイツは！ 心の中で僕は悔しかった。恐らく残り3人も同じ気持ちだろう。悔しい顔になっていたと、思っていたら、

「どれどれ？」

パクッ バタン！ ガシャガシャン！ ガタガタガタ

勝手にくたばった。

そのざまを見て、ざまあみろと思ったが、改めて姫路さんの料理が原因と思い知らされた。その様子を見て、島田さんが心配するが、雄二は真っ青に震える顔をこちらに向けて

（毒を盛ったな……）

とアイコンタクトで話しかけてきた。

（違うよ。これが姫路さんの実力だよ）

僕も返事を返した。

さて、雄二の犠牲はどうでもいいとして、これはどうすべきだろうか。雄二はごまかす方向で行くらしい。でも、僕たちは正直に言

った方が彼女のためだと思う。それには原因を探らないと。

「それで、姫路。この隠し味は何なんだ？」

「あつ、はい！ それはですね……」

再度、健二君が問いかける。珍しいことに、健二君の額に一筋の汗が流れている。

「実はおいしくなるように“硫酸”と“クロロ酢酸”を入れているんですよ」

硫酸……？ クロロ酢酸……？ それって、薬品じゃ……、それ以前にその二つを混ぜたら、どうなるの？

（王水が出来る……）

健二君が答えた。王水……それって、猛毒じゃ……
早くそれを伝えようとした瞬間、

ガバツ！

今まで倒れていたアキトが立ち上がった。よかった、生きていた。僕達はアキトが生きているという事実喜んでる中で、

ガシツ！

アキトは姫路さんの弁当を全部掻っ攫った。あまりに突然の出来事で、止める間もなくアキトは弁当箱を持って、備え付きのゴミ箱に向かっていた。そして、蓋を開けて、

ドサツ！

全部ゴミ箱にぶち込んだ。

「……うう」

あまりの暴挙に姫路さんは泣く寸前だ。それを見た島田さんが怒ってアキトに抗議しに行った。

「ちょっと！　いくら何でも酷いじゃない！　何てことをするのよ！！」

アキトの方を掴み、怒鳴る。アキトも振り向き、

「毒物処理しただけっゴフッ！！」

怒鳴ろうとしたが、吐血した。

「ちょっと大丈夫、アキト！！」

姫路さんのことも気になるが、アキトが吐血した方が重要だ。やっぱり無傷とはいかなかったんだ！

「だ、大丈夫だ。明久っガハッ！」

「ああ、もう、喋らないで！　傷は深いんだから！」

喋るたびに吐血するアキトを支えながら床に寝かした。ど、どうすればいいんだ、どうすれば……

「安静にしとけば大丈夫だろう。コイツの免疫力は常人よりも高いからな」

「そうそう、王水ごときで死にはしねえーよ。コイツは」

パニックになった僕に声を掛けたのは冷静に分析する双月君と、笑顔で励ます健二君。二人のおかげで僕もアキトも少しは落ち着いた。

「ちょっと、アキ！　瑞希の弁当をそいつは捨てたなのよ！？　そんな奴ほっとけばいいじゃない！！」

ッ！！

「うるさい！　黙れ！！」

「ッ！！」

アキトを軽く見るような発言に腹を立てた僕は、島田さんに怒鳴った。そんな奴！？　ふざけるな！

「僕にとつては“そんな奴”なんかじゃないッ！　一番の大親友なんだッ！　そんな奴呼ばわりするな！！」

一通り怒鳴り終わると、僕達はアキトの介抱に集中した。

秀吉 side

明久があんなに怒るとはお。珍しいこともあるものじゃ。島田は哑然としていて、明久と健二と双月はアキトの介抱に集中しており、他は驚いている。さて、少しずつ説明しないといかんじゃろうな。

「姫路よ。本来、料理には化学薬品は使用せんのだ。使用した場合はあのように毒物と化し、相手を苦しめるのだ。見ての通り、分かるじゃろ？」

「は、はい……」

今回の惨状を見て、姫路はちゃんと反省しておるようじゃ。よかった。次は島田に。

「島田よ。確かにアキトの行いは褒められたものではないが、明久の前でアキトを軽んずるような発言はやめるのだ。いくら、許せないとしても、唯一無二の親友を侮辱されれば逆にそちらの方が許せんじゃろ？」

島田に諭すように話しかけるが、島田は「何よ……、何でソイツばかり……」とぶつぶつ言うばかりで聞こうとせん。これはダメじやな。明久に怒鳴られたのがよっぽどショックだったらしい。

「あー、すまんが本題に入りたいんだがいいか？」

場の空気を替えるために、雄二は遠慮がちに全員に話しかける。健二が笑顔で

「おう、いいぞ」

と答えた。どうやら一命は取り留めたらしい。良かったのだじゃ。わしも気持ちを切り替えて、雄二の話を聞くことにした。

第十三話：始末（後書き）

こついう話を書くのは少し難しいです。

矛盾しているところがあるかも……

なにかあつたらご指摘の程よろしくお願いします。できる限りは訂正します。

第十四話：作戦会議（前書き）

PVが一万を超えました！ 本当はもっと前に超えていたんですが、アクセス解析がよく分からなかったので（汗）

これからも頑張っていきます！

第十四話：作戦会議

「雄二よ、何故次がBクラスなのじゃ？ 目標はAクラスのハズじやろ？」

秀吉が雄二に対して疑問をぶつける。

あの後、明久、健二、双月の3人の看病もあつて、アキトは横たわりながらも意識を維持し、土屋も復活した。美波は未だに落ち込んでおり、会話には参加しているが上の空。姫路はあの後反省をして、弁当を食べた3人に謝った。その後、雄二が本題に入り、「次はBクラスを落とす」と言った。そして冒頭の言葉である。

「正直に言おう」

雄二は急に神妙な面持ちになる。

「どんな作戦でも、こちらの戦力ではAクラスに勝てない」

これは戦争が始まる前から分かっていたことだ。Fクラスのほとんどが言っていた通りである。

「なぜですか？ アーカーシャ君や吉井君もいますし……」

姫路は昨日大暴れした明久とアキトがいるではないかと言っているが、雄二は頭を振り、

「全員分かつていることだが、FクラスとAクラスの元々の地力が違いすぎるのもあるが、もう一つある」

と一拍おく。そして全員を見て、

「海谷陸だ」

真剣な表情になり、言い放った。これには全員納得している。

「陸か……そうか、アイツと正面切って闘えるのか」

「それは楽しみだな」

「陸君とか……勝てるのかな？」

「アイツか……」

健二、双月、明久、アキトは楽しそうに呟く。彼らのまとめ役と闘えることが楽しみで仕方がないようだ。

「そうか、陸はAクラスにいるのじゃったな」

「……宿敵」

「海谷君ですか……」

秀吉、土屋、姫路の3人は表情を険しくする。

「こいつを相手にして、『試召戦争』で勝てる気がしない」

珍しく弱気な発言に驚く明久達。

海谷陸。彼は文月学園の一年から風紀委員長を務める。以後、風紀委員を手足のごとく使いこなし、学園内の風紀の改善に努めてきた。また、学園内のイベントで指揮や全体司会を務め、教師からの信頼も厚い。健二がイベントを勝手に引き起こしても反省文だけですむのは、彼が裏から手を回しているからだ。

生徒からの人望も厚い。彼自身、東大の教養課程を修了し、高校教師の資格を持つため時折、臨時講師として生徒に勉強を教えている。今や、彼を知らないものはいない程である。

「それじゃあ、ウチらの最終目標はBクラスに変更って事？」

いつの間にか復活した美波が雄二に聞く。

「いいや、そんなことはない。Aクラスをやる」

雄二は変更する気はないとばかりに言う。

「雄二よ、さつきと言っていることが違うのじゃが？」

秀吉は言う。雄二はもったいぶるように

「秀吉、俺は『試召戦争』で勝てる気がしないと云ったんだぞ？」

と言った。何か含みのある言葉に何のことか秀吉達は考える。双月は「つまり、一騎打ちに持ち込むのか」

と思いついたように言った。

「そうだ。そのためにBクラスの存在が重要になってくる」

雄二はその通りと答える。

「そうか！ クラスの設備交換のルールを利用するだね」

明久は分かったように言う。すると雄二は心底驚いた顔になり、

「よ、よく分かったな。明久……」

信じられないとばかりに答えた。明久は「心外だ！」と抗議する。

「Bクラスを落としたら設備を入れ替えない代わりに条件を出す。それを利用してAクラスと一騎打ちにするように持ち込む」
「なるほど」

全員が分かったとばかりに返事を出す。

「じゃあ、明久。宣戦布告の使者を頼む」

「うん、いいよ」

雄二が意外そうな顔をした。拒否されと思ったのだろう。

「いいのか？ アキトはあんな状態だぞ？」

「健二君と一緒にいるから大丈夫だよ」

そう言つて、明久と健二はBクラスに向かった。雄二達は後片付けをしてFクラスに戻る。

おまけ？

片付けの途中、秀吉と土屋

「土屋よ、宿敵とはどういう事じゃ？」

「……ムツリ商会の妨害の首謀」

「ああ……」

おまけ？

同じく片付けの途中、雄二と双月に支えられているアキト

「何で保健室に行かねえんだ、お前は？」

「行ったら姫路が捕まるだろうが」

「そっぴゃ、そっか……」

第十四話：作戦会議（後書き）

次は対Bクラス戦です。
お楽しみに。

第十五話：Bクラス戦、開戦（前書き）

PV2万達成！ これも皆さんのおかげです。

これからも頑張っていきます！

第十五話：Bクラス戦、開戦

問題

以下の問いに答えなさい

『goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ答えなさい』

姫路瑞希、アーカーシャ・アキトの答え

『good - better - best

bad - worse - worst』

教師のコメント

その通りです。アーカーシャ君は英語は得意でしたね。

吉井明久の答え

『good - gooder - goodest』

教師のコメント

惜しいですね。Goodの比較級と最上級には語尾に -erや -estを付けるだけではダメです。覚えておきましょう。

土屋康太の答え

『bad - butter - bust』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

西村先生のコメント

テストの回答に下心を出したために補習だ。

土屋康太のコメント

ッ！？

？

キンコーンカーンコーン

昼休みの終了のチャイムが鳴る。それと同時にFクラスVS Bクラスの戦いが始まる。

「よし、行つてこい！ 目指すはシステムデスクだ！」

『サー！ イエッサー！』

姫路を隊長とした前線部隊が教室を出る。そのまま渡り廊下まで行き、Bクラスと遭遇した。

「いたぞ、Bクラスだ！」

「高橋先生を連れているぞ！」

『ぶっ潰せーーーーー！』

FクラスとBクラスが接触したことで戦いが始まった。Fクラスにとつてこの渡り廊下を制することはとても重要なことである。なので、大半の戦力を注ぎ込んでいると言つてもいいぐらいだ。だが、

総合点数

野中長男 1943点 B

VS

近藤吉宗 764点 F

数学

金田一祐子 159点 B

V S

武藤啓太 69点 F

物理

里井真由子 152点 B

V S

君島博 77点 F

Dクラスとは違い、ほとんどが圧倒されていた。

「全員、無理だと思ったら下がるんだ！ サモンツ！」

Fクラスを鼓舞しながら前線に繰り出してきたのは明久である。出ると同時に召喚獣を召喚した。

「きたぞ！ 吉井明久だ！」

「奴を討ち取れえー！ー！」

「そう簡単にはいかないよ」

Dクラス戦で暴れまくった明久を警戒して、Bクラスが明久に殺到した。明久はその大量の人数を1人ずつ転ばしたり、押しのけたりして回避と防御に徹していた。そして転んだり、体勢を崩した召喚獣を、Fクラスが数人掛かりで討ち取っていく。

「やっちまえ！」

「獲物が転がり込んできたぜえ〜！」

「ちょ、おまつ」

少しずつ減っていくが、

「吉井は数人で食い止める！ 他は雑魚を討ち取れえー！ー！」

Bクラスの前線の指揮官が冷静に指示を出す。それによってBクラスが明久以外のFクラスに襲いかかった。明久が前に出る前も苦戦していたFクラス。案の定、劣勢になり始めた。明久は心の中で舌を打つ。と同時に先ほどのことを思い出した。

『僕個人の力？』

『ああ、そうだ。あくまであればお前とアキトのタッグでの力だ。これからの事を考えてお前自身の力を確かめたい。』

「姫路ともう一人の助っ人はわざと遅らせてもらう。どれぐらい出来るか見せてみる」といった雄二に言葉を思い出す。雄二に言う通りになるのも癪だったが、自分の力を試すには丁度良かったと思っている。だから、この程度の敵で躓くわけにはいかない。

「悪いけど、通させてもらおうよ」

「抜かせ！ Fクラスの分際で！」

「そう言うことは……」

上から襲いかかる二体の召喚獣を一体目に剣を頭に突き刺し、二体目に投げた。体勢を崩した召喚獣に対して追撃を掛けるふりをして、後ろから迫る召喚獣ごと回転切りでなぎ払う。二体とも直撃したらしく、

Bクラス×3 戦死

「倒してから言つてよね！」

戦死した。戦死した召喚獣に構うことなく、下で武器を構える召喚獣に剣を投げた。武器を投げるとは思ってたらしく、頭に直撃して戦死した。着地して武器を拾い、主戦場に向かおうとしたとき、後ろから攻撃が迫っていた。なんとか防いだが、違う方向から迫ってきた召喚獣の攻撃には防御が間に合わない。やられる、そう思った。

「サモン！」

ザンツ！

気づいたら、敵の方が戦死していた。よく目をこらしてみると、
「双月君！」

「待たせたな明久」

柔らかな笑顔を浮かべた双月君がいた。その後ろから姫路さんが走ってきた。

「お、遅れ、まし、た……。ごめ、んな、さい……」

「いいよ、気にしないよ」

「は、はい……。ありが、とう、ござい、ます」

息を整えて姫路さんは前線に繰り出す。

「えっ、あの、姫路さん。ここは今BクラスとFクラスの戦場なんだけど……」

突然現れた姫路さんにBクラスの人たちは疑問に思い、話しかける。そうか、Dクラス戦で姫路さんは出ていないから知らないんだ。

「いえ、これでいいんです」

律儀に返答した姫路さんに対して、Bクラスの人たちはさらに疑問に思う。その油断が命取りだよ。

「Fクラス、姫路瑞希、勝負を挑みます！ 試験召喚獣、召喚（サモン）！」

数学

姫路瑞希 412点 F

VS

Bクラス×5人 平均172点

「えっ！？ 嘘っ！？ 姫路さんがFクラス！？」

Bクラスに動揺が走った。点数もそうだが、姫路さんがまさかFクラスにいるとは思ひもなかったらしい。しかも、それだけではない。

「あっ、腕輪だ」

「そうか。400点オーバーだから当然か」

召喚獣に特殊な能力を付与する腕輪が装着されていた。

姫路さんは召喚と同時に腕輪を発動させた。腕輪から光線が発射さ

れ、2人ほど戦死した。Bクラスはまだ動揺が抜けきってない。

「さて、明久。俺たちも暴れるぞ」

「うん、そうだね」

双月君に声を掛けられて、再び前線に向かう。双月君が前に出るとBクラスの人たちが口々に「まさか……」、「嘘だろ……？」と言いは始める。先ほどは主戦場から少し離れてしまっていたため、双月君が現れたのは知らなかったらしい。

双月君は右手を上に向けて、目をつむり、口上を述べ始めた。

「Fクラス、黒斗双月……」

ゆつくりと、しかし力強く手を右に振り切り、見るものを魅了するかのように優雅に動く。

「ここにいるBクラス全員に勝負を挑む……」

そして目を力強く見開き、宣言する。

「試験召喚獣、召喚（サモン）っ！」

第十五話：Bクラス戦、開戦（後書き）

さて、本格化し始めました。

Dクラス戦、出番がなかった姫路はどれだけ活躍するか。
そして、規格外の一人、黒斗双月が出陣する。

次回もお楽しみに。

第十六話：Bクラス戦？（前書き）

初陣の双月と姫路。彼らはどのような活躍を見せるのか。

第十六話：Bクラス戦？

「んあ、どこに行くんだよ、坂本」

「ちよつと取引にな」

昼休みの昼食のダメージが抜け切れていないアキトは教室で横たわっていた。幾分か回復したが、前線で暴れることが出来るほど回復はしていなかった。かといって、保健室に行くわけにも行かず、教室にいるのだ。

「少し教室を空ける。留守を頼むぞ」

「おい、ちよつと待て……行きやがった」

アキトは一人教室に残った。いや、正確には二人だ。

「おらあ出て来い、健二」

「いや、ばれたか」

「他の奴は分からなくても、俺には丸わかりだ」

健二が隠れていた掃除箱から出て来た。何で入っているのかというと「何となく」らしい。

「どう思う？ Bクラス側の申し出？」

「警戒はしていると思うぜ、数人で行ったしな」

アキトは考える。あのゴリラは罠とか考えないのか。このまま押し切れば間違えなく今日中にケリが付く。なのに、なぜBクラスと今になって取引をするのだろうか。俺には分からない。いや、もしかすると……教室から離れさせることが目的だとしたら……

ガラッ！

教室のドアが急に開いて、数名の人間が入ってきた。

「な、嘘だろ！ あれって、アーカーシャ・アキトじゃねーか！」

「おい、月宮健二もいるぞ！」

「話が違っじゃねーか！ 誰もいないんじゃないのかよ！」

話内容からしてBクラスがそれ関連の奴らだと思われる。なるほど……そういうことか……。

「運が良かったな。俺は今、激しい運動が出来ない状態だ。今ならやりたい放題かもな」

挑発してみる。案の定、クラスの中に完全に入った。

「どうやらそうらしいな。なら……」

ニヤニヤと笑いながらアキトに近づくBクラス。恨みでもあるのだろうか。

ガチャン

と、唐突に鍵が閉まる音がした。Bクラスがドアの方を見ると、

「これで退路は断たれたな」

健二がいた。回り込んでドアを閉めたようだ。急な展開に慌てるBクラス。

「じゃあ頼むぜ、健二」

「おう、任された」

拳を構えて健二は少しずつ近づく。Bクラスはとっさに身構えるがもう遅い。

Fクラスに断末魔が響いた。

前線 side

「舞い散るは桜の花びら……」

召喚獣が登場するまでの間、双月は詩のようなもの喋っていた。優雅にゆったりと……

「この時のみと知りながら儚く散る……」

徐々に姿を現す双月君の召喚獣。

「そこに理由などありはしない……」

他のみんなは全員双月君に見入っている。

「さればこの場にいる敵も意味などなし……」

「綺麗だ……」

誰かが呟く。確かに今の双月君はすごく綺麗に見える。そこら辺のものなど関係なしに。

「ただ、切り捨てるのみ……」

そして双月君の召喚獣が姿を現した。

黒いコートの背中に桜吹雪の刺繍が施されている。中は動きやすい白い服だ。腰には刀を帯刀している。白く雪のような髪が黒いコートと合っていた。これ以上は口では説明できない美しさである。

双月君は一度目をつむり、そして開いて力強く言った。

「参る」

それと同時に敵に突っ込む。Bクラスは慌てて迎撃しようとするが、

「遅い」

ザンツ！

Bクラス×2 戦死

駆け抜けると同時に相手を倒した。何が起こったのか全員分からな
い。

「な、何が……」

「よそ見をしている暇があるのか」

振り向いたときには遅く、言葉を呟いた人は戦死していた。

数学

黒斗双月 450点 F 制限

VS

Bクラス×10 平均 172点

点数が表記された。

「う、嘘だろ……、400点オーバーが二人……」

「しかも、一瞬でやられたぞ……」

Bクラスの人たちの間に激しい動揺が走る。ってゆうか増えてない？ 増援したのかな？

「私も負けていられません！ いきます！」

姫路さんも腕輪の能力を使う。

バシユ！

「えっ、きゃあ！」

「う、嘘！？」

あつという間に二人ほど戦死した。もはや圧倒的である。

明久 side

「頑張るな姫路」

「はい、私のせいでアーカーシャ君が前線に出られなくなりましたから、その分頑張らないと」

二人が余裕を持って話す。それを見て僕は思い知らされていた。遠いなあ……

姫路さんもそうだが、双月君も遠い。二人が現れただけであつという間に戦況は覆り、今やFクラスの優勢である。僕が頑張ってもこうはならなかった。そこに現れるだけで戦況を覆す存在。改めて次元が違うことを思い知らされた。それと同時に僕もこうなりたいと思った。最初から決めていたことで、彼らと出会ってから彼らのように『強くなりたい』と思っていた。

考えを切り替えて前を見据える。双月君と姫路さんが指示を待っているかのようだった。隊長は確か姫路さんだったハズなんだけどね。僕は苦笑しながら、Fクラスに指示を出す。

「敵は怯んだ！ 今だ、突撃——————！」

それと同時に双月君、姫路さん、僕を筆頭に残ったFクラス全員で未だ動揺が抜けていないBクラスに突撃した。

第十六話：Bクラス戦？（後書き）

次回はもしかしたら面白いことが起こるかもしれません。

第十七話：Bクラス戦？（前書き）

今回、物語初キャラブレイク。
イエッ
イ！

第十七話：Bクラス戦？

「殲滅完了」

あれからBクラスと戦った結果、Bクラスの増援を含めてあつという間に全滅させた。双月君の早業と姫路さんの腕輪攻撃、それをサポートする僕とFクラスのメンバーのハイエナ攻撃で。

「案外あつけなく終わったな」

「そうだね。暴れ足りないぐらいだよ」

とりあえず、休憩をして今後の動きを話し合っている。気づけばもう放課後に近い。

「一度撤退した方がいいと思います。みんなボロボロですし……」

「そうだな。足止めでもされれば全滅してしまうからな」

「じゃあ、戻ろうか」

やはり最初の接触したときの部隊のダメージがそれなりに残っており、他のみんなの点数は相当削られていた。またBクラスと戦えば、僕と姫路さん、双月君だけが残ってしまい、集中攻撃の嵐に見舞われて、身動きが取れなくなる。そうなったら終わりだ。

「あの、黒斗君……」

「？ 何だ？」

僕がみんなに撤退の指示を出して、いざ撤退しようとしたとき姫路さんが双月君に話しかけていた。どうしたんだろう。

「どんな風に攻撃したんですか？ 武器を抜いているところがなかったですし……」

「ああ、それは……」

双月君が姫路さんの疑問に答える。

「抜刀術と居合いだ」

「抜刀術と居合い……ですか？」

「そうだ。この二つを織り交ぜながら戦った」

軽く言う双月君だが実際はものすごく難しい。召喚獣でそんな攻撃

が出来るのには理由があるんだけどね。

「アキ、黒斗、瑞希、よかった、見つかった」

そこへ本陣にいるはずの島田さんと秀吉がこちらに来了。

「どうしたの？」

「気になる情報を手に入れたので知らせに来了のじゃ」

「気になる情報？」

「Bクラスの代表はあの根本らしい」

根本？ 誰それ？

「そんなことは百も承知だ」

「なら良いが……」

とりあえず僕たちは教室に戻ることにした。

教室 side

「……何があつたの」

Fクラスに戻り、ドアを開けた先に見た光景は

なんかすつきりした顔になっている健二君とアキトに痙攣しているBクラスの人たちだった。

「いやな？ 教室に奇襲に来了こいつらを、笑い倒したんだよ」

「で、情報をあらかた喋ってもらって、笑わせて気絶させたんだ」

「何をしているんだ、お前らは……」

さも当然とばかりに答えるアキトと健二君に、双月君はため息を吐く。

「そんなことがあつたのか」

「あつ、雄二」

後ろから雄二が現れた。明久はどうして外にいるの？ と聞く。

「さつきBクラス側から申し出があつてな？ それに出ていた」

「そつなの？」

「ああ、停戦協定を結びたいってな」

停戦協定？ 今やって意味があるのだろうか。僕が悩んでいると、

「……（チヨンチヨン）」

「んっ？ どうした、ムッツリーニ」

「……Ｃクラスの動きが変」

「Ｃクラスが？ ふむっ……」

「漁夫の利でも狙おうとしているんだろう？ ずる賢いな」

そうか、雄二は今回も和平交渉で終わらせる予定だからＢクラス戦の後を狙って……。

「いくら何でも連戦はきついよ？ 雄二」

「そうだな……」

僕たち全員が万全ならまたしてもさすがに連戦はきつい。先ほども下手をすれば全滅しかけたし……

「Ｃクラスと不可侵条約を結ぶか。丁度今日の分のノルマはクリアできたしな」

そういつて、僕たちはＣクラスに向かうことにした。向かうメンバーは雄二、島田さん、康太、僕、双月君、健二君だ。

（健二、場合によっては……）

（おう、分かっているって）

小声で双月君と健二君が何か喋っているが、聞こえない。何を喋っているのだろうか？

Ｃクラス side

「Ｆクラス代表の坂本だ。このクラスの代表はいるか？」

「私だけど、何か用かしら？」

雄二がＣクラスのドアを開けて、代表を探す。それに返事を返したＣクラス代表。

？ 何だろう？ 何か視線を感じる。双月君と健二君は気づいたの

か、ある一点を見ている。嫌な予感がする。雄二に相談しようとしたが、話を進めようとしていた。

「ああ、実は……」

ヒラッ

「あっ」

僕が持っていたある絵が落ちた。いけない、いけない。その絵はＣクラス代表の下にいった。Ｃクラス代表の人がそれを拾い、何かと思ひ絵を見た。その瞬間、Ｃクラス代表の人が、

「不可侵じよ」「こ、これは!？」「ッ!？」

急に声をあげた。それに驚く雄二。そんなことお構いなしに全体を見渡しながら声を上げる。

「だ、誰!？ これを持っていた人は誰なの!？」

「あ、それ、僕のなんだけど……」

言った瞬間、目を見開きこっちに來た。なんかさっきより迫力がある。

「あなたも同士なのね!？ これの!」

「えっ、いや同士とかは分からないけど、それは僕が描いた絵だけだ……」

「えっ……まさか、あなたがあの……」

どうしよう、なんの話か全く分からない。健二君と双月君は「まさか……」と言っている。Ｃクラス代表の人がなんか色紙っぽいものとネームペンを取り出して、

「あなたの絵のファンでした! サインください!」
とお辞儀をしながら、差し出した。

えっ、ファン?

第十七話：Bクラス戦？（後書き）

今回、小説の完成度が低かったですね。でも、書きたいと思っていた部分を書いて良かったです。

見事なキャラブレイクを始めたCクラス代表。そして明久の意外な才能？

次回でBクラス戦、終結です。

次回もお楽しみに。

第十八話：Bクラス戦、閉幕（前書き）

今回でBクラス戦は終わり。

明久の絵について色々推理した人たち、がくつと来るかもしれない。

そして、双月の作戦が発動。

健二の力の一片がです。

では、どうぞお楽しみに。

第十八話：Bクラス戦、閉幕

「あなたの絵のファンでした！ サインください！」

僕はかつてないほどに混乱していた。どれぐらい混乱しているかというドラクエでメダパニを受けて、わーい、お花畑だーってスキップしているぐらい混乱している。あれって、以外にやっかいなんだよね。一番嫌の記憶は勇者が混乱して、ギガデインを連発して全滅したときだ。しかも、神竜と戦っているときになったから余計に。っていうか神竜はメダパニを使わないはずだよね？ 何故が使ってきたし。どうしてか悩んでいたら、健二君が「あつ、それ俺が改造したやつだ」って言うてきたからね。難易度が一気に上がったよ。下手なハードモードよりも難しくなっているから、神竜を倒すのに規定のターン以内に倒せないし、そもそも……

「明久、戻ってこい」

「おーい、戻ってこーい、明久」

はっ！ 僕は一体全体何を……

双月君と健二君に呼ばれて現実世界に戻ってきた僕が最初に直視した現実、未だ色紙とサインペンを差し出すCクラス代表であった。……えーと、ファンって？

「この絵です！ この絵とか、他にも描かれた絵のファンなんです！」

それって、趣味で描いた奴なんだけどなあ……。……。

他の人たちも何事かとこちらを凝視している。こんなに見られてると恥ずかしいから、さっさと書きいちゃお。僕は色紙とサインペンを貰い、

「えーと、名前は？」

「小山です！ 小山友香です！」

「小山友香……っ」と

書き終えて色紙とサインペンを渡すと、小山さんは至極幸せそうに

していた。うーん、なんか光栄だな、あんな絵であんなに喜んで貰って。

尋常ではない小山さんの態度を見て、Cクラスの人たちが僕が落とした絵に群がった。すると、数人が小山さんと同じ状況に陥り、同じ対応をする羽目になった。

……何で？

雄二side

「……何が起こっているんだ？」

目の前で起きている状況に俺は戸惑っていた。いや、俺だけじゃない。明久、双月、健二の3人を除くFクラスメンバーは俺と同じく戸惑っていた。そこに双月が来て、

「“二次創作”というのを知っているか？」

と、説明を始めた。

「ある業界の専用用語でな？ ゲームや漫画などの市場で出回っているオリジナル作品の『二次的な創作』とゆう意味だ」

それは俺たちも知っている。インターネットでよく見かけるからな。その中で明久の絵にはすごい評価されていて、その絵の元になったゲームまたは漫画を買ったという人もいるぐらいだ。一部には熱狂的なファンがいるらしい」

恐らく、同士というのもそれだろうと双月は言った。それって、ようはちよっとしたオタクじゃねーか。俺は呆れてものが言えない。ちやっちゃんと終わらすか。

「おい、Cクラス代表！ 話があるんだが……」

「……」

幸せそうな顔をして、話を聞いていない。こいつ……

「おい！ 話があるんだが！」

「……」

「あの、小山さん。話を聞いてくれない？」

「はい！ 何なりと！」

明久の呼びかけに“だけ”に返事を返した。何故だがすごく負けた気になった。まあ、明久には用件を言っただけであるから大丈夫だろう。俺は明久に全部任せることにした。だが、明久は見当違いのことを言い始めた。

「奥に誰か隠れていない？」

「？ 明久、お前何を言っただけ……」

「はい！ Bクラス代表と数人がいます！」

「ッ！ なんだと！ Cクラス代表が言っただけ、Bクラスが奥から現れた。あいつ、根本……」

「友香ッ！ 何でバラすんだ！」

「ごめんなさい、恭二……でも、私……」

根本がCクラス代表に文句を言う。Cクラス代表は沈鬱な表情を浮かべるが、

「“マイスター”の言うことには逆らえないの！」

「そんなに潑刺とした表情で言うなァ……！ 怒ろうにも怒れないじゃないか……！」

なんだこいつら……。そういえばムツツリー二からカップルだと聞いたな。だからCクラスに隠れていて、協定違反を狙ったのか。

「協定違反を狙ったつもりか？ 他の連中ならともかく、明久や双月、そしてこの俺がいるのに気付かないとでも？」

「くっ、ぬかった」

俺の考えを代弁するかのよう健二が挑発する。根本は悔しそうに歯をギリギリと鳴らす。

「気づいていたの？」

「敵を知らねえや……。相手のことを調べずに戦争に望むのは戦略を知らない奴のことだ。こうなることは予測済みだ。まあ、小山がお前のファンだったことは想定外だったが……」

明久が双月に聞いていた。双月や健二にとってはわかりきったこと

ばかりに答えている。

「こうなりやもう作戦も糞もねえ！ 坂本もいるし仕留めてやる！」
やけくそになった根本が俺たちを倒そうとする。くそっ、どのみち
罠にはまっちまったのか！

「長谷川先生！ 召喚許可を！」

「ダメです」

「なっ！ 何で！」

「根本君、君は今召喚獣の召喚許可を求めましたね？ それは協定の『試召戦争関連のことを放課後から翌日の午前中まで関与しない』という条約から違反しています。よって根本君は協定違反したため、Bクラスには明日の戦争まで召喚権はありません」

先生のもつともな正論に根本はしまったと顔をしかめた。助かった、ここで挑まれていたら危なかったぜ……。俺たちが安堵したその時、
「待つてください、長谷川先生」

健二が先生に待ったを掛けた。なんだ？

「Bクラスとはここで戦います」

なっ、何！？

明久side

事態が丸く収まるうとしたとき、健二君がBクラスとここで戦うと言った。なんで？

「おい、健二！ 何を考えてやがる！」

「まあ、落ち着けて、雄二。俺に任せとけ（双月と一緒に考えた策があるから、なあ？）」

「……わかった。お前に任せる」

雄二が突っかったが、健二君の自信満々の表情に押されて引きさがつた。再度、健二は長谷川先生の方を向く。

「……どうしてですか、月宮君」

「簡単ですよ。今日で終わらせてゆつくりしたいからです」

疑問に思う長谷川先生に健二君が答える。

「無論、条件は一つ強制的に受けて貰いますけどね」

「言ってみてください」

「ここにいるBクラス全員、召喚獣を召喚することです。挑戦相手の指定なしで」

「それでは君たちの方が不利なのでは？」

「いえ、これでいいですよ、これで」

「……わかりました。いいでしょう」

その瞬間、健二君と双月君はしてやったりと顔をにやけさせた。ああ、そういうことか。なんて意地悪だろうか、二人は。

「Bクラスもそれでいいですね？」

「……は、はい」

拒否権がないBクラス側は条件をのまざるを得なかった。長谷川先生が数学のフィールドを展開して、Bクラス側が召喚獣を召喚する前に出て来たのは、

「ふう、ようやく暴れることが出来るぜ。だが、一瞬で終わるのもつまらないなあ」

健二君だ。あ、終わったな、Bクラス。

「いくぜ、召喚（サモン）！」

力強く腕を振り上げて召喚獣を召喚する。

直後

バチバチッ！

雷撃を伴って健二君の召喚獣が現れた。

白い装甲に所々赤い線が走っている。腕を組みながら、仁王立ちでたたずんでいる。そのせいか、その召喚獣からはものすごいオーラ

を感じる。よく見たら、スパロボに出てくるヤルタバオトの神化状態に似ている。細かい違いと言えば、足がスポーツシューズという所ぐらいだ。だが、そこからにじみ出る覇気はまるで、霸王。そうこうしている内に点数が表示された。

数学

Bクラス×5 平均176点

VS

月宮健二 450点 F 制限

『4、400点オーバーだと!?!』

「一撃……」

Bクラスと根本君が驚くのを余所に健二君は拳を正拳突きを構えを取る。腕輪が光り、

「ひっ、さあああっ!」

拳を振り抜いた。

ドoooooooooooo!!!

大きな音共にBクラスの召喚獣が全部吹っ飛んだ。

Bクラス×5 戦死

そして、Bクラスとの戦争を意外な結末を持って、幕を下ろした。

第十八話：Bクラス戦、閉幕（後書き）

どうでしたか？

次回は戦後対談です。

第十九話：戦後対談

明久side

「さて、それじゃ嬉し恥ずかしの戦後対談といくか。なあ、負け組代表？」

「……………」

Cクラスから場所を移して、Bクラスの教室。僕たちは戦後対談を始めていた。雄二は何食わぬ顔で根本君を見て、根本君は何も言わずに聞いている。これが勝者と敗者の差……………か……………。戦争に負けた国は、今根本君と同じ気持ちなんだろうな。だからといって、同情は根本君に失礼だ。

「通常ならこのまま設備を交換するんだが、条件次第では設備交換をなしにしてもいい」

それを聞いてざわつくBクラス。みんな設備交換されるとばかりと思っていたから、この提案は思いもなかったらしい。

「……………条件はなんだ」

「条件？ それはお前だよ、根本」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やってもらっただし、正直去年から目障りだったんだよな」

雄二は根本君の痛いところをつくが、周りの人間はフォローしない。本人も分かっているみたいだ。まあ、去年までやっていたことが悪かったからね。陸君に肅正されたけど。

「そこでだ、お前らBクラスに特別チャンスだ。Aクラスに行つて、試召戦争の準備が出来ていると宣言してこい。そうすれば今回は設備については見逃してやる。ただし、宣誓布告はするなよ。あくまで戦争の意志と準備があるただけ伝えるんだ」

「……………それだけでいいのか？」

「ああ。Bクラス代表がコレを着て行って、言った通りにしたら見

逃そう」

そう言い、雄二が取り出したのは女子生徒の制服だ。雄二……君って奴は……。

「ふ、ふざけるな！ 誰が着るか！ そんなの……！」

「Bクラス全員で必ず実行させよう！」

「任せて、必ずやらせるから！」

「それだけで教室を守れるならやらない手はないな！」

「って、おい！ お前ら！ ぐふっ！」

拒否しようとした根本君をBクラスの人たちが腹部に拳を打ち込んで黙らせた。自業自得と言うのかな。でも、少し可哀相だ。これも敗者の宿命かな。まあ、とにかく、

「雄二にそんな趣味があるとはね」

「俺にとっても予想外だ」

「ああ、まさか……」

「「「坂本（雄二）に女装をさせる趣味がある変態だったとは（ね）」「」」

雄二、僕たちはそんな君でも悪友として見てあげるからね。根本君にとって悲惨な状況を僕と双月君、健二君は見ることしかできなかった。

時は進んで、放課後。

「あれ、根本君どうしたの？」

「ッ！？ なんだ吉井か……」

忘れ物を取りに戻った僕は何かを探している根本君に遭遇した。ちなみに、女子生徒の制服のままだ。さつさと着替えればいいのに。僕は疑問をぶつけることにした。

「何でそのままなの？ さつさと着替えればいいじゃん」

「俺の制服が見つからないんだよ」

見つからない？ ああ、そういえば、

「他の人たちが君の制服を捨ててたよ？ 下手したら焼却炉行きかもね」

「な、何！？ くそつ、見つからないわけだ！」

なんかここまで来ると可哀相だな。人生最大の問題を抱えたかのように根本君は唸っている。

「安心して、風紀委員の人が職員室に持って行くのも見たから。多分それじゃないかな？」

「ほ、本当か！？ よし！」

顔を輝かせて根本君は職員室に向かおうとする。僕も忘れ物を取りに、Fクラスに向かう。

「……待て」

「うん？ 何？」

教室に向かおうとした足を止めて、こちらに話しかけてきた根本君の方を見た。なんだろう？

「どうして俺にそれを伝える？ お前もFクラスなんだろう？」

根本君は僕が敵だったのに、どうして助けるのか分からないのか。

僕は少し考えながら、

「うーん、余りにも可哀相というのもあるけど……」

「ぐっ……」

と言った。痛いこと言われたのか、根本君は唸る。自分でも思っていたのかな。

「“昨日の敵は今日の友” ってやつかな？ 戦いが終われば、僕たちは同じ学園の生徒でしょ？ 敵も味方もないってこと」

「……」

根本君が驚いた表情で見ている。そんなに驚くことかな？

「もちろん僕は君に対してはいい感情を持っていないけどね。でも、根本君の作戦自体はいいものだと思うよ？ でも、今後はTPOを守らないと」

「……俺はお前達をはめようとしたんだぞ？」

「それこそいいじゃないか。僕たちがやっていたのは戦争だよ？
互いの領土を懸けて戦うんだ。むしろ、いいと思うけどね」

他の人たちがどう思うかは分からないけど、僕は戦争というのを遊び半分で受けるつもりも、行うつもりもない。幼い頃から他の人たちは違った環境で過ごすのと、彼ら5人の影響でそう思っている。勝つためならどんなことでもする。そんな人も見てきた、だから、

「根本君の作戦自体は良かったと思うよ」

「お前……」

根本君が僕のことを見る。

「でも、少し更正した方がいいよ。陸君に目をつけられているっていうのもあるけど……」

小山さんのことを思い出す。キャラは濃かったけど、容姿は可愛い方だと思う。

「可愛い彼女のためにもね」

「知っていたのか!？」

「人づてに、だけどね」

根本君も可愛い彼女を持つぐらいだから、それなりにいいところがあると思うし。

「小山さんのこと、悲しませるようなことだけはしないでよ」

「……………」

返事はなかったけど、多分分かってくれたと思う。

僕は今度こそ忘れ物を取りに教室に向かった。

第十九話：戦後対談（後書き）

どうでしたか？

いよいよAクラスとの戦いに突入していきます。

次回もお楽しみに。

第二十話：交渉（前書き）

少し場面を飛びますが、そこはご勘弁を。

では、どうぞ

第二十話：交渉

問題

空欄に入る言葉を答えなさい。

女性は（ ）を迎えることで第二次成長期になり、特有の体付きになり始める

姫路瑞希の答え

初潮

教師のコメント

正解です。

土屋康太の答え

初潮と呼ばれる生まれて初めての生理。医学用語では、生理の事を月経、初潮の事を初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が1.5kgに達する頃に初潮を見るものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均12歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境栄養状態などに影響される

教師のコメント

詳しすぎです。

二ーナ・アルレイヤの答え

先生達は変態ですか？

教師のコメント

変態ではありません。これはれっきとした学問であり、けっしていやらしいことは考えおりません。ですから……

吉井明久の答え

先生達は変態ですか？

教師のコメント

……

黒斗双月の答え

先生達は変態ですか？

教師のコメント

……

海谷陸の答え

先生達は変態ですか？

教師のコメント

すみませんでした。

明久 side

「一騎打ち？」

「ああ、Fクラスは試召戦争として、Aクラスに一騎打ちを申し込む」

僕たちは今、宣誓布告のためにAクラスに来ていた。来ているメンバーは僕、アキト、健二君、雄二、姫路、秀吉、康太である。Aクラスの交渉に出て来たのは木下優子さんと、秀吉のお姉さんである。才色兼備で優等生として陸君、二ーナに次ぐ模範生として有名だ。でも彼女には人には言えない秘密がある。まあ、この場では関係ないので黙秘させて貰う。

「一体何が目的なの？」

「わざわざ言わなければ分からないか？俺たちFクラスの勝利が目的だ」

優子さんが警戒するのも当然だ。学年最下位の代表が学年最高位の代表に一騎打ちをしようというのだ。何か裏があるの思うのは当然だろう。

「面倒な試召戦争の手間を省けるっているのはありがたいけど、わざわざリスクを犯す必要もないわ」

「賢明だな」

ここまですが雄二の予想通り。ここからは雄二の腕の見せ所だ。

「ところでBクラスの代表がここに来なかったか？」

「Bクラスって……昨日来ていたあの……」

昨日来た光景を思い出したか優子さんの顔が嫌な顔になる。どうしよう、もう根本君の名誉は回復できないところまでいったのかも知れない。このままじゃ小山さんと根本君の関係が終わってしまうかも知れない。それだけは回避したい。

「ああ、アレが代表をやっているクラスだ。幸い宣誓布告はされていないみたいだが、さてさて、どうなることやら」

「和平交渉で終わらせたって事ね。あくどいわね」

ここで一つ補足。

試召戦争のルールの一つで、戦争に負けたクラスは、三ヶ月の準備

期間を取らない限り自分から宣誓布告が出来ない。このルールは負けたクラスがすぐに再戦を申し込んで、戦争が泥沼化しないための取り決めだ。

ただ、例外がある。優子さんも言ったけど、『和平交渉』で終わらせた場合、上記のルールは適用されない。

雄二はコレを利用して一騎打ちにしようというのだ。

「その通りだ。そしてDクラスでもまた同じ」

ここで雄二は一拍入れて、

「さて、賢いAクラスの方々ならコレがどういう事が分かるよな？」

「……それは脅迫かしら」

「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」

優子さんは顔をしかめる。雄二……今の君は悪役だよ。まあ、変態だからしょうがないか。それにしても陸君が見あたらない。大抵、交渉とかは陸君が出てくるハズなんだけど。

（陸がいない時間を狙ったんだろう？）

（だろうな）

健二君とアキトが僕の疑問に答える。ああ、そうか。勝てる気がしないと言っていたもんな、雄二は。

その間に優子さんは考えを固めたのか、話を進める。

「まあいいわ。その提案、受けてあげる」

優子さんが雄二の提案を受け入れた。うまくいったのかな？

「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうね。お互い5人ずつ選んで一騎打ち5回で先に三勝した方の勝ち、この提案なら受けてもいいわ」

「なるほど。姫路や双月、健二が出てくる可能性を警戒しているんだな」

「まあ、そうね。代表の体調が悪くて負けるって事もあるし、健二や双月君が出て来たら代表じゃ勝てないって事もあるしね」

「わかった。その提案を受けてもいい」

「あら、話が分かるじゃない」

「だが、勝負内容はこちらで決めさせて貰う。それぐらいのハンデはありだろ？」

「え、うーん……」

会話がすべて雄二のペースの元に進められていく。後一押しかな？

「……受けてもいい」

突如Aクラスの奥から声が聞こえた。そちらの方を見ると、Aクラス代表、霧島翔子さんとニーナがいた。

「よっ！ ニーナ」

「お邪魔しているよ、ニーナ」

「うん」

僕と健二君は互いに挨拶した。その間に交渉の席に霧島さんが近づく。

「代表……いいの？」

「うん。そのかわり、条件がある」

「条件？」

霧島さんは雄二を見た後、姫路さんを見て、再度雄二に視線を戻した。

「……負けた方は何でも一つ言うことを聞くこと」

？ なんだかよくある賭け事の内容だな。何でだろう？

僕が悩んでいると、近くで康太がカメラの機器のチェックをしていた。

「……（かちゃかちゃ）」

「……何しているの、康太」

僕の声をつちのけでカメラのチェックをしている康太。こんな時にまで何をしているんだ。こっちでバカみたいなことをやっていたら、向こう側で交渉が終わろうとしていた。

「よし、交渉せ「なにやら面白いことをしているじゃないか」ッ！？」

教室のドアの方から声が聞こえたので、そっちの方を見ると、
「俺も混ぜろよ」

「陸君！」

そこには僕の親友兼教師の海谷陸君がいた。

雄二 side

なんてこった……奴が来る前に終わらせようとしたのに……

「遅かったね陸君。どうしたの」

「委員会の方に出ていてな」

笑顔で会話する明久と海谷の横目に俺は珍しく焦っていた。まずい、早く終わらせないと。

「代表、優子、何の話をしているんだ」

「ああ、丁度良かった。陸君、あのね……」

「ふむふむ……」

木下姉と二ーナから事情を話して貰っている海谷。くそっ、絶対次に交渉の席に着くのは奴だ。もう焦ってもしょうがない。腹をくくって俺は席に着いた。

「なるほど、事情はわかった」

陸は少し考え事をして、俺の方に振り向いた。

「では坂本、一騎打ちは俺も賛成だ。ただし、対戦内容をかえよう」
微笑を浮かべながら、言い放つ。

「5回戦を7回戦、科目選択権をそちらに全て譲渡しよう」

「ッ!? 何だと！」

「ちょ、陸君! さすがにそれは……」

「どうだ、坂本。お前達には有利なことこの上ないが?」

あまりにもFクラスにとって有利な条件に、木下姉が止めようとするが、海谷はかまわず続ける。あまりにも有利な条件に俺は疑問を隠せない。こいつ、何を考えてやがる……。

「確かに嬉しいが、どうゆう了見だ」

「簡単だ、脅威となる奴らはお前達には4人しかいない」

4人だけ……だと？

「明久、健二、双月、アキト。この4人だ」

「……こっちには姫路やムツリーニがいるんだぞ？」

「そいつらは脅威ではない。何とかしようと思えばどうとでも出来る」

「言いやがったな、コイツ……」

「何か秘策があるのかも知れないが、お前が考える策だ。対処できる」

「いいだろう……じゃあ、その勝負受けてやろうじゃないか……」
「交渉成立だな」

終始笑顔を浮かべやがって、後で後悔しても遅いからな！

俺は他の奴らを連れて教室に戻っていった。だが、戻る途中に気がついた。俺はまんまとアイツのペースに巻き込まれたのだと……。その事実には俺は歯がゆい思いをした。

おまけ

「で、何のようだ、健二」

「うん？ ああ、知らせたいことがあってな」

「知らせたいこと？ 何だ」

健二は陸の耳元で寄った。

（実はあの“システム”がついに完成したんだ）

（何！？ あれが！？）

（つきましては陸にご協力お願いしたいのですが……）

（いいだろう、付き合おうじゃないか）

と会話していたが、その密着具合を見て、木下優子に変な妄想をしていたのは言うまでもない。

第二十話：交渉（後書き）

次はいよいよAクラスVS Fクラス戦。

次回をお楽しみに。

第二十一話：開戦、AクラスVS Fクラス（前書き）

Aクラス、第一回戦、どうぞ。

大きく修正をいれました。

第二十一話：開戦、AクラスVS Fクラス

第二十一話：開戦、AクラスVS Fクラス

問題

以下の問いに答えなさい。

『人が生きていくのに必要となる5大栄養素を全て書きなさい』

海谷陸の答え

「？ 脂質 ？ 炭水化物 ？ タンパク質 ？ ビタミン ？ ミネラル」

教師のコメント

さすが海谷君。優秀ですね。

土屋康太の答え

「初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、更に十八歳になっても初潮がないときを原発性無月経と言います……」

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

木下秀吉の答え

「？ ご飯 ？ 味噌汁 ？ たまご ？ 魚 ？ 漬け物」

教師のコメント

あなたの朝食を聞いているではありません。

アーカーシャ・アキトの答え

「？ 脂 ？水化物 ？タンパ質 ？ビタミン ？ミラル」

教師のコメント

「文字足りないだけでこんなに変わるとは思いませんでした。というより狙ってやったのでしょうか？」

「これよりAクラス対Fクラスの一騎打ちを行います」

高橋先生の合図によりAクラスとFクラスの戦いが始まった。場所は大ささの問題でAクラスになった。それぞれの代表メンバーが前に出る。

「なお、この一騎打ちには『和平交渉』、『停戦協定』のルールは使えません。よろしいですね？」

「はい」

雄二と霧島さんの二人が頷く。あらかじめ確認を取らなくても分かっているっていうのに。

Fクラスからは雄二をリーダーとして、健二君、姫路さん、僕、康太、アキト、秀吉の順に並んでいる。

対するAクラスは霧島さんをリーダーとして、陸君、ニーナ、久保君、優子さん、知らない人二人だ。

ここで一つ補足。

特別ルールで学校側から指定された健二君、双月君、ニーナ、陸君、アキトの5人は一回の試召戦争で二人までしか参加できない。理由は余りにも強すぎて、太刀打ちできる人が滅多にいないと言ったこと

である。だから今回双月君は不参加だ。

「それでは早速一回戦を始めたいと思います。両者、選手を出してください」

「では、わしからいこうかの」

Fクラスからは秀吉が出るみたいだ。

「秀吉ー！ 頑張つてね！」

僕の応援に秀吉は手を振って応えた。その姿を見て少し男らしいと思った。

「じゃあ私が行こうかしら」

Aクラスからは優子さんが出て来た。これって……

「し「姉妹対決だど！？」……」

姉弟対決と言おうとしたら他のFクラスのみんなが姉妹対決と言ってしまったために言いにくい雰囲気になった。秀吉に失礼だって……

秀吉 side

「やはり出て来たのじゃな、姉上」

「当然よ。ひねり潰してあげる」

「その言葉、そのまま返すのじゃ」

わしの相手は姉上か……

思えばわしは姉上に勝ったことがあるのは演劇と歌ぐらいじゃ。生まれてこの方勉強関連で勝ったことがない。ここで勝ち星を貰おうかの。

「科目は？」

「世界史でお願いします」

「分かりました。それでは召喚獣を召喚してください」

「「はいっ！」」

わしと姉上は互いに構え、

「「サモン！」」

召喚獣を召喚した。幾何学模様？の陣から召喚獣が召喚され、姿を現した。

わしの召喚獣は袴を着て、薙刀を装備した軽装じゃ。

対する姉上の召喚獣は西洋の鎧を纏い、大きなランスを装備している。

両方の召喚獣が召喚し終えて、点数が表記された。

世界史

木下秀吉 212点 F

VS

木下優子 399点 A

陸の指導のおかげで世界史の点数は上がったのじゃが、さすがは姉上、点数では勝てぬか。じゃが、まだ負けるわけにはいかぬ！

「それでは一回戦、始め！」

「先手必勝じゃ！」

開始の合図と共にわしは姉上の召喚獣に迫る。姉上はその攻撃を避けて、そのまま自分の武器の間に持って行こうとする。じゃが、その間合いもわしの間合いじゃ。わしは即座に体勢を立て直し、

「攻撃の暇は与えぬ！」

姉上に猛襲を掛ける。その猛襲を姉上は受けたり避けたりと防御に徹して、反撃することはない。このまま押し続けられいける。わしはそう確信して、攻撃を続けた。

明久side

試合は秀吉が優子さんに攻撃を続けており、秀吉の優勢だ。このまま行けば秀吉の勝ちかな。僕は秀吉の勝ちだと思い始めていた。

「このまま行けば秀吉の勝ちだね」

「いや、負けるな」

「えっ!？」

僕のつぶやきを双月君が否定する。どうして？ 試合は秀吉の優勢で進んでいるじゃないか。

「一見秀吉が押しているように見えるが、見る点数を」

「？ あっ!？ これって!？」

双月君に言われて点数の表記を見ると、僕は驚愕した。

世界史

木下秀吉 173点 F

VS

木下優子 381点 A

「秀吉の点数が減っている!？」

他のFクラスのみんな点数の方を見て驚愕する。どうして減っているの!？ 優子さんは攻撃していないのに!？

「前転とかして避けているときがあるだろう？ あの時に拳を入れたり、蹴りを入れたりしているんだ、優子は」

そ、そんな……。そんな操作技術どうやって……。

レベルの高い操作技術に僕は愕然とする。あれぐらい出来るようになるにはそれなりの鍛錬が必要だ。ばくや双月君達みたいに何度も使わないと出来るようにはならない。

「陸のことだ。俺たちが試召戦争をやっている間に召喚獣の操作の特訓をさせていたんだろう。相変わらず抜け目のない奴だ」

「おい、待て。それは本当か」

「おおよそだがそうだろうな。陸はFクラスの目標がAクラスと分かっていたからな、対策を施していたんだろう」

「くそっ、見誤った」

雄二が悔しそうにする。そうか、陸君のことだからそれぐらいの対策をしていて当然か。でも、そうだとっても凄すぎる。練習期間はそんなになかったはず。それなのにあれだけの操作技術。やっぱり優子さんは健二君とはいかないけれど、天才なんだろうな。

僕がそう思っている内に戦いに終わりが見えてきた。秀吉……。

秀吉 side

「さすが姉上じゃ……わしの気づかぬ間に点数が減っておる」

「正直私もここまでうまくいくとは思わなかったわ。これも陸君のおかげね」

世界史

木下秀吉 126点 F

VS

木下優子 368点 A

気づいたときには点数が減っておった。わしは一度距離を置いて、考える。

このまま戦っても点数が削られていくだけじゃ。悔しいが姉上の方が操作技術は上らしいの。ならば……

わしは突きの構えを取る。このまま負けるのなら、いつそこで賭に出る。

姉上も答えるように突きの構えを取る。わしは一度深呼吸をして、声を張り上げる。

「勝負じゃ！ 姉上！」

「来なさい！ 秀吉！」

声と同時に互いにものすごいスピードで加速して、激突した。

ガキン！ ガガガガガガガガガガ！

接触部分から大きな火花が散る。

ッ！

よく見るとわしの方が少しずつ押し始める。このまま押し切れば……

…勝てる！

「この勝負、わしの勝ちじゃ！」

わしは勝利を確信して、さらに力を込めた。じゃが、姉上は冷静に

言い放つ。

「それはどうかしら？」

ガッ！ズバンッ！

世界史

木下秀吉 戦死

何が起ったか分からなかった。じゃが気づいたときにはわしの方が戦死しておった。

な、何が起ったのじゃ……

明久 side

「な、なんだ。何が起こりやがった」

「仕込み刀ならぬ仕込み剣か……、そんな武器を使っていたとは……」

……

「何だ、分かるのか？」

「秀吉が勝利を確信した瞬間に、優子はランスに仕込んであった剣を取り出して拮抗を崩し、体勢が崩れた秀吉の召喚獣を切り裂いたんだ」

雄二の疑問に双月君の説明が入る。そうだったんだ……。秀吉の方を見ると明らかに意気消沈していた。あとちよつとだったのにね……

秀吉 side

「あとちよつとじゃったのに……」

状況を理解したわしは悔しくて、手を握りしめていた。

「勝利を確信した瞬間に油断したのが不味かったわね。あんたの敗

北よ」

姉上がわしの敗因を述べる。確かに最後、勝てると思い油断してしまったのじゃ。それさえなければ……。悔しくて顔を上げることができぬ。

「でもまあ、点数も上がっているって点は認めてあげるわ」

「姉上……」

唐突に姉上から優しい声が聞こえたので、顔を上げて姉上を見るとそこには

苦笑しつつも笑顔の姉上がおった。

……

「……姉上も変わったのじゃ、健二と出会って」

本当に変わった……。前まではわしにこんな顔を向けてくれなかったのに……。

やはり健二の影響力はすごい。

「当たり前よ。かつて私の価値観をことごとくぶっ壊していくんだもの、変わらざるを得ないわ」

苦笑しつつ笑顔で姉上が返す。

わしもまだまだじゃ……。さらに精進せねばならぬの。

「次は負けぬぞ、姉上よ」

「何度でもひねり潰してあげるわよ、秀吉」

わしと姉上は互いに向き合い、力強く握手をした。その光景を見て、互いの陣営から拍手が起こった。

「……一回戦、Aクラスの勝利です！」

高橋先生の言葉で、一回戦は幕を閉じた。

第二十一話：開戦、AクラスVS Fクラス（後書き）

どうでしたか？

次は2、3回戦の予定です。

次回もお楽しみに。

第二十二話：2、3回戦（前書き）

注意）今回は少し過激な描写を含みます。読む場合は心して読んでください。

それではどうぞ。

第二十二話：2、3回戦

問題

バルト三国と呼ばれる国名をすべて上げなさい。

姫路瑞希の答え

リトアニア、エストニア、ラトビア

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

フランス、ドイツ帝国、ロシア帝国

教師のコメント

歴史と地理がごっちゃになっていますね。それは『三国干渉』です。

土屋康太の答え

アジア、ヨーロッパ、浦安

教師のコメント

土屋君にとっての国の定義が気になります。

アーカーシャ・アキトの答え

京都、大阪、江戸？

教師のコメント

アキト君もですか。

明久 side

「すまぬ、負けてしまったのじゃ」

「残念だったね、秀吉」

一回戦で敗北した秀吉が申し訳なさそうにこちらに帰ってきた。僕は秀吉を労る。

「どうする坂本。出鼻をくじかれたぞ」

「なに、想定外のことこそ起こったが、まだ挽回できる範囲内だ」
双月君の問いに雄二が返すと、康太の方を向いて、

「ムツツリーニ、次を頼む」

「……（コクツ）」

と言った。康太は分かったとばかりに頷く。康太が……、今まで触れなかったけど、彼は秀吉と同じで一科目特化型の人間だ。彼のあだ名「ムツツリーニ」は「ムツツリスケベ」。異常なまでにいやらしいことに執念を見せることから、保健体育の点数がずば抜けて高い。陸君は脅威じゃないって言うけど、保健体育で勝負を仕掛けられるとほとんどの人は勝てないため、充分脅威になりうる。陸君はどうするのだろうか。

「両者、二回戦の選手を出してください」

高橋先生の呼びかけと共にムツツリーニが前に出る。対するアクラスは……誰だろう。見たことがない女子が出て来た。

「科目はどれにしますか」

「……保健体育」

「分かりました。では両者、召喚してください」

「はい」

ムツツリーニが科目を選択して、高橋先生が召喚を促すと、Aクラ

ス側の女子が返事をして召喚する。康太は静かに召喚した。
Aクラス側の女子は動きやすい軽装の鎧を纏い、両手には手甲がついている。

康太の方は忍者のような出で立ちで、小太刀を逆手に持っている。
召喚し終わると点数が表記された。

保健体育

佐藤美穂 356点 A

VS

土屋康太 572点 F

「な、何だ！？ あの点数は！？」

Fクラスにしてはあり得ない点数にみんな驚く。だよねー、普通はあんな点数取れないよねー。Aクラスが騒いでいる内に康太は腕輪を使用して

「……加速」

ヒュッ！ ズバツ！

保健体育

佐藤美穂 戦死

倒していた。あまりの早さに佐藤さんは啞然。康太は何も言わずに戻ってきた。

「よし、これで一勝だ。次は……」

スクッ。 スタスタ。

雄二が誰が出るか考えていると、アキトが立ち上がって前に出ようとした。雄二は慌てて止める。

「おい待て！ 何勝手に出てやがる」

アキトは雄二に振り向いて言った。

「ここで一気に二連勝した方が勢いづくだろう？」

自信満々に言い放つアキト。その姿はとても頼もしく見える。

ただ、僕の方を見て言っているけどね。露骨に無視された雄二は青筋をピクピクさせている。全くアキトは……

そうこうしている内にアキトは背を向けて進む。

「必ず勝つて信じているよ、アキト！」

「おう！ 任せろ！」

僕の応援に背を向けながら僕の応援に応える。アキトのことだから心配ないね。僕はアキトの勝利を確信していた。

アキト side

俺は明久の声援を受けて前に出た。さあーて、生け贄はこの誰だ。Aクラスの方を見ると、

「では僕が行こう」

久保利光が出て来た。陸を見る限りどうやらこいつが俺の相手らしい。

こいつか……

正直俺はコイツを明久に近づけたくない。なにしろコイツは一人の『男』として明久のことが好きなのだ。同性愛を否定する気はないが俺の大親友をその道に行かせたくはない。っーか行ってほしくねえ。何だか複雑な気持ちで俺はコイツと対峙した。

「科目はどうしますか？」

「英語」

「分かりました。では、両者召喚してください」

「うーす」

「はい」

「「サモン！」」

科目を英語に設定して召喚獣を召喚する。

久保の召喚獣は法衣でいいのか？ それっぽいものを纏って、普通の鎌より小さめの鎌を二本両手で持っている。

英語

久保利光 4 1 2 点 A

VS

アーカーシャ・アキト 4 4 2 点 F

点数を見て、そこまで手こずらなさそうだと、俺は樂觀視した。

いくら陸の訓練を受けたからといっても、実習の後何度も健二の実験の手伝いや明久の手伝いをしてきた俺の敵じゃねえ。

俺は自分の召喚獣を構えさせる。

「アーカーシャ君。君に二つ言いたいことがある」

ああ？ 何だ？

唐突に久保が話しかけてきて、警戒しながら話を聞く。こんな時になんだよ。

「君は吉井君の親友と聞いている。だが君はどうも思わないのか」
ああ？

「君の悪評は僕や他の人も知っている。とんでもない乱暴者だとね」
だからなんだよ。

「そんな君が吉井君の側にいれば、自然と吉井君にも悪い噂が立つんじゃないかな？」

.....

「それならば君は日頃の態度を改めるか、吉井君の側を離れるべきだ」

.....

「それがわからない君じゃないだろう？」
.....ぜえ

「僕が言いたいのはそ.....ぜえ」？

「うぜえんだよ！！！！ てめえーはあ！！！！」

俺は今までの久保の声をかき消すかのように叫んだ。

何なんだコイツは！！！！ いきなり人のことを四の五の言いやがつて……！！！！ しかも明久の側を離れるだあ！！？ てめえに俺と明久のことを四の五の言われる筋合いなんざねえんだよ！！！！ あっという間に終わらせてやろうかと思っただが予定変更だ……惨たらしく殺す！！！！

「フルシンクロシステム、起動。……シンクロ完了……」

コイツの召喚獣を殺す為にシステムを起動させる。

殺す、殺す、殺す、殺す、

「覚悟しろ！！ てめえーはただじゃころさねえぞ！！」

クロス！

雄二 side

アキトの叫び、いや咆哮というべきか。その後アキトは召喚獣を久保の召喚獣に一気に接近させた。久保は我に振り返り迎撃するが、アキトは久保の召喚獣の左腕を取り、

ブチッ！

一気に引き抜いた。

腕がもげた久保の召喚獣はあまりの痛さに、引き抜かれた腕の付け根を押さえて悶絶した。そこにアキトは頭を踏み抜いた。痛さに気

絶したのか、久保の召喚獣は気絶した。アキトは攻撃の手をゆるめず、右足を掴み左腕同様、

ブチッ！

引き抜いた。引き抜いた足をそこら辺に捨て、顔を持ち上げて、

ドゴッ！

膝蹴りを顔に入れた。それは尚も続く。

ゴスッ！　ゴスッ！　ゴスッ！

「ウッ」

「……（ガタガタ）」

あまりに凄惨な光景に周りの人間は吐き気を催す奴や、恐怖する奴と様々である。俺は恐怖しているわけでもなく、怯えているわけでもなく、ただ立ちすくんでいた。

「先生！　試合はAクラスの降伏でいいです！　召喚フィールドを消してください！」

陸の声に高橋先生は我に返り、召喚フィールドを消した。消えると同時にさっきまでの光景も消えた。俺はさっきまでの光景がまだ生々しく残っていた。

「アキト！」

明久がアキトに近づく。とっさに止めようとするが、その前に明久はアキトに近づいた。

「アキト、怒るのは分かるけどやり過ぎだよ。」

「……（ハアハア）ああ、すまね」

明久はアキトに気遣いながらも、さっきの行いを咎める。それをアキトは素直に受ける。明久の奴、勇気あるな……。いや、明久だから

らできるのか？

アキトは茫然自失の久保を睨みながら、

「……言っていていいことと悪いことの判別ぐらいつけやがれ……」

そう言つて、明久と共にこちらに戻ってきた。だが今の奴に近づくと奴は健二と双月と明久だけだ。久保も陸に引き摺られて戻つていった。

勝つたには勝つたが、一つだけ分かったことがある。

アキトには明久との関係に関してイチヤモンつけてはいけないということだ。

今後、気をつけるよう。俺は心に固く誓い、前に向き直った。

第二十二話：2、3回戦（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみに

第二十三話：4回戦（前書き）

前回と違い、真面目な部分が入りますが明るい雰囲気です。

では、どうぞ。

第二十三話：4回戦

問題

P K Oとは何か、説明しなさい

黒斗双月の答え

P e a c e - K e e p i n g O p e r a t i o n s : 国際連合平和維持活動。

国際紛争に対処し、国際的平和および安全を維持するために、国連総会または安全保障理事会の決議に基づき、国連の統括の下に行われる活動。交戦部隊の引き離しや治安回復を目的とする平和維持軍（P K F）、停戦確保のための停戦監視や武力紛争終了後の民主的な手段での統治組織の設立のための選挙監視などの活動がある。

教師のコメント

そうなのですか。逆に教えられました。

土屋康太の答え

P a n t s K o s h i - t s u k i O p p a i の略。世界中のスリーサイズを規定する下着メーカー団体の事

教師のコメント

君は世界の平和をなんだと思っているのですか。

吉井明久の答え

P = 平和な K = 小鳥の O = お皿

教師のコメント

とても穏やかなお皿ですね。先生も一つほしいです。

明久 side

「それでは4回戦の選手を出してください」

先ほどの状況から立ち直った高橋先生が両方から呼びかけが掛かった。そろそろ出ようかな。

「よし、頼んだぞ明久」

「はいはい」

僕は雄二の声にどうでもよさげに返事した。これまでのことを考えれば当然だと思う。僕はやる気なさげに向かう。だめだ、雄二に頼まれたら力が出ない……

「頑張るのじゃぞー、明久よ！」

「一気に決めてしまえ、明久！」

「やっちまいえ！」

「頑張れよ、明久！」

「うん、任せて！」

秀吉、双月君、アキト、健二の四人に応援されて僕は気合い十分とばかりに前に出る。

「明久君はやっぱりもてますね……」

「なんであいつらばかり……」

？ 何だろう？ 変な誤解を生んだような気が……。まあ、いいか。僕が前に出ると、Aクラスから見知らぬ人が出て来た。緑髪のショートヘアが特徴的で、パツと見明るそうな女の子だ。

「一年の終わりに転入してきたから自己紹介させて貰ってもいいかな？」

「ご丁寧に向こうから自己紹介をしてくいいのか聞いてきたので、聞くことにする。」

「どうぞ」

「じゃあお言葉に甘えて……」

そうすると一呼吸入れて、自己紹介を始めた。

「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

「あ、はい。よろしく」

僕も返事をする。

「科目は？」

「日本史をお願いします」

「分かりました。では両者召喚してください」

「はい！」

僕と工藤さんが返事をして、

「サモン！」

召喚獣を召喚した。僕の召喚獣はいつも通り、改造学ランに日本刀で犬耳と尻尾である。

対する工藤さんの召喚獣は夏服セーラー服に巨大な斧のちよつとアンバランスな召喚獣である。二人の召喚獣が召喚されて点数が表記される。

日本史

吉井明久 434点 F

VS

工藤愛子 408点 A

「何だあの点数は！？」

「さっきから何なの！？ 本当にFクラスなの！？」

僕の点数を見てAクラスの人たちがざわつく。まあ、さっきからA

クラスレベルの点数をたたき出せば当然かな？　僕は目の前の戦いに集中する。

「吉井君だっけ？　陸君から君の話は聞いているよ？」

「？」

唐突に工藤さんが話しかける。なんだろう？　さつきみたいに集中力を乱す作戦かな？　そう考える内に工藤さんは話を続ける。

「召喚獣の操作が他の人と比べて、ずば抜けてうまいんだってね」
まあそれが僕の武器だしね、もしかして何か秘策ありかな。僕は少し身構える。

「だったら吉井君は“あっちの操作”も上手なのかな？」

意味ありげに工藤さんが微笑む。あっちの操作？

「僕ね？　得意科目は保健体育なんだよ。……保健の“実技”のね

」

えっ、それって……。

いきなりの問題発言に僕は集中力が完全に乱れて、あらぬ方向に思考が行く。保健の実技といったらあれしかなくて……いや待て、落ち着け吉井明久！　救命措置かも知れないんだぞ！　いや、あれは体育の実技だ。えっ、じゃあ、まさか……

顔が赤くなっていくのが分かる。

えっ、嘘、それって、もしかして……

工藤さんはさらに誘惑するように微笑む。僕はそれに釘付けだ。

「吉井君とならいいかもって思っているだよ？　案外可愛い顔しているし、大切にしてくれそうだし……」

工藤さんが指を制服に掛ける。僕はゴクリとつばを飲む。まわりが（特にFクラスが）騒いでいるのが臍気に聞こえるが、どうでもいい。僕は工藤さんから目を背けなくなっていた。工藤さんは、

「してみる？ 保健の“実技”？」

「あっ……」

お、お願いしま……

「隙あり」

へっ？

ドガッ！ バリバリバリバリ！
ッ！！

「がああああああああつ！？」

突如襲った身を引き裂かれるような痛みと電撃に僕は絶叫を上げて悶絶する。

ぐわっ！ い、一体何が！？

「………明久！」「………」

「よ、吉井君！？」

いきなりの悲鳴にアキト、秀吉、双月君、健二君、陸君、ニーナが急いで駆け寄ってくる。工藤さんも驚いて困惑しながらも近寄って

くる。

「大丈夫か、明久！ 意識はあるか！」

「しっかりして明久！ 気を失わないで！」

「意識を失ってはならぬぞ、明久よ！」

「……大丈夫だ、外傷にはなっていない」

「そうか、良かった」

「……すまない明久。作戦とはいえ、ここまでとは」

「えっ、何！？ 何が起こったの！？」

アキトと秀吉とニーナが僕に声を掛けて、双月君が診断して、その結果に健二君がホッと一息つく。工藤さんは何が起こったか分からず、パニックになりながらもみんなに尋ねる。

「……観察処分者のフィードバックシステムだ」

そこに陸君から説明が入る。そう、この痛みはそのシステムのせいである。

観察処分者とは学生生活を営む上で問題のある生徒に課せられる処分であり、教師の雑用として働く。

本来召喚獣は現実世界に物理干渉は不可能なのだが、観察処分者は召喚獣を使って教師の雑用をこなすことがあるため、特例として物理干渉が可能になる。だがその代償として3割ほど召喚者にフィードバックされるのである。

つまり先ほど工藤さんの攻撃を受けた時に、僕の召喚獣のダメージが僕に三割フィードバックしたのでこんな状態に陥ったのである。

外傷はないのだが、斬られた感触と感電した感触が生々しくまだ体に残っている。

「そ、そうだったんだ……」

説明を聞いた工藤さんは明らかに申し訳なさそうな顔になっている。僕は幾分か引いた痛みを抑えて工藤さんに言う。

「工藤さんが気にする事じゃ、ないよ。これは、僕が、選んだこと、なんだから」

うう、スラスラ言えないのが悔しい。これじゃあまだ痛がっている

って証拠だ。

「で、でも……」

「工藤」

工藤さんが言葉を続けようとすると、双月君がそれを止める。

「こいつはこうなることも分かって戦いに望んでいるんだ。分かっ
てやってくれ」

「……うん」

双月君の言葉に工藤さんは少し考え、返事をする。このことで罪悪
感を感じていなければいいけど。

「4回戦、Aクラス側の勝利です！」

高橋先生の言葉で4回戦は終わった。僕たちはそれぞれの陣営に戻
っていく。

「明久！ 作戦とはいえずまなかった！」

「体に気をつけてね！ 明久！」

「なんなら後で本当にやってあげるからね！ 吉井君！」

ちよ、工藤さん！？ 何言っているの！？ 魅力的な提案だけど、
遠慮させて貰おう。僕はアキトに担がれて、Fクラスの陣営に戻っ
ていった。戻る途中、何が起こったか聞くことに。

「お前は工藤の誘惑に負けて、完全に召喚獣から目をそらしてしま
ったんだよ」

「そこに工藤が付けいったというわけだ」

「まあ、ありやあしょうがねえよ。思春期の男子ならほとんどが反
応するって」

「そうじゃな。むこうの作戦勝ちじゃ」

アキト、双月君、健二君、秀吉の順に説明を受けて、僕は少し情け
なくなった。戦いをしようとしたのに誘惑に負けるなんて……。今
度は精神面も鍛えるようにしよう。僕たちはFクラスの陣営へと戻
っていった。

おまけ

Fクラスの陣営に戻った僕だけど……

「さぞかしいい気分だろう？ 明久」

雄二はものすごい良い笑顔で待っていて、

「ふざけんな、なんででめえーだけ良い思いしているんだ！」

「そうだそうだ！ 俺もお誘い受けたかった！」

「負けて当然だ！ この野郎！」

クラスメートから大批判を受けて、

「吉井君にはそういうことは必要ありません！」

「そうよ！ アキには永遠に必要ないわ！」

姫路さんと島田さんに大人の一步は必要ないと言われ、

「……殺したいほど妬ましいッ！」

鼻血を流しながらの康太に憎まれた。

……なんだろう、この超アウェーな感じは……泣けてくる。

僕は双月君の腕の中で泣いた。双月君と秀吉がよしよしと頭を撫でて、健二君が背中をさすってくれた。僕、何かした？

泣いている最中、Fクラスから悲鳴が上がったが、僕は知らない。

第二十三話：4回戦（後書き）

どうでしたか？

次回はとうとうAクラス規格外が出陣します。

次回もお楽しみに。

第二十四話：5回戦（前書き）

どんどん感想が増えて、嬉しいです。

他の方々もどうぞ感想をください。

それではどうぞ。

第二十四話：5回戦

問題

以下の文章の（ ）にはいる正しい物質を答えなさい。

ハーバー法と呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合、用いられる材料は塩化アンモニウムと（ ）である。

姫路瑞希の答え

水酸化カルシウム

教師のコメント

正解です。アンモニアを生成するハーバー法は工業的にも重要な内容なので、確実に覚えておいてください

土屋康太の答え

塩化吸収材

教師のコメント

勝手に便利な物質を作らないように

明久side

「5回戦を始めます。それぞれ選手を出してください」

アキトのFクラスに対する肅正が終わったところを見計らって、高橋先生は次の試合を促した。殴る蹴るの応酬をしていたのにそれを

綺麗にスルーするとは、伊達に学年主任ではないようだ。

「ひ、姫路、頼む」

「はっ、はい！ 行つてきます！」

アキトによつて瀕死状態の雄二が姫路さんに声を掛け、姫路さんが前に出る。大丈夫かな……姫路さんにこんな場面を任せて。僕は雄二に声を掛けた。

「雄二、大丈夫なの？ 姫路さんに任せて……」

3回戦目以降から気づいていたけど、陸君はこちらの代表者が誰か見てから対戦相手を決めている。だから姫路さんに対しても……、それに気づかない雄二ではないだろうが。

「大丈夫だろう。姫路は翔子の次に強いと言われているからな。Bクラス戦でお前も間近で見ただろう？」

そりゃ、そうだけど……。僕はいまいち釈然としない。

「それに見ろ、次の相手」

？ ……あつ。

次の相手を見て僕は納得した。次に出て来たのはたなびく金髪のポニーテール、女子なら誰でも望むであろうスタイル、双月君や秀吉にも引けを取らない美貌。

僕の親友の一人、ニーナだ。

「アイツも規格外と聞いているが、他の四人ほどの噂を聞かない。だからそこまで警戒する必要はないだろう」

雄二は軽く見ているが、ニーナもまた立派な規格外である。

ニーナは雄二の言つたとおり、噂はそこまでない。だが彼女は小学生の時に全国大学模試で一位を取り、以来陸君と健二君、双月君の三人が現れるまでずっと一位をとり続けた。また槍術を学んでおり、ある程度の武術も出来る。悩みを持った人が彼女に相談してくるときがあるので、相談役としてもうってつけた。それに彼女の召喚獣の腕輪能力も一対一において、僕たち5人以外では絶対無敵を誇ると言っても過言じゃない凶悪な能力がある。

そうなるとこの戦いは……

「次は健二か」

「……」

「今はほっとけ。新システムの最終チェック中だ」

「えっ、とうとうお披露目なの？」

僕は次の戦いに意識を持つていくことにした。

「……お前ら、何で姫路の試合そっちのけで話しているんだ？」

雄二が咎めるような感じでこっちに話しかけてきた。ああそうか、雄二は知らないんだった。

「雄二、この試合確実に負けるよ」

「はあ？ 何言ってやがる」

バカなこと言うなとばかりに呆れるけど、これはもうわかりきったことだからね。

「ここで姫路が勝って、健二で引き分け、そして俺で終わる。坂本はそう考えているだろうが、そうはならない」

「なんだよ、てめえーらはそんなに姫路に負けてほしいのかよ」

「そうじゃないが……まあ言うより見た方が早いな」

双月君が雄二に対してそう言った。雄二は険しい顔のまま、試合の方に顔を向けた。

雄二 side

アイツらなんだってだ？ あんな事言いやがって……

俺は試合の方に顔を向けた。

「科目は？」

「総合科目でお願いします」

「分かりました、それでは召喚獣を召喚してください」

「はい」

高橋先生の要求に姫路が答え、二人が召喚する。

「サモン！」

声と同時に召喚陣が現れて、召喚獣が姿を現した。

姫路の召喚獣は西洋の鎧に身の丈を超える大剣を身につけている。対するアルレイヤの召喚獣は昔の日本軍将校の制服に二本の槍を両手に一つずつ持っているアンバランスな召喚獣だった。

二人の召喚獣が完全に召喚されて点数が表記される。

総合科目

姫路瑞希 4409点 F

VS

ニーナ・アルレイヤ 5000点 A 制限

「な、なに！？」

何だあの点数は！？ しかもあれで制限付きだと！？ 余りにも高い点数に俺は驚きを隠せない。

「姫路さん、点数上がったよね？」

「でもアルレイヤさんには敵わないね」

Aクラス側から声上がるが、俺にはどうでも良かった。くそつ、アイツらの言っていたことはこういう事だったのか！

「……点数、上がったね」

声がしたので見てみると、アルレイヤが姫路に話しかけていた。奴も姫路の点数がここまで上がるのが驚きなのか？ だったらまだ勝機はある。

「……私、このクラスのみんなが好きです。人のために一生懸命なみんなの居る、Fクラスが」

「……好き？」

「はい」

アルレイヤの眩きに対して姫路は今の自分の気持ちを言うかのように言う。それに反応するアルレイヤ。そして姫路が大きく息を吸って、言い放つ。

「だから、点数差があっても私は負けません！」

「……そう」

姫路の言葉に対して一度目を瞑り、開く。その瞬間、

ゴウッ！

アルレイヤの雰囲気が増した。こいつ、こんなことも出来るのか！？

「……私はFクラスは嫌い。明久を苦しめる人たちが居るから」
アルレイヤは召喚獣を構えさせる。

「フルシンクロシステム起動……シンクロ完了……」

ぶつぶつと何か言っている。なんだ、シンクロ？ 俺の疑問を置いていきアルレイヤが言い放つ。

「大丈夫、一瞬で終わらせてあげる」

「それでは試合開始！」

アルレイヤの言葉を引き金に勝負が始まる。姫路は大剣を大きく振りかぶり、腕輪を発動させようとさせる。アルレイヤも槍を投擲しようとしながら、腕輪を発動させようとさせる。そして片方は光線、片方は槍を発射させた。

槍と光線がぶつかり光線が打ち勝ちそのままアルレイヤの元にはなく槍が打ち勝ち、そのまま姫路の方に飛んでいった。慌てて大剣を盾にするが、

バキヤ！ ドスッ！

姫路瑞希 戦死

大剣も鎧も貫通して、心臓部を貫いた。

「5回戦、Aクラス側の勝利です！」

高橋先生がAクラスの勝利を宣言する。なんだ、今の能力は。

陸side

「お疲れ様、ニーナ」

「うん」

こちらに戻ってきたニーナを俺は労った。ニーナもそれに答える。さてと、俺は一呼吸付けてここまでのことを考える。

全て、俺の作戦通りに進んだ。最初の優子と秀吉では、優子が操作技術で秀吉に勝つと踏み、土屋とアキトの二人は勝負を捨て、明久は心理戦で封じ、姫路はニーナをぶつける。次で健二に勝てば、Fクラスに止めをさせる。あと一息だ。坂本がアイツらうまく生かし切れなかったのがFクラスの最大の敗因か？ 実際言うところまでうまくいくとはおもはなかったため、内心ほくそ笑む。

それに、わざとこういう状況に持ち込んだからな。俺は出てくるであろう健二を見据えて、笑う。

そうではなくては面白くないだろう？ なあ、健二？

明久side

「アイツの腕輪能力は何なんだ？」

雄二が僕たちに聞いてくる。珍しいな、雄二が僕たちに聞いてくるなんて。双月君が雄二の質問に答える。

「アイツの腕輪能力は『絶対貫通、必中』だ。先に行っておくが、この二つの能力で一つの能力だからな」

「なんだそりゃ……ありえねーだろ」

双月君の答えに雄二はあり得ないと連呼している。まあ、そうだね。腕輪能力は一人一つのハズなんだけど、ニーナの召喚獣だけどうし

て二つ能力が付与されている。コレに関しては健二君が現在調べている途中だ。

「すみません……負けてしまいました……」

落ち込みながら姫路さんが戻ってきた。みんな気にしてないで声を掛ける。

「しょうがないよ、姫路さん。相手が相手だから」

僕は慰めるために声を掛ける。姫路さんは「でも……」と言いつのる。ああー、もう！

「大丈夫だつて！次で健二君が敵を取るつて。ねえ！」

僕は強く労る。姫路さんも元氣を取り戻しようで、元氣に「……はい！」と返事をしてくれた。

何はともあれ、これで2勝3敗。もう後はない。すべてを健二君に預ける形になってしまった。健二君はいじっていたパソコンを閉めて立ち上がる。

「……いいねえ、いいじゃねえかこの状況」

顔を上げた健二君はものすごく生き生きとした表情をしていた。

「俺が負ければ敗北。俺が勝てば希望が見えてくる」

そこで一拍入れて、Aクラス側を見据える。僕たちも見ると、そこには

「海谷陸……だと……」

陸君が待ちかまえていた。健二君は決闘に出向く。

「健二君、頑張つて」

「健二よ、勝つと信じておるぞ」

「さつさと勝つてこい」

「つーか、負けたら承知しねえーぞ」

僕、秀吉、双月君、アキトの声援を背に健二君は前に出る。他のみんなは見守るばかりだ。

僕は戦いに出向く健二君の背中を見守っていた。

健
—
—
s
i
d
e

俺は四人の声援を受けて、陸と対峙した。

.....

俺は何だか変な気分になった。なんつーか、俺、コイツとは……

「例えば、俺たち二人は出会ってからこうやって対峙したことはなかったな」

そうだ、コイツと対峙した事がなかったんだ、俺は。

「そっぴゃあ、そっぴゃあ。正面切つて対峙したことはなかつたな」

俺は笑いながら答える。陸もそうだとばかりに笑う。

「なぜか協力し合う形がしっくりあって……」

「そして、今に至る」

少し沈黙が入る。そして唐突に

「 「 … プッ 「 「

「アツハツハツハツハツハ！」

何故か可笑しくなつて俺たち二人は笑い始めた。何で笑っているんだ？ 俺たちは？

笑うのも収まり、互いに笑顔で向き合う。

「何で笑っているんだろうな？俺たち？」

「さあ？　ただ……」

俺はこいつと出会ったときに、明久と出会ったことを思い出した。全く気性の違う俺たち二人がこんな風に話せるのも明久のおかげ……か？

「なんとなく、理由は思いつくぜ？俺は」

「フツ……そうか。俺もだ」

どうやら同じ答えだったらしい。……どっか似ているのかな、俺たちには。

「さて、話もここまでだ」

急に陸が話を打ち切り、真剣な表情になる。そうだな、早く始めな

いとな……

「さつさと初めて、終わらせよう」

「そうだな」

俺たち二人は試合を始めることに同意した。

「科目は？」

「総合科目で」

「分かりました。それでは召喚獣を召喚してください」

「はい」

返事をしながら俺は喜びに満ちあふれていた。

やっとだ……待ちこがれていたんだ……この時を。

俺たち二人は普段召喚するときにするポーズを取らず、互いに身構える。

そして、俺たちは言い放った。

「「召喚融合（サモンフュージョン）……！」」

第二十四話：5回戦（後書き）

とうとう激闘、健二VS陸、規格外同士の戦い。

次回もお楽しみに。

第二十五話：6回戦（前書き）

今回戦闘シーンと心理描写がうまくいったかどうか不安です。

それではどうぞ。

第二十五話：6回戦

月宮健二は12歳の時に悟った。

この世に俺と互角に戦える人間は指で数えるぐらいしか居ない、と。

彼は類い希な身体能力と学習能力があった。

そのことを知った両親は科学者だったため、「どこまで成長するか」という実験を開始した。

その時の健二の年齢は5歳。

幼い彼にはそれがなんなのか理解できず、ただ両親の期待に応え続けた。

それは年相応の環境ではなく、何歳も先の環境だった。

政府がそれに気づき、彼を保護したときには、彼はこの事実を悟っていた。

彼は同じ人間を捜した。同じような『体質』を生まれ持った人間を。

だが、見つからなかった。

いや見つかるには見つかった。だが、彼の悟り通り指で数える程度しかないかった。

だから彼は考えを変える。彼の欲を、戦闘欲を満たすために。

いないなら生み出せばいい。

そこで彼が注目したのが『試験召喚獣システム』

これを利用すれば自分と互角に戦える人間が現れる。

そして彼は入学し、システムの完全解析を完了させ、彼の欲を満たすシステムを作り出す。

それが召喚融合（サモンフュージョン）システムである。

第二十六話、6回戦

「『召喚融合（サモンフュージョン）！』」

二人のかけ声と共に召喚陣が二人の足下に現れる。そしてそこから光が二人を包む。回りは何が起きているのか理解できない。いや、一部を除いてだ。明久、アキト、双月、ニーナ、秀吉、優子、高橋先生だ。彼らは光に包まれる二人をただ見ているだけだ。

やがて光が収まり、二人が姿を現す。

健二はBクラス戦の時に見せた装備をそのまま体に装着していた。だが髪は短髪の黒髪から白と赤の腰まで届く長髪になっている。

対する陸は耳に掛かる程度の金髪に白いローブを纏い、金色と青色の弓を持っていた。

別人になったかのような二人の風貌に周りは驚いている。

「成功だね」

「ああ。これで健二の望み通りになっていればな」

「大丈夫だろう？ あんだけ実験を重ねたんだからな」

「いつ見ても凄いのお、これは」

明久、双月、アキト、秀吉は羨ましげに二人を見ながら何かの完成を祝う。雄二はここまでの流れを見て予測を、いや確信した考えを四人に聞いた。

「おい、召喚融合（サモンフュージョン）って、まさか……」

「うん？ ああ、坂本の考えで合っていると思うぞ？」

双月は雄二の疑問に答えて説明を始める。

「召喚融合、サモンフュージョンは召喚獣のステータス、姿、武器を召喚者に装着させるシステムだ。もちろん腕輪能力も使用可能だ。ただデメリットがあつて、フィードバックが100%召喚者に跳ね返ってくる」

「100%ってことは……」

「殴られればその痛みを全て召喚者に跳ね返ってくるということだ」

「おいおい。それじゃ本当においそれと使えないじゃないか」

「そうだな。戦争用というより決闘用でアイツは作ったんだからな」
双月の説明を受けた雄二は何でそんなものを……と尋ねた。それを説明したところで理解できるはずがないと双月は雄二から目をそらし、陸と健二を見た。

健二 side

俺は感触を味わうかのように手首を動かしていた。陸も腕を動かしている。感触からいつて成功している。後は……

「戦うだけ……だな」

俺の言葉を合図に陸は弓を切り離し、双剣に変える。そっぴやあれは……

「ピットの弓にお前独自のアレンジを入れたんだよな、それ」

「ああそうだ」

陸が構える。俺も戦闘態勢に入る。

「それでは始め！」

高橋先生の合図と共に俺と陸は駆け出し、真ん中で拳と剣が激突した。

ガキン！

……ッ！！

ドooooooooーん！

互いに弾き飛ばされて召喚フィールドの壁に激突した。俺は点数が表記されたようなので一瞬だけそれを見る。

総合科目

月宮健二 14500点 F

VS

海谷陸 14450点 A

『何iiiiiiiiiiii!!??』

「何だあの点数は!？」

「あり得ないでしょ!？」

何か声が聞こえてくる。あれでも手加減して取った方だぜ？ 俺はすぐさま陸が吹っ飛んだ方向に向かう。陸の方はすでに弓矢を構えていたが、お構いなしだ。

バシュ！

陸の弓が放たれるが、間一髪避けて陸の懷に飛び込みながら右の拳を突き出す。陸も飛び込まれると同時に弓を双剣に変えて、俺の攻撃を左に弾くが、

ドゴッ！

弾かれた直後に左の拳が陸の腹に決まる。だが陸もただでは決めてくれず、

ガスッ！

もう片方の双剣で俺の顔をぶん殴っていた。直後に陸は距離を取り、弓矢を素早く構える。俺は臆さず攻撃を仕掛けに行くが、途中で陸の考えに気づき踏みとどまり腕輪を発動させる。直後、陸の周りから大量の矢が姿をあらわし、放たれる。

ヒュンヒュンヒュンヒュン！！

流星群のごとく迫る大量の弓を、俺は正拳突きで迎撃する。

ドオーーーーーン！

空気を震動させて全ての矢を落とす。陸は弓を双剣に変えて俺に斬り掛かる。俺はそれを弾き、剣と拳の打ち合いを始める。

ガキーン！ ガン！ ガッ！ ギイーン！ ガガッ！

「そういえばお前の腕輪能力は“震動コントロール”だったな！」

「そうだぜ！ お前の武器の“錬成”に比べれば見劣りするがな！」

「よく言うー！」

剣と拳の打ち合いをしながらも、俺たちは会話を続けた。なおも打ち合いは続く。

No side

さてここで他の人たちの反応を見てみよう。大抵の人たちは「何コレ……」「ありえねえ……」と呟いて、彼らは遠い世界の住人か何かと思っている。当然と言えば当然である。この世界は週刊誌の漫画の世界ではないし、ましてやファンタジーやRPGの世界ではない。普通に暮らしていればこんな光景など見ることはないだろう。

だが、一部を除いて他の人たちとは違う思いを抱いている人もいる

ようだ。

一人目は吉井明久。彼は健二や陸などの規格外5人の親友で、彼らを中学の時から見てきた人間である。Bクラス戦の時でも圧倒的な差を見せつけられて、さらにこの場でまた見せつけられた。そんな彼の胸の中に宿るのは……

（いつか、いつか僕も……）

憧れと挑戦である。彼にとって5人は親友であり、目標でもある。いつか彼らと一緒に強さを手に入れて、同じ立ち位置に立ちたい。子供のような気持ちで5人の強さを追い続けてきた。それはまた一層強く思うようになった。

二人目は木下姉弟。彼らは健二という優子と秀吉の互いの価値観を破壊する存在が居なければ、ちゃんとした姉弟に帰ることがなかった。それだけに健二が出ているこの試合、彼らにとって大きな意味を持っていた。

普段明るく破天荒かつやりたい放題な健二の初めてちゃんとした形で見せられる力の差。それを目の当たりにした彼らは……

（やっぱりすごいんじゃない。健二は。わしの一つ二つ上をいつておる）

（やってくれるじゃない。でもいつか追い抜かしてやる）

秀吉は賞賛と憧れ、優子は悔しさと挑戦である。それぞれ吉井明久と同じものを宿しながら、異なるものを宿していた。秀吉は明久のように憧れを抱き、素直に賞賛を送る。優子は圧倒的な差から出る悔しさ、だが今度は追い抜きたいという挑戦である。

この三人は規格外5人の一番近くにいたからこそだ。彼らもまた普通の年齢相応の少年少女と言いつことを知っていなければ抱けない気持ちだ。

まあ、他三人はというと……

「うがぁー！ー！俺も戦いてえー！ー！ー！」

「落ち着けアキト」

明久と秀吉が戦いの衝撃で吹き飛ばないように庇いながら、唸るアキトを宥めたり、

「大丈夫？ 優子」

「ええ、大丈夫」

ニーナが優子を庇っていた。

何て言うか、やっぱりマイペースであった。

そうこうしている内に

ドガン！！

一際大きい音が鳴った。見てみると陸は口から血を流し、健二の右胸の装甲が壊れてそこを押さえていた。

バトルside

「へっ、やってくれるぜ。あんな攻撃しかけてくるとはな」

「貴様に言われたくない」

互いに息を切らしながら喋る。二人に何があったのだろうか。

「まさか俺の切り札の一つ『震脚落とし』をあえて受けて、爆発する矢を右胸に当てるとはな」

「引いてもお前のことだ。追撃を仕掛けてくるだろう？ だったら痛み分けの方がマシだ」

どうやら互いに切り札を切ったようだ。二人は点数を見る。

総合科目

月宮健二 7653点 F

VS

海谷陸 7653点 A

互いに同じ点数である。二人は視線を戻す。

「このままやり合っても意味がねえ。どうだ、次で決めるって言うのは」

「そうだな。制限時間が来て終わり、などつまらないからな」

そう言つて二人は身構える。健二は突撃体勢で構えて、陸は弓矢を構える。周りも二人を見守る。

静寂が周りを包む。

ダッ！

直後、健二が陸に向かって走り出す。陸は健二からねらいを外さない。

健二が迫る。陸は動かない。

迫る。

動かない。

迫る。

動かない。

距離は2メートルになったところで陸は矢を放つ。

バシユ！

健二は避ける仕草を見せず、突っ込む。

直後、

ドガアアン！！

爆発が起きる。コレを見てAクラス側は勝利を確信する。歓声が起こる直前

「……ガハア」

陸が吐血しながら倒れる。倒れたそこには健二が両手の拳を突き出していた。

「……何が、起こったんだ？」

雄二が呟く。双月が説明を始める。

「健二が陸の攻撃を髪で受けて、陸に対して攻撃を加えた。それだけだ」

「あの構えって『双手』じゃねーか」

「な、何だそれ」

「浸透技の一つで両手を拳のまま当て、衝撃を相手の中で炸裂させるのだが両手でやったため、衝撃は二つ。その衝撃を中でぶつけて内部から破壊する。健二の一撃必殺の技で切り札の一つだ」

「あ、ありえねーだろ。そんな漫画みたいな技」

「それができるからあいつは俺たちの中でも一番強いんだよ」

雄二は驚くばかりである。

視点を戻して陸と健二。

「か、勝てると、思ったの、だがな」

「へっ、俺に勝つにはあと半年早いぜ」

「中途半端すぎだろ」

ダメージが深い陸は床に座り込み健二と話していた。健二は満足げな笑みを浮かべている。

「次は負けん」

「いいぜ、何度でも掛かって来いよ。相手になってやるぜ」

健二が手を差し伸べて、陸がそれを取り立ち上がる。そのまま握手をした。

海谷陸 戦死

「6回戦、Fクラスの勝利です！」

ワァーーーーー！！

高橋先生の合図と共にA、Fクラス両陣営から歓声と拍手が巻き起こり、6回戦は幕を閉じた。

第二十五話：6回戦（後書き）

うう、今回は凄く難しかったし、表現しきれなかった部分もある。
今後私もさらなる精進が必要です。

次回もお楽しみに。

第二十六話：決着（前書き）

今回は短いです。

それではどうぞ。

第二十六話：決着

問題 次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。

（ ） キリスト教伝来

霧島翔子の答え

1549年

教師のコメント

正解です。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った1993

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても、間違いは間違いです。

明久side

「いやー楽しかったぜ」

「お疲れ様、健二君」

6回戦が終わり、健二君が戻ってきたのでお疲れと僕たちは労る。

大丈夫かな？ フィールドバックって外傷は消えても衝撃は残るから。
「相変わらずの出来に俺は感動しているぜ」

「分かったから少し休め」

「おう！」

自分の作ったシステムの出来を自画自賛している健二君に双月君は休めと言い、健二君は元気よく返事して奥に引っ込む。あの様子なら大丈夫だね。僕は健二君が無事なのを見て安心した。

「……あいつは科学者だけじゃないんだな」

「うん？ そうだぞ。あいつ自身体育系の世界記録を5つほど持っているからな」

「マジかよ……」

雄二は健二君のことを科学者だと思っていたらしく驚いていた。そこに双月君の説明が入って、さらに驚く。何の世界記録だったかなあ？僕は思い出そうと頭をひねった。

「それでは7回戦を始めます。代表者は前に出てください」

思い出そうとしている内に高橋先生が声を掛ける。そうだ、最後の戦いが残っていたんだ。さっきの戦いが凄すぎたために残りの勝負のことを忘れていた。雄二が前に出る。

「俺の出番だな」

最後は両陣営の代表戦。

「科目は？」

「科目は日本史、内容は小学生レベルで方式は100点満点の上限ありだ！」

「分かりました。そうなると問題を用意しなければなりませんね。このまま待っていてください」

試合の記録やフィールドの設定などで使っていたノートパソコンを閉じ、高橋先生が教室から出て行く。突然の条件にAクラスの人たちはどうめく。

「上限ありだつて？」

「しかも小学生レベル、満点確実じゃないか」

「注意力と集中力の勝負になるぞ」

雄二と霧島さんは一旦自分の陣地に戻っていく。

「雄二、ここで決めなかつたら殺すよ？」

「動物園に入れてやる」

「安心しろ、受け入れ先は用意している」

「お前らは励ますって事をしないのか!？」

「……(ハッ!)」「」

「今気づいたような顔をするな!」

僕たちは脅すことが雄二に対する応援の仕方だと思ってたんだ。それを励ますなんて方法があつたなんて……知らなかったよ。

雄二に康太、姫路さんが順番に近づいて励ましの言葉を掛ける。あんなんでも慕われるんだね。僕は不意にAクラスの方を見た。Aクラスでも霧島さんを励ます姿が見られる。霧島さんも慕われているようだ。

「準備が出来ましたので、代表者は視聴覚室に来てください」

高橋先生の呼びかけに答えて、雄二と霧島さんが教室を出る。

「試合状況と問題内容がそちらのディスプレイに映されますので、代表者以外の生徒はそちらを見てください」

高橋先生がそう言うと、ディスプレイに視聴覚室の様子が映される。雄二と霧島さんが離れて座っていた。高橋先生が入ってきて、説明と注意事項を述べる。

「不正行為は失格となります。良いですね？」

「……はい」

「わかつているさ」

「では始めてください」

問題が始まる。さて、ここからは運頼みだ。雄二の秘策は「大化の改新の年号」。この問題が出れば完全記憶能力を持つと言われている霧島さんに勝つことが出来るらしい。なんでも小さい頃に大化の改新の年号を間違つて霧島さんに教えたらしく、霧島さんはその問題だけ必ず間違えるらしい。つまりその問題が出なければ雄二に勝利はない。

……素直に勉強すればいいのに。僕とアキト、双月君、健二君、秀

吉はそれを聞いたときにそう思った。そんな運頼みの作戦でAクラスに勝とうとしたこと自体間違いだと思う。陸君がいるならなおさらだ。

僕たちは問題を見ていく。

次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。

（ ）年 平城京に遷都

（ ）年 平安京に遷都

.

.

.

（ ）年 鎌倉幕府設立

.

.

.

（ ）年 大化の改新

「あつた……あつたぞ！」

「じゃあ、ウチらの卓袱台が……」

「ああ！ 最下層に位置した僕たちの、歴史的な勝利だ！」

「『うおおおおお！』」

念願の問題が出たのでFクラスは勝利の雄叫びを上げる。僕は少し複雑だ。親友がいるクラスにあんな設備を明け渡すのは心が痛い。

……うん？

双月君と健二君、アキトの方を見ると違う話をしていた。

「今日はどこで祝勝会と反省会をやるか？」

「“カマバー” でいいんじゃない？ あそこなら俺たち以外寄りつかねえだろ？」

「ではそこに予約を入れとくか」

三人は試合そっこのけで放課後の話をしていた。どうしてだろうと

思い、話しかけることにした。

「ねえ、どうしたの？　せっかく勝てるのに後の話をして……」

「うん？　ああ」

僕の疑問に双月君が答える。

「考えてみる。あいつは中学の頃『悪鬼羅刹』と言われるぐらいに荒れていたんだ。つまり、勉強なんてろくにやってない」

アキトが良い例だと双月君はアキトを見るが、アキトはそっぽ向く。そういえば中学の時にアキトが巷から『赤き破壊の悪魔』と言われるようになったときはアキトの成績は中の下ぐらいだったからね。

あつ、もしかして……

僕はある事実に気づいてしまった。雄二が神童と言われていたのは本当に昔のこと。今では喧嘩が強い変態だ。それはつまり……

「例えば点数調節をしたところでFクラスの代表になるぐらいだ。そうなる……」

双月君の説明の途中、テストの点数が表示される。

日本史勝負　限定テスト　100点満点

霧島翔子　97点　A

VS

坂本雄二　53点　F

「4勝3敗でAクラスの勝利です！」

「……とまあこうなる」

「雄二いいいいいいいい！！」

僕はアキトと共に変態ゴリラを抹殺するために視聴覚室に向かった。雄二……覚悟しろお……あんなにお膳立てしたのにッ！！

第二十六話：決着（後書き）

次回で長かった試召戦争編が終わります。

次回もお楽しみに。

第二十七話：戦後対談 Aクラス編（前書き）

とうとう試召戦争編、完結です。

どうぞご覧ください。

第二十七話：戦後対談 A クラス編

「雄二、貴様あああああ！！」

一度は視聴覚室に突撃した僕だが、アキトに押さえられて雄二がAクラスに戻るまで待った。そして雄二が戻ってきたので僕は抹殺を決行しようとした。よくまあおめおめと帰ってきたな貴様は！その首落としてやる！

「……殺せ」

「いいだろう殺してやる！！」

「そこに直りやがれ！！」

珍しく潔い雄二に僕とアキトは抹殺を決行しようとする。

「落ち着け明久！」

「落ち着くのじゃ明久！」

「どうどう」

そこを双月君と秀吉が僕を、健二君がアキトを押さえる。くっ、何故だ！？ 何故止めるんだ！？

「落ち着きなさいよアキ！ アンタだってあれぐらいの点数でしょ！」

「こんな奴よりは取れるわあああああ！！」

島田さんが僕のことを馬鹿にするが陸君の教育のおかげであんな点数よりは取れる自信がある！

「つーか何で止めるだよ！ 双月！」

「奴にはそれ相応の罰をちゃんと用意しているから、もう怒るな」
双月君がそこまで言うなら……僕は渋々引き下がった。雄二は双月君に話しかける。

「すまない双月。今回ばかりは礼を言う」

「礼？ 何を言っている？ 罰を用意していると俺は言ったんだぞ？」

「？ どういう……」

雄二が礼を言うが双月君は含みのある言い方をする。それに疑問を持った雄二が尋ねようとすると、双月君が清々しい笑顔で何かのパンフレットを取り出して雄二に見せる。

「……（青筋を見せながら「下川動物園」のパンフレットを見せる）」

「おい、まさか……」

ああ、そう言えばそうだったね。アキトの脅しの後に双月君は「受け入れ先を用意している」って……

あれって、本気だったんだ。

さすがの雄二も顔を青ざめる。

「おい！ まさか本気で……！」

「快く承諾してくれよ。雄二、さようなら」

「ふざけんなああああ！！ てめえーは人をなんだとやっていやがる！？ つーか、お前のことだからこうなること予測して……」

「試験が開始した後に気づいたがな。これで心おきなく学生ライフを送ることが出来る」

「認めるかぁ！！ そんなこと！！」

「雄二……」

「な、何だ明久。そんな慈愛に満ちた目をして……」

僕は雄二の余りにも悲惨な運命に心を痛めるが、雄二だからいいかと心を鬼にして今度こそ激励の言葉を贈る。

「動物園に……行つてあげるからね！」

「やめろおおおお！！！」

僕が涙を浮かべながら慈愛に満ちた声で言うと雄二は本気で頭を抱えて突つ伏した。雄二……君のことは忘れないよ！

「……何やっているんだお前らは」

そこに霧島さんを連れた陸君が来る。僕は雄二から視線を移して陸君と話す。

「陸君、フィードバック大丈夫だった？」

「ああ、大丈夫だ。今は何の後遺症もない」

それを聞いて僕は安心した。いくら陸君は頑丈だからと言っても、フィードバックに本当のダメージまで重なるから心配だった。

「……一つ聞かせる、海谷」

「何だ、坂本」

突っ伏していた雄二が顔を上げて陸君を見る。

「全部、お前の予定通りか？」

「ああ、健二の勝利以外は全部予定通りだ」

「……そうか」

完全敗北を期した雄二。さすが掛ける言葉は見つからない。陸君は敵対する敵は油断せず、確実に潰す策を取るため、相手になった人は立ち直れなくなる人もいる。雄二もその一人になるかな？ そんな心配も杞憂だったらしく、

「……次は負けねえ」

「……次があつたらな」

力強く言い放った。雄二……この時だけは褒めてあげるよ。でもね、雄二？

「てめえは動物園入りだろうが」

「うわあああああ！！！」

アキトがとどめの一言を言い放ち、雄二の心は今へし折れた。そこに陸君から制止がかかる。

「すまないが動物園入りはなしだ。霧島！」

「……うん」

陸君の声が掛かり霧島さんが前に出てくる。霧島さんは雄二を見据えて言う。

「雄二、約束」

「……うん？ ああ、あつたなそんなの」

雄二は動物園送りが無くなったことにものすごい喜んでいたが、霧島さんの一言で正気に戻った。

……さすがに雄二を弄りすぎたかな？ 少しは労ってあげようかな。僕は1年に一回しかないだろう雄二に対する仏心を出すのを余所に

話は進む。

「……！（カチャカチャカチャ！）」

いきなり撮影準備を始める康太のことなどどうでもいいや。僕たちは二人の話に注目した。

霧島さんは一度姫路さんに視線を移し、また雄二を見ると、

「雄二、私と付き合って」

と言い放った。って、

「……へ？」

Fクラスメンバー全員あつけにとられた。何だって……？

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか？」

「……私は諦めない。ずっと、雄二の事が好き」

「その話は何度も断っただろ？ 他の男と付き合う気はないのか？」

「……私には、雄二しかない。他の人なんて興味ない」

僕たちの驚きを余所に話は進む。僕は噂を思い出す。

霧島さんはとても人気があり、告白してくる男子も数多くいる。霧島さんはその男子をことごとく振っている。そこからもしかすると同性愛者なのではないのかと言う噂が立っていた。

もしかしてずっと雄二のことがずっと好きだから、他の男子には興味がなかったということなのかな？

「拒否権は？」

「無いに決まっているだろう。約束を忘れたのか、坂本。」

「……陸に言うとおりの。だから今からデートに行く」

「ぐわあ！？ 離せ翔子！ やっぱりなかったことに……！」
ガラッ、ピシャ！

霧島さんに首根っこ捕まれて雄二は退散した。

…… やっぱり動物園送りにした方が良かったかな？ 僕は心底そう思った。

「さて、Fクラスの諸君。遊びの時間は終わりだ」

「あれ？ てつじ……西村先生。何か用ですか？」

「吉井、今鉄人と呼ぼうとしなかったか？ まあいい」

突然現れた鉄人に僕たちは戸惑う。何か用かな？

「今から我がFクラスに補習について説明しようと思ってな」

我が？ 僕はこの瞬間嫌な予感がした。

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から補習授業担当のこの俺に担任が変わるそう。これから1年、死に物狂いで勉強できるぞ」

「……なにいつ……!?」

一部を除いてFクラスの男子全員が悲鳴を上げた。

「いいか。確かにお前たちはよくやった。Fクラスがここまで来るとは、正直思わなかった。でもな、幾ら“学力が全てではない”と言っても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つなんだ。全てじゃないからと言って、蔑にしている物じゃない」

負け方が負け方だけに、グウの音も出ない。

「特に吉井にアキト。お前達二人は念入りに監視してやる。開校始まって以来、初の観察処分者二人だからな」

「アア？ いつ俺が観察処分者になったんだよ？」

「Aクラスとの一騎打ちが始まる前だ。連絡が遅れたな」

「ふん」

アキトは別に堪えた様子もなく返事をした。アキトもか……今までならなかった方が不思議だね。

「とりあえず明日から、授業とは別に補習の時間を2時間設けてやる」

「て……西村先生」

「なんだ吉井」

「陸君の補習に重なったらどっちに行けばいいですか？」

「あゝ……海谷の方にいけ。アイツの方が厳しいからな」
「はい」

良かった、これで何回かパスすることが出来る。鉄人の補習はあまり受けたくないからね。Fクラス側から僕たちに対してブーイングが起こるが僕は気にしない。

「よし！　じゃあさっそく陸とニーナと優子の祝勝会、俺とアキトと明久と双月と秀吉の反省会パーティーに行こうぜ！」

「予約はさっき取ったから大丈夫だ」

「あんまり騒ぐなよ？」

健二君がレッツゴーとばかりに先頭を切って、双月君が大丈夫だと言い、陸君が自制を掛ける。優子さんもやれやれとばかりに健二君について行っていた。秀吉も健二君に付いていく。

「ちよつと、何勝手にアキを連れて行こうとしているのよ！」

「そうです！　明久君は私たちと……！」

「アアン！？（ギロリ！）」

「ヒッ！」

島田さんと姫路さんが何か言ったようだけど、何だろう？

「行こう？　明久」

「うん！」

僕はニーナに声を掛けられて健二君達の方に向かっていった。

戦争には負けたけど、楽しめたからいいやと思う僕であった。

第二十七話：戦後対談 Aクラス編（後書き）

どうでしたか？

次は補足設定です。

補足設定（前書き）

設定ですよ

補足設定

今回、原作とは違う試験召喚獣システムについての説明をここに書いておきます。

・召喚獣の一撃死について

健二の改造により、点数関係なく人体において即死攻撃になる箇所は即死設定になります。

・フルシンクロシステムについて

健二発案のフィードバックシステムを応用した技術。フィードバックを4割にする代わりに召喚獣と召喚者の思考を一致させる。これにより召喚者が考えて操作するという手間を省き、思考と反射を同時に反映させることができる。

これを使えるのは現時点では教師陣、学園長、規格外5人、明久、秀吉、優子である。使用許可がない人間は健二が許可しない限り、使用できない。

・召喚融合（サモンフュージョン）について

健二発案の決闘応用召喚。召喚獣の装備、服装、ステータスをそのまま召喚者に装着させるシステム。これにより、リアルな戦闘をすることができ。ただし、フィードバックは100%のためよっぽどタフな人間か打たれ強い人間では無いといけない。

現時点では規格外5人、明久が使える。教師ではただいま検討中である。使用許可の条件もフルシンクロシステムと同様である。

・セキュリティについて

セキュリティレベルは1～7まである。すべてにランダムパスワードを設定しており、健二と陸、学園長しか解除することは出来ない。

なぜかというと

パスワード

5月12日の俺の朝食は？

といった感じのパスワードだからである。

レベル3まで強引に突破すれば、健二のパソコンに直接信号が掛かる。その間にハッキング側に健二特製「スターライト・ブレイカー」が発射され、ウィルス「ブンブン 蜂が飛ぶ」がまかれ、ハッキング側のデータを破壊、健二のパソコンにデータを全て転送する。ちなみにハッキング側の位置情報も転送する。

他にも新しい技術を試行錯誤中のデータが埋蔵されている。

第二十八話：レッツ、パーティー！（前書き）

今回はAクラス戦その後です。

どうぞ、ご覧ください。

第二十八話：レッツ、パーティー！

「ねえ、今日の打ち上げの場所ってもしかして……」

「うん？ ああ、あそこだぞ？」

「そうなの……」

優子さんが双月君に場所について聞いている。あそこ聞いて優子さんは少し苦い顔をした。まあ、僕も最初のあのインパクトは忘れないからね。

僕たちは今打ち上げ予定地に向かっていた。健二君は秀吉と話しながら先頭を切っており、陸君と双月君と優子さんがなにやら話し込んでいた。アキトと二ーナは僕の横にいて、僕も交えて軽い雑談をしていた。

「今でもあそこのインパクトは忘れようがないな」

「でも、今では私たちの遊びの一つだよ？」

「そうなんだよね。人間慣れればどうって事はないって、あの時ばかりは思い知ったよ」

今から行く場所の思い出を語って、僕達は雑談を楽しんでいた。そんな感じで歩いている内に店に到着した。

「とうちゃく」

健二君がいつも調子で店に入っていく。みんなもその店に入っている。僕もそれに習う。入る途中、僕は店の名前を見た。

“ 鎌楽両刀店 ”

第三者 side

「あの店に入ってたわ……」

「明久君、顔が緩んでいました……」

明久が入っていった店から少し離れた場所にその光景をこっそりと覗く集団がいた。集団の内二人の女子が呟く。その顔はとても悔しそうだった。その少女は姫路瑞希、島田美波であった。二人はアキトに脅されて一度は明久を遊びに誘い出すことを諦めかけたが、結局諦められず、明久の後をつけていたのだ。しかも、二人だけではなく、

「吉井の野郎……女子をはべらかせやがって……」

「異端審問会の名の元に裁いてやる」

「木下姉妹のお二人を救い出さねば……」

「アルレイヤさんの膝枕、ハアハア……」

嫉妬に駆られた覆面集団ことFFF団がいた。一名ほどこいまずぐ警察に通報するべきやつがいたが。彼らはムツリー二経由で情報入手し、異端審問に明久を掛けるためにここまで来たのだ。そこで島田と姫路に会い、明久にお仕置きを言うことで協力しているのである。

だが、端から見たら怪しい集団にしか見えないので迷惑極まりないことこの上ないのだが。そんなことにも気づかず、彼らは目の前の明久達が入っていった店の前に来ていた。

「アキ……変なことしていたら、どうなるか教えてあげる」

「明久君、ダメですからね。そんなことは」

二人の頭の中ではもはや明久のアリバイを聞くと言うことはない。FFF団も同様だ。もう一度言うが、迷惑極まりないことこの上なのである。彼らは明久を処刑するために店に踏み込む。店の誰かが接客に出る。その店員はというと、

「いらつしやいませ」　今日は帰さないわよ」

とムキムキマツチヨのドレスを着た、ひげの濃い金髪のおっさんがいた。

.....

ぎやあああああああ——————………！！！！！！

明久 side

うん？ 何か断末魔の声が聞こえた気が……

僕は何だろうと今いるカラオケボックスの部屋の外を見ようとする。

「FFF団と姫路と島田だろう？ 俺たちの後をつけていたしな」

外を見ようとする前にアキトが答えを言った。つけられていたんだ。

でもFFF団は分かるけどなぜ島田さんと姫路さんが？

僕はアキトに尋ねるけど、アキトは「さあ？」と言って答えをはぐ

らかした。何か嫌われるようなことしたかな？ 僕は思い当たる節

を探すが出て来なかった。

「ふうー、歌ったぜ」

「粗方全員歌ったか」

「うう……」

「姉上よ、前よりは上手になっておったぞ」

健二君が歌い終わったとばかりに席に着き、陸君が全員に確認を取る。優子さんがさっきの歌で未だに落ち込んでいて、秀吉が慰めていた。まあ、最初に比べて優子さんは上達した方だね。最初聞いたとき、みんな気絶したし。

この店、鎌楽両刀店は娯楽施設で、カラオケからゲームセンターと娯楽を一通りそろえている。バーやクラブみたいな場所もあり、ちよつとした憩いの場のような所でもある。ただ、この店は少し特殊でいわゆるオカマや両刀使い、同性愛者などの人たちが店員だったりする。

店員は女装、男装をしたイケメン、美女がそれなりにいるが、ムキムキマッチョのオカマの皆さんも数多くいる。しかも最初の出迎えは大抵オカマの人だ。だから最初の出迎えを乗り越えなければ、この隠れ家を利用することはできないのだ。

僕たちも最初来たときはオカマの人が出迎えだった。健二君を除いて、相当な精神的ダメージを負ったのは生々しく記憶に残っている。その時、健二君は平然と話しているのを僕は見ていた。

僕は彼を英雄だと思った。

だが慣れるとビククリするだけで、どうも思わなくなった。慣れつてすごいね。

そんな感じで邪魔される心配もなく、僕たちは遊ぶことが出来るのである。

「さて、そろそろ始めるか」

双月君の一言で何だとみんな注目する。双月君はバッグから紙と食べ物食べて空いた皿を用意して、ニヤリと笑う。

「王様ゲエエエエム！」

「待て、それは俺が言おうと『イエエエエエエイ！』……（ハア）」

双月君が言おうとしたら健二君が勝手にスタートさせた。双月君が何か言おうとするが僕たちの声にかき消されて、諦めたとばかりにため息をつく。

「ルールに関しては何回もやっているから分かるよな、お前ら……」
健二君はみんなにルールに関しての説明の有無を尋ねると、僕たちは必要ないとばかりに頷いた。

「さあ、紙を引け」

陸君の合図でみんな紙を引く。緊張の一瞬。

『王様だあああれだあ!』

僕は……3番か。王様は誰なんだ。

「ん？ 俺か……」

アキトか……。アキトなら割と常識的な課題を出すから大丈夫だ。みんなアキトの命令を待つ。

「じゃあ……7番、“ふいぎゅ@”だったか？ 独唱」

うう、これはこれできついぞ。曲調からして陸君なんて当たったら

……

「……」

「おお。陸、7番じゃん」

……当たっちゃったよ。陸君、残念……。陸君は無言で立ち上がって、カラオケに無言でナンバーを打ち込む。そして、ワンオンステ
ージ。

チーーン……

まるで燃え尽きたかのように机に陸君は突っ伏した。その側で僕を含めてみんな大爆笑。特にサビの叫ぶ場所なんか、もう。

「アハ、アハハハ、アハハハハハ!」

「……（声にならないほど笑っている）」

「きよ、曲と、雰囲気、あわな、すぎる、のじゃ!」

「プッ、プププッ!」

「……この屈辱、絶対晴らしてやる」

僕たちの笑うのを余所に陸君は復讐を誓っている。でも、そんなことお構いなしに僕たちは笑っていた。

一通り笑った後、二回戦を始めた。そして今度の王様は、

「……フッ」

陸君だった。……まずい。さっき笑われまくっていたからその恨み

は大きい。何が来るのか全く分からない。どうか、僕に来ませんように。

「……よし、では5番が1番に告白しろ。もちろん好きだと言え」
えっ、1番……僕だ！ えっ、誰！ 出来ればニーナが優子さんが嬉しいんだけど……

「てめえー！ 何て命令出すんだコラア！」

……アキトか。よりによって、男……。

「……アキト、さっさとすませよう」

「あ、明久？ まさかお前……」

「……うん」

僕は腹を括ってアキトの告白を受けることにした。大丈夫。なんてことはないから。アキトは頭を抱えた後、僕に向き直った。

「だああああ！ いいだろう、腹括ってやってやる！ 明久！」

「は、はい！」

アキトはガシツと僕の両肩を掴み、真剣に僕の瞳を見て言い放つ。

「……好きだ。俺と一緒にいろ」

「……は、は「そこで返事するなよ明久」はっ！」

余りにも胸に響いてしまつて返事を返しそうになった。あ、危ない、危ない。おもわず引き込まれる所だった。アキトって顔は整っているから余計にだ。

「……（ジュール）」

「ん？ おい、優子。なにやだれ出しているんだよ」

「えっ！？ な、何でもないわよ！ オホホホホ！」

「？ なら良いけどよ」

優子さん、あなたが何を想像したのかは聞かないでよくよ。聞くの怖いし。

「さあ、次行くぜ！」

健二君の声と共に今度は三回戦が始まる。僕たちは次こそは身構える。

『王様だあああれだあ！！』

王様は……僕じゃない。一体誰なんだ。

「おお、わしか」

秀吉か。なら安心だね。僕は安心していた。だが、秀吉はニヤリと笑い、言い放つ。

「3番が4番に膝枕じゃ」

膝枕ッ！？ 秀吉、何ておいしい命令を出すんだ！ 僕は……4番！ 神様ありがとうおおおお！！ 日頃の行いの良さに「ご褒美をくれたんだね！？ 相手は……

「私が3番だけど」

ニーナだ！ よっしやあああああ！

「僕！ 僕が4番！」

「明久が？」

ニーナはすでにスタンバイしている状態であつた。僕はゆっくりと近づく。うわぁ……膝枕なんて初体験だぁ。僕は緊張でドキドキだった。

「じゃ、じゃあ、ニーナ。お、お邪魔します……」

「どうぞ、明久」

僕はソファに体を預け、頭をニーナの膝に預けた。

うわぁ……やらかい……

初めての感触に僕は至福の時を迎えていた。何だろう、膝も何だけど、ダイレクトにニーナの、その、胸が……

「……ノノノ（プシュ）」

顔を真っ赤にして、僕は意識を手放した。

幸せえノノノ……。……。

ああーあ、気絶しやがって。余りにも幸せそうな顔を見て、俺たちは一息ついた。

「こんなじゃあ、キスなんかしたに日にはどうなることやら」

俺はこいつの将来が少し心配になった。彼女が出来たらどうするんだろうな。俺はニーナを見る。ニーナは嬉しそうに明久の頭をなでていた。俺はそれを見て、気になることを聞いてみる。

「なあ、ニーナ。お前って明久のこと好きなのか？」

俺がストレートに聞いてみると、ニーナは驚いた顔になった。そして一言。

「……わからない」

「ああ？」

それってどういう……と聞こうとしたが、ニーナの少し戸惑っている表情を見て、聞くのはやめた。なんかあまり踏み込んだりいけな気がした。

「……まあ、楽しもうぜ？」

「うん」

俺達は明久を起こさないように静かに、だがテンション高く王様ゲームに再参加し始めた。

おまけ

明久が気絶した後の健二と双月の会話。

「なあ、双月。雄二はどうするんだよ」

「大丈夫だ。土曜日の午前中に下川動物園に行くように手配している。一日だけだが、動物の気持ちも分かるだろう」

「結局、実行するんだな」

「当たり前だろう？ 敗者の責任は取って貰わないと」

第二十八話：レッツ、パーティー！（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみに。

第二十九話：暴走5秒前（前書き）

今回はラブレター事件をアレンジした物です。

どうぞ、お楽しみください。

第二十九話：暴走5秒前

問題

原始時代は三つの時代に分けられますが、それを順番に答えなさい。

吉井明久の答え

？ 先土器時代 ？ 縄文時代 ？ 弥生時代

教師のコメント

正解です。さすが歴史には強い吉井君ですね。

島田美波の答え

？ 戦怒鬼時代

教師のコメント

今の島田さんのことですね

坂本雄二の答え

？ 恐竜時代 ？ ジュラ紀 ？ 白亜紀

教師のコメント

坂本君は恐竜マニアなのですか？
？

「本当に大丈夫だな？」

「一日ぐらい大丈夫だって！ 気にしないで行ってきなよ」

陸君は心配げに僕に話しかけるが、僕は大丈夫だと自信満々に答える。もう、心配性だな、みんなは。このやりとりは10回目だよ。

僕は健二君、アキト、ニーナ、双月君、陸君のお見送りのために空港にいる。彼らは今から東京で行われる学会に出席して、健二君の講演の手伝いをしなければならない。いつもは一人は僕の側に残るのだけど、今回は持つて行く荷物の関係で、全員で行かなければならないのである。だから一人、残していく僕のが全員心配でたまらないのだ。

「何かあればすぐにAクラスに行けば何とかなるからね?」

「大丈夫だよ、ちゃんと鍛えてあるからいざって時は相手をねじ伏せるから」

「いや、俺たちが言っているのはそう言うことじゃなくてだな……」
ニーナが僕のことを心配するが、鍛えてあるから大丈夫だと言って安心させる。双月君はそう言うことじゃないと言うが、どういふことかな?

あつ、ちなみに秀吉は部活、優子さんは生徒会の仕事で来られないらしい。余りにも心配するみんなだが、ここでアキトが一言。

「まあ、いいじゃねえか。明久がこんなに大丈夫って言っているんだ。だったら大丈夫だって。こいつももう子供じゃねーし」

この一言でとりあえずみんな引き下がった。

「ありがとう、アキト」

「別に」

「あつ、そうだ」

健二君は何か思い出したように荷物を漁りだして、何かの箱を取り出し、僕に渡す。

「何コレ」

「絶体絶命のピンチに陥ったらそれを開けるよ」

「……うん、わかった」

絶体絶命のピンチって早々訪れるものじゃないけど。5人は飛行機のアナウンスが掛かり、出発口に向かった。

「頑張ってきてねー！」

僕は飛行機に向かう5人を応援した。

「何！ それは本当か、ムツツリーニ！」

「……確かな情報」

「そうか……じゃあ、やりたい放題って訳だな」

どこかの暗闇の中、雄二はムツツリーニからある情報を仕入れて、悪い笑みを浮かべていた。

翌日の学校。5人がいない朝を迎えた。少し変な気分を抱きながら、

僕は朝のHRを迎えていた。

「工藤」

「はい」

「久保」

「はい」

「近藤」

「はい」

「斉藤」

「はい」

鉄人は朝の出席を取っていく。ここは比較的平和だから問題ない。僕は今頃東京の学会で講演をしている健二君とその補佐の陸君と二一ナ、スポンサーとして出席している双月君、機材の持ち運びをしているアキトのことを考えていた。今頃、たくさんの偉い人の前で話しているんだろうな。

コッソッソ！

？ 何だろう？ 紙が当たったような感触が……。近くを見るとくしゃくしゃに丸まった紙が一枚。何かと思って開けてみるとそこには、

『少しの間、足止めをする。その隙に逃げるのじゃ。 By 秀吉』
秀吉――！――！――！ 今は君だけが仲間だよ――！――！

僕は秀吉のメッセージに心の中でうれし泣きをした。そうして、出席確認が終わる。

「よし。遅刻欠席はないようだ。今日も一日勉強に励むように」
鉄人に言っても状況を改善してくれるはずもないので、鉄人が出て行き、秀吉が足止めをしてくれる瞬間を待つ。もちろん昨日貰った健二君からの箱を持って。そうこうしている内にみんなが殺気を込めて僕に注目する。ふっ、この程度の殺意、アキトの暴走状態に比べればどうってことないね。

「アキ、ちよーつと話を聞かせてもらえろ？」
真っ先に僕の肩を粉碎せんが勢いで掴んできたのは島田さんだ。痛い。

「し、島田さん？ 顔が怖いよ？」

「誰と遊んだの？ どんな遊びをしたの？ どこを粉碎してほしいの？」

「待った島田さん！ どこを粉碎って普通きくことじゃないよね！？」

不味い、このままでは病院送り以上のことになる。島田さんは僕を殺す気だ。

「明久君。私、明久君に酷いことをしたくありません！ だから正直に話してください！」

「姫路さん！？ 問題点そこなの！？」

姫路さんも完全にFクラスの一員になってしまったようだ。

「みんな、落ち着け。問題は明久の交友関係じゃない」

みんなが雄二に注目する。みんなの視線が外れたが、まだ油断は出

来ない。

「問題は明久をどう「暑いのお……」？」

雄二が締め言葉と言おうとした瞬間、秀吉が言葉を挟んだ。なんだとみんなは秀吉に注目する。そこには服をただけさせた色っぽい秀吉がいた。あまりに色っぽいためみんな秀吉に注目する。

「暑くてしょうがないのじゃ。服を脱ぐべきかのお」

と言って、少しずつ焦らすように秀吉は服を脱ぎ始める。

「
…
(ハアハア)
」

鼻息を荒げてそれを注目するＦクラス男子。康太も鼻血を流しながら凝視する。はつきりいつてみんな変態だ。だって、男に欲情しているから。えつ、男の娘？ 何それ？

「何をしているのよ木下！」

「そうですよ！ ダメです、こんなところで脱ぐとしたら！」

「離すのじゃあ！　もう暑くて仕方がないのじゃ！」

姫路さんと島田さんが止めに掛かるが、秀吉は嫌だと振り払おうとする。まるでだっ子のようにだ。

パチッ。

僕は秀吉が一瞬だけこっちにアイコンタクトしたのを見逃さなかった。周りを見ると、みんな秀吉に注目していて誰もこっちに注目していない。

今なら逃げられる！！

僕は健二君から貰った箱を持って、急いで教室を出た。

秀吉、ありがとう！ この恩はいつか返す！

「……ハッ！　しまった！　明久が逃げた！　追えええええ！」

後ろから雄二が我に返ったようで、急いで指示を出していた。

秀吉がくれたチャンスは無駄にはしない！！

僕は全力疾走で逃げだした。

こうして、僕VSFクラスの逃走劇が始まった。

第二十九話：暴走5秒前（後書き）

とうとう始まった逃走劇。果たして明久は逃げ切れるのか!?

次回をお楽しみに。

第三十話：発動！ 健二の発明（前書き）

今回は新キャラ登場です。

どうぞ、お楽しみください。

第三十話：発動！ 健二の発明

雄二side

「追えええええええ！ 明久を逃すなあああ！」

思わぬ秀吉の演技に目を奪われて、肝心の明久が逃げてしまった。くそつ、今日という日を待っていたのに！ 絶対に無駄にしてたまるか！

「……わしに欲情するとは、皆は変態かのお」

俺が次の一手を考えようとしたら、秀吉が服を整えながら呟く。考えてみれば、秀吉もあの5人程ではないが高校生にしては珍しい才能があつた。

それは『演技力』だ。

秀吉は一年の時から演劇部で特筆した演技力を遺憾なく発揮していた。その時はあくまで高校生のレベルぐらいだったらしいが、ある時期を境に一流の役者と張り合えるほどの演技力を発揮し始めた。今回、明久の味方になってこちらを攪乱してくるとは思わなかった。今考えれば、秀吉は俺たちが明久かと言う選択肢が出されたら迷わず明久をとる、それぐらい明久のことが大好きだった。

「雄二も詰めが甘いのお。わしが明久の味方をするぐらい予想できそうなもんじゃろつに」

秀吉は教室の出口に向かいながら厳しい視線で俺を見る。

まあ、いい。手ならいくつも打つてある。今日という今日こそは今までの恨みを清算してやるのだ。まずそのためには。

「そつだな、確かに俺の失策だった。だからこそ秀吉」

パチン！ 俺は指を鳴らす。その瞬間、秀吉をムツツリー二が教卓に縄で拘束した。

「おまえはここでおとなしくしてもらつ」

「な、なんじゃ！？」

秀吉は驚いて叫んでいて、ムツツリー二はこの光景をカメラに納め

ている。よし、これで秀吉は無力化した。後は明久のみ！俺はムツツリー二と島田、呆然としている姫路を連れて、明久が来るであろう場所に向かった。

「明久！逃げるのじゃあああああ！！」

覚悟しろ……明久……。今までの恨み、晴らしてやる！

明久 side

「くそっ！雄二の奴、手回しが早い！」

僕は先ほどの光景を見て、心の中で舌打ちした。

暴徒と化したFクラスメンバーから逃げる際、Aクラスに逃げ込もうとしたのだがすでにFFF団が入り口あたりを占拠していた。僕より遅く教室を出たはずなのに、どうして先にAクラスにいるのか、とか、どうして占拠できるのか？などの疑問は奴らには通用しない。

だって、FFF団だからね。

捕まるわけにはいかなからAクラスに行くには諦めて、風紀委員室に行こうとしたが、こちらもすでにFFF団が階段の踊り場に布陣済み。これでは1階にある風紀委員室、補習室に行けない。

さすがは元神童。こんな時の悪知恵の早さは陸君を匹敵する。と思う。この才能を別の方向に生かせないのか！

このままでは捕まってしまうので、ただ一つの逃げ道である屋上へ避難する。屋上ならば隠れる場所もたくさんあり、万が一屋上に来られても隠れてやり過ごすことも出来る。僕の身を隠す技術は忍者ビツクリの技術だと確信している。僕は急いで階段を上り、屋上の入り口にたどり着く。ドアを開けて、屋上に入るとそこには、

「よお、遅かったじゃねーか。明久」

「雄二……！」

雄二が不敵な笑みを浮かべて待ちかまえていた。

雄二に場所の先読みをされた？　そういえば僕が逃げる場所、全てにFFF団がいた。まさか、誘導された！？　僕は見事に雄二の手のひらで踊らされていたというわけか！

「くっ、雄二！　何で根も葉もない嘘で僕を不幸に貶めようとするんだ！」

僕は何故こんなことをするのか、雄二に聞いた。腐っても友達、何か理由があると信じて。

「どうして？　決まっているだろう……」

雄二は何を今更という顔で答える。決まっている？　どういうことだ。

「明久、俺はお前の幸せが心底、大ッ嫌いだからだ！！」

「貴様は最低だ！」

ちくしょおおおお！！　ほんのちよつとでも信じた僕が馬鹿だった！

「やっとだ…… やつと、この時が訪れた。あの5人がいなくなるこの時を……」

雄二が何か言っているけどどうでもいい。後ろの何かがとても怖い。雄二の衝撃発言の後、後ろから島田さんと姫路さんが何かのオーラを纏って現れる。あれって殺意？　こ、殺す気なのか……彼女たちは。

「アキ。じつくりはなしでもらうわよ？」

「大丈夫ですよ？　OHANASIするだけですから……」

島田さん？　お話しするならその鉄球を仕舞ってください。姫路さんに至っては肉体言語のおはなしになっているし。こうなれば、戦略的撤退を……！

「諸君、ここはどこだ？」

「「最後の法廷だ！！」」

「異端者には？」

「「死の鉄槌を！！」」

「男とは？」

「『愛を捨て、哀に生きるもの！』」

「よろしい。これより異端者、吉井明久の処刑を実行する！！」

逃げようとしたら、覆面をかぶって、何かしらの武器を持ったFF団がいた。何でバレた！？

「ムツツリー二の情報通りだな？ 手回しが早い、早い」

くそっ！ 康太のせいか！

退路を断たれてしまい、完全に絶体絶命のピンチに陥ってしまった。どうすればいい？ 前は何か怖いオーラを纏う島田さんに姫路さんとあくどい笑みを浮かべる雄二とカッターを構える康太。後ろはFF団。僕の力では暴走状態とも言えるFF団、姫路さん、島田さん、喧嘩が強い雄二、動きが速い康太を一度に相手をして勝つことはできない。

万事休すか……。諦めかけたその時、僕は健二君の言葉を思い出した。

『絶体絶命のピンチに陥ったらそれを開けろよ』

僕は肌に離さずに持つておいた箱を見た。コレだ……。これしか方法はない。僕は急いで地面に箱をおいて、箱を開けようとする。周りは最後の悪あがきとばかりにスルーするが、今は好都合だ。僕は勢いよく箱を開けた。

瞬間、

ブウン！ ピカッ！

何かの起動した音が鳴った瞬間、光が巻き起こった。強い光に僕は目を閉じた。

陸 side

所変わって東京の学会の講演会会場。その発表ホール裏。

「ところで健二。明久に何を渡したんだ？」

「うん？ ああ」

発表に一段落して休憩に入っている途中、俺は健二に尋ねた。健二は飲んでいる水を側に置いて答える。

「あるものが完成したから、それを明久に渡したんだ」

「完成した？ ってなにが」

「うーんと、NO.5かな？」

「あれか。まさか出来るとはな」

「すげーだろ？ まあ、まだまだ進化させるけどな」

健二の答えに見当が付かない俺は再度聞き直した結果、見当をつけた。

「RPGを元に作ってみたんだぜ！ 明久が羨ましがっていたからな」

「これ以上変な発明をするなよ？ お前の夢のためにも」

「いいじゃねえか別に。可能性を追求することは俺の夢に繋がるんだぜ？ なんせ、俺の夢は」

一拍おいて、健二は言い放つ。

「“合体”、“変形”のできるロボットを作ることだからな！」

「堂々と言い切るな。子供か、お前は」

健二の夢を何回も聞いてきた彼らにとつては、耳にタコができるほど聞いた夢だ。呆れるほど聞いた話だが、馬鹿にすることはない。

俺は今後のプログラムを確認し始めた。

「おい、健二！ これはどこに置けばいいだ！？」

「ああ、それはな……」

機材を運んできたアキトに返事をしながら健二は席を立った。俺は先ほどの話を思い出し、ため息を吐く。

「まさか、“幻想獣・機人”を作り出すとはな」

明久
side

文月学園では辺りを覆うかのような光が巻き起こっていた。その光も収まり、明久は目を開けると、そこにはロボットと装甲を身に纏った女性がいた。

「データ認証、マスター登録開始」

「マスター登録完了しました」

「これより我ら（私達）二人はマスター、吉井明久様の盾に力になります。どうぞご命令を」

「え、と、誰？」

いきなりの登場に僕は戸惑う。誰？

「……マスター、もしかや創造主より我らの説明を受けていないのですか？」

「えっ、創造主って誰？」

「創造主とはプロフェーサー、月宮健二でございます」

あ、やっぱりメイドイン健二君か。納得。

「潰せええええええええええ！！！！！」

ハッ！ そうだ！ 絶体絶命だったんだ僕は！！ 我に返り、周りのFクラスメンバーを思い出す。

「やっちやうよ？　ぼくやっちやうよ！？」

「滅殺、撲殺、抹殺！」

「いいんだよね? ぼく、もうやつちやっていいんだよねえ!？」
変な台詞を言いながら押し寄せて来るFFF団。この二人が健二君の策みただけど、何の説明も受けてないから分からないよ!？」

僕が困り果てていると、

「敵対勢力確認。バトルモード機動。これより敵勢力の殲滅に掛かります」

と言って、ロボット君がそう言うとかシャンガシャンと音を立てて、ジャキイー!!

大量の兵器を構えた。

『……へっ?』

「発射」

どばあ!!!

ぎゃあああああああああ!!!

兵器の中の砲台のようなものから大量の“とろろ”が発射されて、FFF団に直撃した。

うわあ、かゆそう……

とろろを浴びに浴びまくったFFF団は全員搔ける箇所を搔いていた。ある意味地獄絵図である。

「アキ! 何なのよ、アレ!」

「そうですよ! それにその女性は誰ですか!」

島田さんと姫路さんが怒りながらこっちに向かってくるが、こっちには

「発射」

とロボット君が二人の方に砲身を向けて、“わさび”をバズーカから発射した。当然直撃して、

「きゃあああああああ!!!」

わさびまみれになった。彼女たちを見ても誰得?な状況である。そして最後に雄二と康太に砲身を向ける。康太と雄二は逃げようとするが、ロボット君からワイヤーが射出されて動けなくなった。

「ま、待て! 俺が悪かった! だから許してくれ!!!」

「……秘蔵写真10枚、タダで!」

雄二は惨めにも命乞いするし、康太は自分のコレクションから取引する。……因果応報って言葉を知らないのかなあ、この二人は。さつきまで理不尽な理由で殺され掛けたことを思い出し、沸々と怒りがわいてきた。

「雄二、康太……」

二人はわらにもすがる思いで僕を見るが、今回の騒動を起こした首謀者とその協力者には鉄槌が必要だね。僕は笑顔で言い放つ。

「くたばれ」

「発射」

僕の合図と共にロボット君が全砲門より“とろろ”と“わさび”と“からし”を発射した。

「ちょ、ま……ギャアアアアアアアアアア……!!!!」

「……ッ……!!（悲鳴を上げる間もなく倒れた）」

全て直撃して、二人は見事に撃沈した。

ふう、悪は滅びた……。僕はやり遂げたとばかりに一息ついた。

生きているって素晴らしい……。僕は改めて思った。

「マスター、肩のお怪我を治します」

そう言つてロボット君と一緒に現れた女性が僕の肩に触れる。彼女は一度目を瞑り、

「リフレッシュ」

と言う。すると先ほどまで痛かった肩の痛みがすっと引いていった。凄い……。僕が素直に感心していると、二人は

「我らの説明に関しては付属の説明書をお読みください、マスター」

「それでは私たちは戻ります」

そう言つて箱の中に帰っていった。……人間サイズの二人がどうやってHGプラモの箱にはいるのか不明だったが、後で説明書とやら読めばいいかと思い、この地獄絵図を放つて置いて、彼ら二人が入っていると思う箱を持って教室に帰っていった。

その日、Fクラスは今までに類を見ないほどの静けさだった。

第三十話：発動！ 健二の発明（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみに。

第三十一話：平和と敬語（前書き）

オリジナルのバカテストが思いつかないと悩むこの頃です。

それでは、どうぞ。

第三十一話：平和と敬語

「何々、『これは月宮健二特製の召喚獣を応用して作り上げた幻想獣です』」

「幻想獣？」

僕は付属の説明書を秀吉と一緒に読んでいた。

僕たちは放課後まで平和に過ごし二人で帰宅した後、僕の家集合して健二君から貰った箱の説明書を読んでいた。FFF団や雄二に島田さん、姫路さん、康太は屋上の清掃をやらされている。いい気味だ、人を殺そうとするからだ。

「幻想獣とは何かの？」

「え」と、『幻想獣はRPGなどで現れる空想上の人間、ロボット、神族、悪魔などを召喚獣として召喚した生き物です。召喚者によって異なりますが、今回はプロトタイプの為、ロボット、魔法戦士をあらかじめ設定しました』だって

「ではこの箱の中には明久が試験召喚獣とは別に召喚した者が入っておるのじゃな」

「その通りです」

「「うわあ！」」

僕が幻想獣に関しての説明を秀吉にして、秀吉が自分なりの解釈を言ったのをいきなり現れた女の子が肯定した。僕たち二人は突然の登場にビックリする。よく見ればロボット君も現れている。

「急に現れないでよ。ビックリしたじゃないか」

「申し訳ありません。ですが早急に決めてほしいことがあり、勝手に登場させて貰いました」

「早急に決めてほしいこと？」

「はい」

早急に？ 何だろう？

「マスター、我らは召喚者より『名』を与えられることによって初

めて真の力を発揮することができ、マスターの周辺の警護をするこ
とが出来る」

「ですのでマスター。私たちに『名』を与えてください」

そうなんだ……てつきり健二君が名前を考えているとばかり思っ
ていた。でも、どうして健二君は名前をつけなかったんだろう？

「健二に名前をつけて貰わなかったのじゃ？」

「いえ、創造主はマスターに最初から渡す予定だったのです」

「『これから渡す奴に名前をつけて貰え。名前をつけるって行為自
体、ある種の繋がりのようなものだからな』と創造主は言っ
てまし
た」

「なるほどのお。あえて明久に名前をつけて貰うように言ったのじ
やな」

名前をつけて貰えなかった理由を秀吉が尋ねると、二人はその理由
を述べて、それに秀吉は納得した。コレを聞いて僕は悩んだ。

うーん、これは責任重大だぞ？ 変な名前はつけたら二人に失礼だ
し、かといってたいそうすぎる名前もどうか……。

僕は二人を見た。ロボット君は午前中に見た通り、攻撃型でフリー
ダムガンダムをモデルにしたフォルムで忠実な性格だと思う。対す
る女の子の方は、あの時は装甲に見えたけどよく見ると鎧だ。ごっ
ごつとした全身鎧のようなものではなく、すらりとすっきりとした
ファルムの鎧を纏い、水色の髪と瞳で物静かな性格である。

二人をじつと見比べながら何か無いかと考える。しばらく考えた後、
「決めた」

二人の名前を決めた。秀吉と女の子とロボット君が僕に注目される。
僕は考えた二人の名前を言う。

「ロボット君がソル、女の子の方がルナ」

「ソル……」

「ルナ……」

「ソルはローマ神話で太陽神。ルナは同じくローマ神話で月の女神
という意味じゃな」

「それもあるけど……」

ロボット君と女の子の二人がそれぞれの名前を呟く中、秀吉が説明にはいる。たしかにそういう意味もあるけど、実は違ったよね。

「二人のイメージに合うものって考えていたら、これしか浮かばなかったんだ」

「充分ですマスター。素敵な名前をありがとうございます」

「これより我らはあなたの力になりましょう。よろしく願いします」

「うん。こちらもよろしく！」

僕は二人と向かい合って、互いに挨拶した。

「……よいのお。わしも幻想獣が欲しいのお」

僕たち三人を見て、秀吉が羨ましがっていた。……今度健二君に頼んでみよう。秀吉のお礼として。

翌日。ソルとルナが入った箱を持って登校した僕だけ……

「何でCクラスに？」

「さあ、わからぬ」

いきなり西村先生が現れて、「今日だけ吉井と木下弟はCクラスだ」と言われてCクラスにやってきた。Cクラスのみんなは突然現れた僕たちにビククリしていたけど、そこまで抵抗もなく受け入れてくれた。……小山さんを中心に。

小山さんは自分の席から僕のことを憧れのまなざしを向けている。若干数名もだが。

「それでは朝のHRを始めるよ」

Cクラスの担任の先生が入ってきてHRが始まる。僕は早速質問に……

「みんなも驚いているかもしれないが、吉井明久君と木下秀吉君に

ついでだ」

する前に先生が説明を始めた。僕と秀吉は黙って聞く。

「今日はFクラスに臨時講師および臨時授業があるのですが、二人は必要ないと判断され今日一日だけCクラスに入ることになりました。皆さん、二人と仲良くしてくださいね？」

臨時講師に臨時授業？ 何もそんな理由で…… 僕は秀吉と相談しようとしたが、秀吉は納得した表情になっていた。何か分かったのかな？ あとで聞こうつと。僕は先生の話に集中することにした。余談だが、後々知った話で健二君はAクラスで授業を受けていたらしい。何でだろう？

Fクラス side

Fクラスでは明久に対する恨みが蔓延していた。どうやら昨日のことを根に持っているらしい。

「くそつ、あいついつの間にあんなものを……」

「また新しい女の子がいました……」

「じつくり話をしないとね……」

「……殺したいほど妬ましいッ！」

雄二、姫路、島田、土屋は各々の文句をたれていた。そこにチャイムが鳴る。仕方なく、全員席に座る。ドアを開けて入ってきたのはスーツを着た陸いつもの学生服のアキトが入ってきた。鉄人ではないのかと全員戸惑う。

「今日、臨時講師としてFクラスの全授業を教える海谷陸だ。こっちは監視のアキト」

陸が説明を始める。臨時講師という言葉に全員戸惑う。

「貴様らの昨日の行動は聞いている。明久を殺そうとした、とな」
陸の言葉を聞いた瞬間、全員青ざめる。そう、彼らは明久が大好き

なのだ。だから明久に危害を加えるものは容赦しない。

「安心しろ。体罰は居眠り、脱走をしようとした人間にのみアキトが執り行う」

陸はあらかじめ体罰に関してを言う。アキトと聞いてさらに青ざめる。

「今日は一日たっぷり使って、敬語の使い方と成り立ち、使われる理由をみつつちり体に、頭にたたき込んでやる」

陸は青筋を浮かべたさわやかな笑顔で言い放つ。

「覚悟しろ」

いやあああああああああ――――！！！！！！

その日、Fクラスから悲鳴だけが上がった。

ちなみに姫路には別メニューで同性愛の体験談を朗読させた。（力マバーのオカマの人たちの体験談）。

第三十一話：平和と敬語（後書き）

どうでしたか？

次回をお楽しみに。

第三十二話：話し合い（前書き）

長らく時間を置きましたが、規格外再開です。

それでは、どうぞ。

第三十二話：話し合い

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください。

『あなたの今欲しい物は何ですか』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

成程、お客さんの思い出になる様な、そういった出し物も良いかも知れませんがね。

写真館とかも候補になりうると覚えておきます。

土屋康太の答え

『Hな本（訂正） 成人向けの本』

教師のコメント

取り消し線の意味があるのでしょいか。

吉井明久の答え

『夢と希望』

教師のコメント

吉井君らしいと言っておきましょう。

海谷陸の答え

『取り締まりの必要のない学園祭』

教師のコメント

取り締まるほどこの学園は治安は悪くないと思いますが……何かあったのでしょうか？

？

「さて、清涼祭に向けて出し物を決める。何か案がある奴は手を挙げて発表するように」

双月君が教壇に立って今度ある清涼祭に向けての話し合いを始める。本当なら雄二が仕切るべきなんだけど本人は不在のために双月君が仕切ることになった。最初は僕が言おうと思う。僕は手を挙げる。

「明久」

「普通に喫茶店とかどうかな？ 一番無難と思うけど」

「そうだな……コレを採用する場合はなにかしらの付加価値が必要になるがまあいいだろう。これはブレイクストーミングだからな。」

アキト、書け」

「うゝす」

アキトが書記役で黒板に意見を書いていく。案外達筆なのが驚きだ。

・喫茶店

「次、いないか？」

他の人はいないか探すと秀吉が手を挙げる。

「秀吉」

「劇をしてみてもどうかの？ 一発勝負じゃが、思い出に残るものになると思うのじゃ」

「劇か……アキト、追加だ」

「ほい」

・喫茶店

・劇

「他はいないか？」

他の人を探す双月君。すると姫路さんが手を挙げる。

「姫路」

「あ、あのつ。明久君の喫茶店に付け足す形になりますが、ウェディング喫茶とかどうでしょうか？ ドレスを着て客の接待をしたり……」

ウェディング喫茶か……女の子ならではの発想だね。やっぱりドレスとか憧れるものなのかな？

「なるほど、なかなか斬新なアイデアだ。アキト、追加だ」

「へい」

アキトが姫路さんの意見を黒板に付け足していく。

・喫茶店

ウェディング喫茶

・劇

「他に何か案はあるか？」

「はいはい！ 俺、俺あるぜ！」

双月君の呼びかけに健二君が反応するが、

「お前はダメだ」

容赦なく切り捨てた。

「なんでだよ！？ さっきブレインストーミングって言ったのお前じゃん！ 自由に意見を言わせるよ！」

「お前のことだ。どうせLIVEとか言うんだろう？」

「よく分かったじゃないか。その通りだぜ！」

双月君は健二君の答えを先読みして答えて、当たっていると言う健二君。でもね、健二君？ 今年それは無理だよ？

「だからダメだ」

「何でだよ？ 別にいいじゃんか？」

「体育館は今年何に使う？」

「あつ……」

「そう言うことだ」

そう、今回体育館は予約済みである。他ならぬ健二君の要望によって。何故かというと健二君の科学技術の展示会を体育館で行われる予定だからだ。学会での受けが良かったらしく、完成品や研究中の物を是非見せてほしいと要望が殺到したため、体育館を使って展覧会をすることになったのだ。

「つーか、去年もやっただろう？　また同じことやるつもりだったのか？」

「くそ、今年は俺なりにちゃんと計画を練ったのに……」

アキトが健二君に一言言うが、健二君は考えた計画を出来ずに唸っていた。残念だったね、健二君。双月君は話は終わったとばかりに他の人を見る。すると島田さんが手を挙げた。

「島田」

「これはさあ、別に意見とかじゃないんだけど……」

双月君の指名に遠慮がちに喋る島田さん。なんだろう？

「ウチ達だけで決めて良いの？　清涼祭の出し物」

清涼祭編、スタート

「いいんだよ、協力しない奴らは放って置いて」

島田さんの問いに答える双月君。そうなのである。今Fクラスにいるのは双月君、アキト、健二君、秀吉、姫路さん、島田さん、そして別名『幻想獣ハウス』の中にいるソルとルナだ。他のみんなは面倒くさいといった理由で、校庭で野球をしている。清涼祭も近くなっている時期にそんなことするなんてどうかしているけど、それが

学年最低クラス、Fクラスだ。

「他に意見はないか……うん？」

双月君が他の意見を出させようとしたら雄二達がゾロゾロと帰ってきた。野球は終わったのかな？

「思いの外早かったな。どっちが勝った？」

「いや、途中で鉄人が来てな。中止になって帰ってきた」

「そうか」

双月君は特に気にした様子もなく全員席に座るのを待った。席に座るの見計らって双月君が引き続き進行する。

「今清涼祭の出し物を決めている。ブレインストーミング形式でやっているから自由に意見を出してくれ」

双月君が途中経過を言って全員を促す。さっそく一人手を挙げた。

「近藤」

「ブレインストーミング形式って何ですか？」

………

クラスが静まった。

それぐらい知つとこうよ……。一部を除いて全員頭を抱える。

「な、なんだよ。知らないことを質問するぐらい良いだろう！」

「……俺が悪かった。ブレインストーミングは聞かなかったことにしてくれ。今後、自由に意見を出してほしい」

近藤君があまりのクラスの温度の変わりように驚いて何か言うが、双月君は頭を抱えてため息を吐きながらみんなに呼びかける。すると康太が手を挙げる。

「土屋」

「……写真館」

「却下」

「……まだ内容を言っていない」

「お前“が”言う写真館は問答無用で却下だ。次」

康太に説明も何もさせず問答無用で却下する双月君。そうだね、康太の写真館なんてやらせてはいけないよね。次に須川君が手を挙げた。

「須川」

「ウェディング喫茶も斬新で良いが、ここは味勝負で中華喫茶はどうだ？ 本格的なウーロン茶や簡単な飲茶を出したりするんだ」

「ほう、お前からそんな意見が出るとは思わなかった。アキト、追加だ」

「へいへい」

・喫茶店

ウェディング喫茶

中華喫茶

・劇

「他に意見は？」

「どうだ、はかどっているか？」

書き足された後、双月君がみんなに聞くがそこに西村先生が入ってきた。

「今、意見を集めているところです」

「ふむふむ……結構。ちゃんと進行しているようだな」

西村先生が黒板に書かれている内容を見て、納得した表情になる。

「そろそろ出す物を決めるよ？ 後の方にも突っかかってくるからな」

「わかりました」

そう言うのと西村先生はまた教室を出る。確認しに来ただけかな？

「それじゃあ、この中から採決を取る。やりたいというものの決めてくれ」

双月君が言つて、みんな各々の案に手を挙げる。そして結果は、

「中華喫茶に決定だな」

「だな。過半数に達しているからな」

中華喫茶に決定した。中華喫茶となると須川君の言ったとおり、味

勝負になるな。そうなると僕はキッチン側に行くべきかな？

「では、次にホール班とキッチン班に分ける。ホール班は雄二、キッチン班は須川の方に行ってくれ」

双月君の指示で僕たちは各々違う方に別れる。僕はもちろんキッチン班だ。

「あれ、康太もキッチン班？ 料理できるの？」

「……紳士の嗜み」

康太は絶対紳士ではないと思う。もし紳士だとしても変態という名の紳士だ。みんな思い思いに分かれるていく。

「あつ、それじゃあ私はキッチン班に……」

「姫路はホール班に決定済みだ」

「そうだな、ホール班以外あり得ないな」

「ど、どうしてですか！？ 私、料理が好きなのに！」

姫路さんがキッチン班に行こうとするが双月君と雄二が強引にホール班に決定する。それに対して姫路さんが抗議するけど、僕としてはそれが妥当と思う。何故かというと、

「お前さ、あの屋上の時の惨劇、まさか忘れた訳じゃないだろうな？」

「うつ……はい、ホール班にします」

姫路さんの猛毒弁当の被害者のアキトがあの時の惨劇を引き合いに出したため、姫路さんは渋々ホール班になった。他の人も各々に別れて大体人数の調整が取れたところで双月君が今後やるべきことを各班に説明して、準備に取りかかることにした。

おまけ

「明久、ちょっと幻想獣ハウスを返してくれねえか？」

「いいけど、どうして？」

「当日、展覧会の案内役にしようと思うんだよ」

「そうなんだ。はい」
「おう、サンキュー」

第三十二話：話し合い（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみに。

第三十三話：準備（前書き）

笑える要素が出てこない……

そんな悩みを抱えての三十三話です。

それでは、どうぞ。

第三十三話：準備

清涼祭アンケート

学園祭の出し物を決めるためのアンケートにご協力ください。

『喫茶店を経営する場合、制服はどんな物が良いですか？』

姫路瑞希の答え

『家庭用の可愛いエプロン』

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

土屋康太の答え

『スカートは膝上15センチ、胸元はエプロンドレスの様に若干の強調をしながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られる位のもthingを用意し、裏には口ゴを入れる。靴は5センチ程度のヒールを……』

教師のコメント

裏面にまでびっしりと書き込まなくても。

吉井明久の答え

『可愛ければそれで正義だと思います』

教師のコメント

可愛ければいいということでしょうか？

黒斗双月の答え

『性別をわきまえた制服』

教師のコメント

何があつたのかは聞かないでおきましょう。

「うーん……」

「どうしたの？ そんなに唸って」

放課後になり、みんなが遊ぶ約束やナンパしようぜと勧誘をかけている中、双月君は教室を見回して唸っていた。どうしたのだろうか。

「ああ、喫茶店で一つ悩みがあつてな」

「悩み？」

「ああ」

悩みってなんだろう？

「この教室の環境だ。試召戦争で卓袱台がランクダウンしてみかん箱になった。これだけなら良かったが、畳や壁、窓といった生徒の力ではどうしようもないところがある」

「それがどうしたの？」

「考えてみる。清涼祭の時に客が来てその客がこの環境のことを言いふらしたらどうなる？」

「ああ……」

そうか。この教室の環境は学年最低ランクで畳も一部腐っており、壁もひび割れ、極めつけに窓も所々割れている。こんな劣悪な環境

で誰も食べ物を食べようとは思わない。僕たちは自業自得だからと納得できるからいいけど、外部のお客様は違う。こんな劣悪なところで食べようとは思わないだろう。さらに風評被害まで出れば……容易に閑古鳥状態の喫茶店が想像できる。

双月君の言つとおりこれは非常に不味い状態だ。飲食物を扱うだけあつて。

「どうすればいいかな？」

「うん……」

僕の問いに双月君が頭を抱える。

「いつそのこと、学園長に直訴した方が良いんじゃないか？」

「ふむ……」

アキトも話に参加して意見を言う。その意見にまたも考え込む双月君。と、そこに、

「何の話をしているのじゃ？」

「何々、何の話？」

「あ、島田さんに秀吉」

向こうで話をしていた島田さんと秀吉がこっちに来た。こちらに集まっているのを見て来たらしい。

「ちよつと教室の環境のことで話し合っていてね」

「そうなの？」

「うん」

「じゃあさ、ついでにで良いんだけど坂本を呼んでくれない？ ちよつと協力を頼みたいのよ」

「ああ？ ゴリラを？ 何でだよ？」

「クラス全体で協力して欲しいことがあるのよ。ほら、あんた達つてやる気のある奴らにしか協力しないでしょ？」

「当たり前だ。やる気のない奴らを助けてやるほど聖人君子じゃないんだ」

「だからね？ クラスの全員を協力して貰うためにも坂本に協力を頼みたいのよ」

「別に良いけど、何で僕たちが？ 秀吉や康太でもいいじゃないの？」

「うっん、アキとアキトなら確実なのよ」

どうしてだろう？ 僕はまだ分かるけどなんでアキトまで？ あんなにいがみ合っているのに。島田さんに訳を聞くと、

「だって、あんた達愛し合っているんでしょ？」

「「ふざけんなー！」」

余りにもあり得ない理由に僕とアキトは怒鳴り返した。あんな奴と愛し合う！？ 間違っても、天地がひっくり返ってもごめんだ！ 大体同性だろ！？ 同性！

「待つんじゃ島田。どこからその情報を入手したのじゃ」

「だってこれに……」

秀吉の疑問に島田さんは本を三冊取り出す。その本のタイトルはこう書いてあった。

『バカと野獣の絡み合い』 (雄二×明久)

『獣たちの楽園』 (雄二×アキト)

『親友という名の恋人』 (アキト×明久)

「……」

ビリィ！

アキトが本を真ん中から破り捨てた

「ちょ、ちよっと！ それ友達からの預かり物よ！？」

「……そうか、そうか。あいつらはまだ懲りていないのか」

「そうだね。またOHANASIIしないといけないね」

「「フッフッフッフ……」」

島田さんがなんと言おうがどうでもいい。コレを書いた人と販売した人に今すぐOHANASIIしないといけない。覚悟しろよ。

「島田、一言言わせて貰うが現実と虚構の区別ぐらいつけろ」

双月君が一言言っ取りあえずこの件は終わりとした。

「そう言えば島田よ。さつきも聞いたのじゃがどうしてそんなに張り切っているのじゃ？ お主も一週間ほど前は面倒くさいと言っていたではないか」

秀吉が話を変えて島田さんに質問する。そういえばそうだ。島田さんも乗り気じゃなかったのにこの頃はすごく積極的だ。

「……本当は秘密なんだけどね協力してくれることだし。誰にも言わないでね？」

そう言つて一拍おいた後、島田さんが言い放つ。

「実は瑞希なんだけど……あの子、このままだと転校してしまうかも知れないの」

「転校！？」

「ちよつと！ 声が大きい！」

「あつ、ごめん」

余りにも急な話に僕は驚いた。転校！？ またどうして！？

「……そうか。この環境か」

姫路さんの転校話を聞いても全然動じなかった双月君が冷静に答えた。

「確かにそうだな。クラスの連中の学習意識のなさ、教室環境の劣悪さ。優等生様には最悪といっても良いほどの環境だ。こんなところで勉強なんざさせたかねえーだろうな」

アキトの言葉で僕は納得した。そうか、こんな環境下では姫路さんはまともに勉強なんてできないし体のことを心配しての転校話か。仕方ないと言えば仕方ないか。

「学習意識とかは召喚大会に出て、アピールすることでなんとかするんだけど教室の環境とか喫茶店の出来映えとかになると、やっぱり坂本の力が必要になって思つて……」

「……うん。そう言うことなら協力するよ。ちよつと待つてね」

双月君じゃあFクラス全員を動かすことは出来ない。さつきも言ったとおり自ら動こうとしないと協力したりはしない。だから雄二の力が必要になる。僕は携帯電話を取り出して雄二に電話をかけた。

「あ、雄二？」

『明久か？』

「うん、実はね……」

『ッ！？ やばい、見つかった！』

「え、どうしたの？」

『鞆を頼む！』

「えっ！？ ちょっと、雄二！？」

そのまま電話を切られた。なんだっただろうか……？

「ゴリラは今はダメっぽいな」

「しょうがない。途中で拾って行くか」

そう言っただけで雄二は立ち上がる。途中で拾うって、どうやって？

「大体の位置は掴んであるし、どうせ俺たちが行くべき場所と同じ場所だと思うからな。そのついでだ」

「行くってどこに行くの？」

「どこって？ そりゃ……」

双月君は不敵な笑みを浮かべながら言い放つ。

「学園長室さ」

途中、雄二を拾い事情を説明した後、雄二も協力することになった。これでクラスみんなのやる気に関してはOKだろう。

そしてたどり着いたのが学園長室。入ろうと思ったのだが、中で会話している声がする。

『……の賞品の……として隠し……』

『……こそ……勝手に……如月グランドパークに……』

「……なんか中で言い争って「邪魔するぞ」ってアキト！？」

中で言い争っている声がしたので引き返すかどうか聞こうとしたら、アキトが強引に入っていた。何しているの！？

「本当に失礼なガキ共だねえ。普通は返事を待つもんだよ」

そこには長い白髪に年相応の衰えは感じさせない人と思う学園長と藤堂カヲルと鋭い目つきとクールな態度で一部の女子生徒に人気が高い竹原教頭がいた。学園長とは何回も面識はあるけど教頭に関しては馴れ合いしたくないため、そんなに合ったことはない。どうしてか？ いけしゃあしゃあとアキトのことをバカにするからだ。「やれやれ、取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。これでは話を「こつちの用事が先だから」とつと帰れ、一流大学卒もどき」

……」

教頭の言葉に被せてきたアキト。すごく良いタイミングで言葉を被せてきたから何も言えなる教頭。

「そうだね、その礼儀知らずの言うとおりさ。さっさと帰りな」学園長もアキトに続いて教頭を追い払おうとする。教頭はなお食い下がろうと喋り出す。

「そうはいきません。こちらの話も「学園長、話があるのでこいつを下からしてください」君たちは……！」

双月君もアキトに便乗して教頭の言葉に言葉を被せた。すごいね、ここまで喋らせないって。

「……まあ、いいでしょ」「そうだ、とつと帰れ」……ッ」

止めに雄二が言葉を被せて終わった。教頭は学園長室から出て行く。それと同時に入れ替わるように陸君と二ノナ、健二君が現れた。

「……学園長？ 今のは……」

「あんたは気にしなくて良いよ。で、またその核弾頭が何かやかしたのかい？」

「失敬な、俺は真面目に騒動を起こしているだけだっつーの」

「さらに質が悪いさね……」

学園長がため息を吐く。お疲れ様です、学園長。

「明久達も来ていたの？」

「うん、ちよつとクラスの設備に関してね」

「そうなんだ。私たちもそれで相談に来たところなの」

「何？ どういうつもりだ？」

「聞いていれば分かるよ」

そう言つて、話し合いが陸君が双月君をさがらして、話し合いを始めようとしていた。

「学園長、展覧会の資料と書類を提出に来ました」

「ご苦労だったね。本来なら教師がすべきことなのにね」

「いえ、別に良いです。それよりも例の件ですが……」

「駄目だつて言っているだろう？」

「何ですか！ 今回は外部から大学の関係者や企業の上層部の人たちも学園にやってきました！ 下手なことは許されないですよ！」

「何度も言つたはずさね、この学園の教育方針だと」

「そんな言い分では来客に来るお客様や来賓客がどんな感想を持つと思つているのですか！？ 下手をすればスポンサーも減りますし、今年の入試希望者にも影響しますよ！」

「アンタの場合は違うね。アンタはそこにいる吉井、このガキがいるクラスだからなおさら声高に言っているんじゃないのかい？」

陸君と学園長の交渉がエスカレートする。つまり陸君は学年Fクラス設備の一新を申し出ているのだらう。だが、学園長がそれを許さないといった具合だ。陸君の言い分の方が正しい気がするけど、何で学園長はあんなに拒否するのかな？ 予算が足りないのだらうか？ 僕はどうかを考えることにする。

「……だがまあ、こんなに根強く言ってくるんだ。こっちの頼みを聞いてくれるのなら考えてもいいさね」

急に学園長は態度を切り替えてこっちを見る。頼み？ 何だらうか？

「頼み……ですか」

「そうさね。その頼みつて言つのは……」

そう言つて学園長は僕とアキトと雄二を見て、言い放つ。

「そのガキ三人の内、誰かが召喚大会に優勝することさ」

第三十三話：準備（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみに。

第三十四話：交渉（前書き）

自分が書いたもう一つの商品、『明久様』が思いの外、人気なのに驚いている紫炎です。

それでは、どうぞ。

第三十四話：交渉

清涼祭アンケート

喫茶店を経営する場合、ウェイtresのリーダーはどのように選ぶべきですか？

1・可愛らしさ 2・統率力 3・行動力 4・その他（ ）

また、その時のリーダー候補を挙げてください。

土屋康太の答え

1・可愛らしさ 候補・・・・・・・・姫路瑞希& a m p ; 島田美波

教師のコメント

甲乙つけがたいと言ったところでしょうかね。

吉井明久の答え

4・その他（カリスマ性） 候補・・・・・・・・海谷陸

教師のコメント

確かにリーダーといったら海谷陸君だというのは分かりますね。ですが、何故こんなにも用紙がしわくちゃ何でしょうか？

月宮健二の答え

2・統率力 候補・・・・・・・・Fクラス内なら黒斗双月、学年全体なら海谷陸

教師のコメント

君がまともに答えていることに私は驚きました。

坂本雄二の答え

4・その他（結婚相手）

候補・・・・・・・・霧島翔子

教師のコメント

どうしてAクラスの霧島さんが、用紙を持ってきてくれたのでしょうか？

「僕たちの誰かが召喚大会で優勝？」

「そうさ。だったら設備のことを考えてやらないでもないね」

急に話を振られて驚く僕たち。完全に蚊帳の外だったんだけどね。

「今回の大会の優勝賞品の副賞に厄介な物を出してしまつてね、その回収を頼みたいのさ」

「回収つて……そんなの学園長権限を使えば回収するぐらい造作もないことだと思うが？」

学園長が頼み事を言うが雄二の言うとおりで、学園長の権限を使えば取り戻すことぐらい造作もないことだ。むしろこうゆう時に使わずしてどんなときに使うんだ？

「そうしたいんだがね、教頭の奴が個人的に話を進め且つ賞品として大々的にアピールしてしまったからどうしようもないんだよ」

「つまり？ 自分の部下に任せつきりにしたせいで厄介な問題が起きてしまった。その尻ぬぐいを俺たちにさせようって算段か。相変わらず人任せだな？」

「……まあ、そんなところだよ。人任せつてのは、否定しないよ。」

実際こつち側の責任だしね。その代わりにその礼儀知らずの問題行為を何回か反省文程度ですませているんだけどね？」

学園長が理由を言つとアキトが皮肉っぽく返す。それをさらに返事を返す学園長。全く、アキトと学園長が会うといつてもこんな感じの会話を始めるんだから。僕はこつちそのため息を吐いた。

大会の副賞か……確か優勝賞品はトロフィーと賞状、白金の腕輪。副賞は如月グランドパークプレオープンペアチケットだったはず。

また、準優勝にも賞品があり、盾と賞状、灰色の腕輪。こつちにも副賞としてプレオープンチケットが贈呈される。普通の高校の大会にしては豪華だったから覚えている。腕輪ってどんな効果なんなのか、あとで健二君にでも聞いてみよう。

「それでね、厄介というのはねチケットの方なんだがね、嫌な噂を聞いてしまつてね」

「嫌な噂？ 何だ、如月グループはまた何かやろうとしているのか？」

学園長の説明に双月君が反応する。双月君も文月学園のスポンサーとして気になる所なんだろうな。

「如月グランドパークに訪れたカップルは幸せになれるっていうリンクスを作ろうとしているのさ」

「リンクス？……どうやって？」

「プレミアムチケットを使って来た2組のカップルを、結婚までコーディネートするつもりらしいのさ。企業として、多少強引な手段を用いてね」

「な、何だと!？」

学園長の説明を受けて、突然雄二が声を上げる。どうしたんだろうか？

「どうしたのさ、雄二?」

「どうしたもこうしたもねえ! 今ババアが言った事は“プレオープンプレミアムチケットでやってきた2組のカップルを、如月グループの力で強引に結婚させる”ってことだぞ!？」

「いや、そんなこと言わなくても分かっているし……」

「その2組のカップルを出す候補が、我が文月学園ってわけさ」

なるほど、雄二は霧島さんのことを心配しているんだな？

どこに不満があるんだろうか。

「くそつ、うちの学校は何故か美人揃いで、試験召喚システムって話題性もたつぷりだからな！」

「それに加えて、学生から結婚まで行けばジンクスとして申し分なしだ。候補としてこれ以上の学校はないだろう」

雄二が愚痴った後、双月君がだめ押しをする。確かに話題性はたつぷりな所だしね、うちの学園は。

「……つまり、この三人で優勝、準優勝を勝ち取り、そのチケットの回収をすればいいということですね」

「そう言うことさね」

「……」

双月君と陸君が考え込んでいる。何か裏があるとかそんなことを考えていると思う。でも、この頼みは渡りに船かな？

「いいじゃんか、乗ってやるぜ？ その提案」

「アキト……」

「四の五の考える必要はねえ。要は目の前の敵を全部、潰していけばいい話だろ？ 至極簡単じゃねーか」

「アキト……そう言うがな？ 今年の召喚大会は過去最大規模の大会で、実力者が一気に揃うぞ？」

陸君の言うとおりである。今年の召喚大会は副賞効果もあって、学生の参加意識が高く、健二君の展覧会と重なって大手企業の上層部や大学の関係者、さらには黒斗グループの総帥が来日するとあって今までにない最大規模で執り行われる。システムに注目が集まるのもそうだし、優秀な学生に目を付けるという意味もある。だから、そう易々と進めない大会になった。

でも、上等！

「僕とアキトのコンビが負けるはずないからね？」

「ああ。その通りだ！」

「はあゝ……、俺は忠告したからな？」

というわけで僕とアキトの二人で出場は決まり。雄二は自分で探すだろうから大丈夫だろう。

「じゃあ、頼んだよ？」

「はい（おう）！！」

そう言つて、僕とアキトと雄二は学園長室を去つていった。えっ？何か忘れていないかだつて？大丈夫、教室のことは双月君達に任せればOKだから。僕たちだと逆に丸め込まれそうだし。それに陸君の交渉ごとに巻き込まれたくないしね。

陸 side

全く、あいつらは……。

完全に双月と俺とニーナ、健二に交渉を任せやがつて。俺はため息を吐きながら健二に指示。

「健二」

「おう！」

健二は返事をするとお手製のパソコンを取り出して、カチカチと操作する。操作が終わるとパソコンを閉じる。

「映像と音声の差し替え、終わったぜ？」

「ご苦労」

「？ どういうことだい？」

訝しげに学園長が尋ねてくる。俺は本棚の方に指を差し向ける。

「あそこに盗聴、盗撮用のカメラが置いてあつた」

「な、なんだつて！？」

「ババアを取りたいなんて、酔狂な奴がいたもんだな？」

「でも、女性の盗撮と盗聴をしていたのには変わりはない」

俺が説明をすると学園長は驚いたかのように席を立つ。健二は理解できねえと頭を掻くが、盗聴、盗撮が許せないらしく二ーナは怒っている。まあ、別にどうでもいい。今はこっちの話だ。

「学園長？ まだ話は終わってませんよ」

「何のことだい？ 教室の設備なら……」

「俺は学園祭が始まる“前に”改善の要求をしているのですが？」

「……やっぱり、侮れないね。アンタは」

「お褒めに授かり光栄です」

さっきの話で終わった気になっているがそうはいかん。今日は丁度双月がいることだ。言質を取ってやる。俺は話を進める。

「学園長は当学園の方針だから無理だとおっしゃいましたね？」

「そうさね。それは今も変わらないよ？」

「だがもう一つ方法がある。違いますか？」

「……なんだい、もう一つの方法って？」

「双月」

「ああ」

もう一つの方法を双月に説明させるために、双月を話し合いに出す。双月は学園長と向かい合うと言い始める。

「学年の始めに言われました。『極力自分の力で何とかしてください』……と」

「そうだね。確かにそう言うようにあたしゃ言った……まさかつ！」

カチッ！

取った！ これで詰みだ！ 俺は不敵な笑みを浮かべる。

「双月？」

「ああ、バッチリだ。このレコーダーにばっちり録音した」

そう言つて双月は後ろに隠していたレコーダーを取り出した。これで何を言おうがどうとでもなる。さらに二ーナと健二の証人がある。言い逃れはできない。

「では、俺達は“自分たち”の力で何とかしましょう」

やられた……と学園長は頭を抱える。そう、俺はこの言質が欲しくてここ最近ずっと粘り続けていたのだ。仕込みを何度も同じ会話を
する。そして受け答えが慢性化したところでこの方法を取る。向こ
う側も飽き飽きしてくるから、適当に相手をし始めるから必ず言質
は取れる寸法だ。

「ああ、わかったわかった！ 好きにしな！！ 全く……」

学園長は最後投げやりに返事した。俺達は丁寧に返事を返して退室
する。幸いにも明日から二連休。工事にはピッタリの期間だ。何と
かなるだろう。

俺は小さな勝利の喜びに浸っていた。

第三十四話：交渉（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみ。

三十五話：前日（前書き）

今回は短いです。

それでは、どうぞ。

三十五話：前日

「大体の準備は整ったな……」

「うん、後は当日を迎えるだけだね」

準備完了な教室を見回して僕と双月君が話す。

清涼祭前日、僕たちは最後の打ち合わせが終わり放課後を迎えていた。さすがに今日は補習はなしである。

「それにしても驚いたなあ……二連休が明けると同時に教室のみかん箱とごさを除く設備が改築されていたからな」

「あれには驚いたのじゃ」

雄二と秀吉が話す。二人の言うとおりで教室のみかん箱とごさを除く壁や窓、畳が新品同様になっていたのだ。双月君に聞いたところ「『極力自分たちの力で何とかしろ』という学園長の言葉を実行したまでだ」と言われた。察するに双月君の知り合いで建築関連の人がいて、その人に改築を頼んだのだろう。喫茶店を経営予定だった僕たちとしては大助かりだ。

「テーブルもみかん箱ではなく、卓袱台を家から借りてきた奴だから衛生面も大丈夫だろう」

「何か悪いな。何から何まで」

双月君が実家から貸し出して貰った卓袱台数個を確認して、雄二は珍しく礼を言う。

「構わん。どこぞの代表がクラスの指揮をしないからな、こちらで何とかしなければなるまい」

「……悪かったって。あ、すまん。少し席を外す」

双月君が皮肉ると雄二は謝りながら席を外した。逃げたのかな？ 入れ替わるようにアキトが入ってくる。

「おい。とりあえず、怪しそうな所を全部リストアップしたぞ？」

「ああ、すまない」

「どうしたの？ そんなことして……」

「ああ、“奴ら”が現れないとも限らないからな。警備員を配備するところを最終検討するんだ」

“奴ら”？……ああ、奴らか。まだ諦めていないんだ。僕は“奴ら”のことを考えると頭が痛くなる。何度お世話になったか。双月君はリストを見ながら思案顔だからアキトと話そう。

「健二君達は大丈夫かな？」

「あいつなら大丈夫だろ？ お前の所の幻想獣もいるし、黒斗グルーブの警備があるしな。大変なのは陸と二ーナの方だ。あいつら清涼祭の全体司会とその補佐で動き回っているからな」

「うゝん、そうなると当日も会う確率は低いかな？」

「だろうな」

その後は軽い雑談をしていたら、康太と秀吉、姫路さんに島田さんが入ってきた。

「おお、お主ら丁度良かった」

「土屋が明日のための料理を作ったのよ。一つ味見で食べてみない？」

「……味見用」

「お茶もありますよ？」

そう言つて康太が胡麻団子を差し出し、姫路さんが急須に入ったお茶を差し出す。僕たちは喜んでまず胡麻団子を頂いた。

「……あ、うめえな、これ」

「うん、表面はカリカリで、中はモチモチ。甘すぎないって所もいいね」

「これはお茶が欲しくなる味だな」

本当においしい。これなら十分通じる味だね。お客さんにも好評間違いなしだよ。アキトと僕、双月君が各々の感想を喋ると姫路さんが用意していたのかお茶が手渡される。お茶も頂くとこれもまたおいしい。

「土屋がこんなに料理ができるのは驚きだな」

「少し認識を改める必要アリだな」

双月君とアキトは康太の認識を改めるようだ。康太もなにげに得意顔をしている。

「今戻った……って何しているんだ？」

そこに雄二が戻ってきた。集まっている僕たちを見て何事かと思っただろう。こちらに寄ってきた。

「今土屋の料理の味見をしていたのじゃ。雄二もどうかの？」

「おっ、ありがたい。どれどれ……」

秀吉に誘われて雄二も胡麻団子をつ。

「ふむふむ……表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず辛すぎない味わいがとても……ンゴバー!!」

味を噛みしめるかのように食べていた雄二が顔を真っ青にしており得ない擬音を叫んで倒れた。

「……って雄二!!? 大丈夫!?!」

「しっかりするのじゃ!」

「ちよつと! 坂本、大丈夫!?!」

突然のことに戸惑う僕たち。雄二は一応悪友だし心配してあげるけど、これって誰かが毒殺しようとしたってことに他ならない。くそっ、誰が一体こんなことを……!

「……姫路」

「はい。何ですか？」

「厨房に立ったか？」

「はい! 私も成長したことを知ってもらいたくて!」

うん、確かに成長したね。悪い方向に。

「……成長してねえーどころか、悪化しているだろうが。もう料理するな」

「そ、そんなことは……!」

「見ろよ、あれ」

そう言つてアキトは僕の目の前で倒れている雄二を指差した。姫路さんも雄二を見る。雄二は視点の定まらない虚ろな目でしゃべり出す。

「ああ、大丈夫だ」

雄二がそう言うのと姫路さんは安堵したのかすこし自慢げだ。だけど、ぼくには嫌な予感しかない。その証拠に、

「あの川を渡ればいいんだろう？」

渡っちゃいけない川を渡ろうとしていた。

「雄二！ その川は渡っちゃ駄目だ！」

「戻れなくなるぞ、雄二よ！」

僕は必死に心臓マッサージを開始した。雄二、まだ君にはやるべきこともあるし、彼女を残して死ぬつもりか！？ そんなことはさせないぞ！

「六万だと！？ バ力を言え、普通渡し賃は六文と相場は決まって……はっ！？」

僕たちの必死の蘇生のおかげで一つの命が助かった。

「……まあ、これで姫路のホール班は完全決定だな」

「姫路、厨房に立ったら第一級犯罪として召喚大会の待機場所に監禁させるからな」

「はい……うう」

アキトの一言で姫路さんは永久ホール班で決定して、双月君の厳命が下された。それによって落ち込む姫路さん。姫路さんには悪いけど今回は彼女が悪いのでフォローはできない。

「……あー、坂本、大丈夫？」

「ああ、一瞬顔も知らない曾祖父と会話しかけたがなんとか大丈夫だ」

「それって相当危ないよね」

「土屋よ、喫茶店の成功はお主の手に掛かっておるからの、頼んだのじゃ」

「……任せろ」

島田さんが雄二のことを心配して、雄二は何ともないと言う。だけど雄二？ それは相当危なかった証拠だからね？僕はそう突っ込む。それを受けて秀吉が康太に頼み込んで、康太がそれを了承した。

「……思わぬイレギュラーがあつたが、何とかなりそうだな」
苦笑混じりに双月君が呟くのが嫌に響いたのであつた。

??? side

ここはとある飛行機の中。どう見ても自家用ジェットと言える飛行機の内部で一人の女性がパソコンを扱っていた。そのパソコンには『文月学園 清涼祭』と表示されている。それを見て女性は柔らかい笑みを浮かべた。

「久しぶりの再会ね……」

彼女はポケットから写真を撮りだした。そこには健二、ニーナ、陸、アキト、明久、双月が彼女と一緒に写真に写っていた。その写真を見て懐かしむように笑う。

「総帥」

思い出に浸る彼女に後ろから声が掛かる。彼女は振り返ることもなく応える。

「何かしら？」

「もうすぐ日本に着くとのことですよ」

「そう……」

彼女は立ち上がって飛行機の窓から外を見る。少しずつ暗闇が空を覆い始めていた。

「……あの子達、少しは大きくなったかしら？」

笑みを浮かべながら彼女は外を見つめる。

「ねえ？ 御鏡？」

「おそらくは」

彼女は席に座り、呟いた。

「早く会いたいわ、双月」

三十五話：前日（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみに。

第三十六話：大会一回戦（前書き）

今回はここ変なんじゃないかと思うかもしれませんが。

それでは、どうぞ。

黒金の腕輪と書いてありましたが灰色の腕輪に変更しました。

第三十六話：大会一回戦

「……以上で清涼祭、開会式を終わります。生徒はそれぞれの位置についてください。召喚大会に出場する選手は時間に遅れないようにしてください」

清涼祭の開会宣言を教室で聞いていた僕とアキトはみんなに断って召喚大会会場に向かった。

今日は待ちに待った清涼祭当日。二日間通して行われる学園祭で、今回は召喚大会、生徒の作品展覧会、クラスで作った店で楽しむのである。僕たちにとっては姫路さんの転校が掛かっている所以他のクラスに比べて士気が高い。今回は警備も万全で双月君の実家の黒斗グループの警備員が出張サービスで来ている。日本や世界にとって大物が今回は集まるので警備はより一層厳重だ。

そんなことを考えている内に召喚大会の会場の方に着いた。

「選手の人はこちらの招集の受付をすませてくださーい！」

係の人が選手に呼びかける。僕とアキトは受付を済ませて選手入り口に向かう。選手入り口に着いたら、係の人がいて「呼ばれたら出てください」と一言言って退散した。一回戦まであとちょっと時間がある。僕は気分をリラックスしようと深呼吸する。

「もうすぐだな」

「うん、そうだね」

アキトが話しかけてきたので返事をする。アキトの方を見ると全く緊張していないのか、顔が笑っている。緊張という言葉からアキトは程遠いんだろうな。

「最初から一般公開だなんて、去年はなかったのにね」

「それだけ今回の召喚大会は注目されているんだろう？ 大物も来ているし、黒斗グループ総帥まで来るらしいからな」

「ってことは、あの人が来るのかな？」

「ぜってー来るぜ。まあ、俺としたら親父が来なければ万々歳だが

な？」

「あはは、あの人凄いもんね」

あんなに息子を愛する父親っていうのも驚きだけどね。僕はアキトの父親を思い出す。最初にあったときはアキトの性格が反抗的になったのは父親が原因なんだって思ったからね。

「それでは召喚大会、記念すべき第一回戦を始めます！ 選手入場！」

時間が来たようで選手の入場が促される。僕はアキトと一回だけハイトタッチをして入場する。

「ワァーーーーー！！！」

入り口を出ると観客から大きな歓声を受ける。正直、驚いた。まさか最初の試合からこんなにいるとは思わなかった。周りに少し圧巻されながらも僕は試合中央に歩いていく。アキトの方を見るとどうと言うこともなく歩いている。そして僕たちは位置に着いた。

「まずは青コーナー、Fクラス吉井明久、アーカーシャ・アキト選手！！！」

実況の人が僕たちの紹介をする。

「いくぜ、明久！」

「うん！ やろう、アキト！」

僕たち二人は気合い十分！ どんな敵が現れても負ける気がしない。さあ、最初の対戦相手は誰だ！？

「赤コーナー、Dクラス清水美春、玉野美紀選手！！！」

「「げっ！？」」

玉野さん……だと……！？ 彼女もこの大会に参加していたのか！？ 向こう側から清水さんと玉野さんが位置に着く。ほ、本当に玉野さん……。

「まさか初戦からワタクシ達に当たるとは不運ですわね。ねえ、玉野さん？」

「初めての人がアキちゃん達……初めての人がアキちゃん達……初めての人がアキちゃん達……」

ゾゾゾッ！！

僕たち二人は嫌な寒気が走った。清水さんはどうでもいいけど、玉野さんだけは苦手だ。しかも軽く暴走状態だ。不味い……非常に別の意味で不味い……。僕たちはいろんな意味でこの試合に勝たなければいけなくなった。

「どうやらこの試合、因縁がある戦いのようですがそことこどうなんでしょうか、解説の黒斗さん？」

あ、言い忘れたけど双月君は所々で解説を頼まれている。特にアキトと僕が出る試合は。

「どっちかというと、玉野選手と吉井選手、アーカーシャ選手の三人の間で何かあった感じですね」

ちなみに言うつと解説の時は完全に中立の立場に回るため、僕たちのことも姓名で呼ぶ。

「そうなんですか……。それではこの試合、実況は放送部所属のこの私、新野すみれ。解説に高橋先生と臨時解説者、黒斗双月さんでお送りします。それでは軽くルールの説明に入ります」

出場するに当たってルールの方はちゃんと確認してきたので聞かなくても大丈夫だ。確か、

- ・点数がゼロになった方が負け。

- ・棄権はあり。

- ・一試合につき一科目のみ。決定された科目は変更できない。

この三つさえ押さえておけば何とかなる。僕たちは対戦相手とにらみ合いを続ける。

「試召戦争の時は後れを取りましたが、そう何度も豚野郎共に負ける美春ではありません！ 今日という今日はお姉様に近づく不屈きものに天罰を与えてやりますわ！」

「アキちゃん達アキちゃん達アキちゃん達アキちゃん達アキちゃん達アキちゃん達アキちゃん達アキちゃん達アキちゃん達アキちゃん達アキちゃん達アキちゃん達アキちゃん達アキちゃん達アキちゃん達……（じゅるり）」

「明久！ 絶対勝つぞ！」

「うん！ 絶対に勝とう！」

僕たちの貞操のためにも！！ 清水さんが何か言っているけど、正直玉野さんの方がものすごく怖い。とんでもないぐらいに怖い。特によだれを出す辺りが！

「……では、ルール説明も終わったところで試合を始めましょう！

科目は……古文！」

僕たちはそれぞれ構える。

「……サモン！！」「……」

それぞれのポーズを決めて召喚獣が召喚される。

古文

清水美春 97点 D

玉野美紀 161点 D

VS

吉井明久 152点 F

アーカーシャ・アキト 142点 F

玉野さんの点数が案外高いことに驚く。召喚獣をみると玉野さんは弓道スタイルだ。見るからにその弓で後方支援をすることが目的だろう。だが、侮ってはならない。彼女は僕が観察処分者だつてことは知っている。だから僕が接近すれば抱きついてくることは必須だ。清水さんの装備はAクラスランクとはいかないが、それなりの西洋の鎧に騎士剣をもっている。僕たちの召喚獣は試召戦争から変わらずである。

「次にバトルフィールドを設定します。フィールドは……草原！」
このバトルフィールド設定は健二君がより大会を盛り上げるために考えたシステムである。殺風景なフィールドでは物足りないとして展覧会をセッティングする一方、大会用にバトルフィールドのプログラムを作り上げた。今回の草原は草が足の高さまで生えていて、

青空のホログラムで会場を包むシンプル且つ大仕掛けのバトルフィールドだ。本当にこんなものを片手間で作る健二君は凄いと思う。

「それでは試合スタート！」

「先手必勝だ！ 行くぞ、明久！」

「うん！」

開始と同時に僕たちは前に出る。清水さんがそれを迎え撃つ。

「先に潰してやるってうお！？」

清水さんを迎撃しようとしたアキトだけど、玉野さんの矢に体勢を崩される。

「隙ありですわ！」

「させるかあ！」

追撃しようとした清水さんを僕が阻む。その間にアキトは体勢を立て直すが、玉野さんが矢でアキトを狙い打つ。それをアキトが避け続ける。

「あの豚野郎の助けがなければあなたなど敵ではありませんわ！」

「そう……」

清水さんは余裕が出来たのか、饒舌にしゃべり出す。僕は舐められたものだと思いつつ、拮抗状態だった剣を引く。急に拮抗を解かれたせいで清水さんの召喚獣は前のめりに倒れる。僕はあえて追撃せず距離を取った。僕がいた場所には矢が何本か刺さっていた。

「玉野さんの射撃技術は脅威だね……」

「ああ、下手に頭なんてぶち抜かれたら一撃死だ」

僕は半暴走状態の玉野さんの戦い方を見て、アキトと相談する。この戦いはどうするかを。でも、すぐに答えが出て僕たちはそれぞれの敵に向かった。

実況席 side

「これは中々白熱した勝負です！ 互いに一歩も引きません！」

「点数差で清水さんが脱落すると思われたのですが、玉野さんの力バーによりまだ生きています。これは試合が分からなくなりましたね」

「いえ、もうすぐ着くと思いますよ？」

実況が試合状況を興奮気味に喋る一方、高橋先生と双月は互いに異なった意見を出した。

「おや、どうしてですか、黒斗君？」

「まず、最初の駆け引きは吉井選手とアーカーシャ選手は様子見感覚でした。ですが、今は対抗策を見つけたと言ったところでしょう。また、清水選手は力押ししかしていません。そんなのでは今大会の優勝候補の二人には通用しません。玉野選手がなぜあれほどの射撃技術を持っているかは不明ですが」

「優勝候補……ですか。ですが、彼らはFクラスですよ？」

「彼らは操作技術においては学園トップと言っても過言じゃない技術を持っています。さらに苦手教科こそありますが、徐々に点数を上げてきている者でもありますので優勝する可能性が高いと言っても過言じゃないと思います」

「なるほど……Fクラスにいながらにして学習意識が高い生徒と言うことですね？」

「そう言うことです」

「なるほど、これはFクラスの認識を改める必要があるみたいですね」

このような行われる一方、双月の言うとおり試合は終わりを迎えていた。

明久 side

もう、好き勝手いってくれるな双月君は。まあ、それだけ期待していると受け取っておこう。実際もうすぐケリが付きそうだし。

試合状況は僕が清水さんを、アキトが玉野さんをそれぞれ相手にしていた。作戦は至極簡単で強制的に一对一の状況を作り出すというものだ。具体的に言えば、玉野さんの矢をアキトが迎撃しているといった感じだ。僕はそろそろ終わらせようと清水さんに斬り掛かる。「なぜですの!？　なぜあたらないのですか!？」

自分の攻撃が全く当たらないことに焦って、僕に対する迎撃が曖昧になる。僕は振り切ってしまった清水さんの剣を避けて、頭に刀を一突き。

清水美春　戦死

清水さんを倒した後、僕は玉野さんの方に向かう。だが、アキトが僕が止めを刺したのを見届けた後、同じく一気に玉野さんの懐に入り込んで、首を貫いて引き抜いた。

玉野美紀　戦死

「勝者、Fクラス吉井明久、アーカーシャ・アキト!！」

僕たちは勝利して、一息つく。これで僕たちの貞操が守られた。ふと、二人の方を見ると清水さんは悔しそうにさっさと退場して、玉野さんは顔を俯かせながら退場していた。それを見て、何かを感じて、少々不安になった。僕はアキトに目配せをする。アキトも最初は嫌な顔をしたが、最後には頷いてくれた。観客の声援を受けながら僕たちは退場した。

退場した後、僕たち二人は玉野さんの元に急いだ。玉野さんは試合会場の待機場所にいて、顔を俯かせて落ち込んでいた。さっきの暴走状態とは大違いである。僕たちは玉野さんに声を掛ける。

「玉野さん」

「アキちゃん……」

呼び方が可笑しいけどこの際それは追求しないでおく。玉野さんは

顔を俯かせたまま喋る。

「……ごめんね。変な価値観、押しつけちゃって。迷惑だつて分かっていたし、自分勝手だつて思っていたから今回の大会で優勝できなかったらもうやめようつて思っていたの」

玉野さんはぽつりぽつりと今回の大会の出場目的を喋り出した。やつぱり……最初の対峙であんなに暴走していたのに、負けたらその時の落ち込みようが半端なかったから心配になって来たんだけど、そんな決意を抱えて……

正直に言えば迷惑していたからやめて欲しかったし、僕たちも押しつけられるのは嫌だった。でも、無下には出来なかった。だつてそれに対する想いは純粹だったから。僕は少し考えて言う。

「……やめてもらえるなら僕たちとしても嬉しいよ。でもね、玉野さん。玉野さんが抱いていた“純粹な想い”まで捨てちゃダメだよ。それはとても大切なものだから」

彼女はアキちゃんという価値観を捨てるのと同時に、自分が持つ純粹な想いまで捨てようとしている。純粹に何かが好きって想いも。それはいけないことだ。

「もう『アキちゃん』には会えなくなるかもしれないけど、『僕』や『アキト』にはこれからも会えるから」

玉野さんは顔を上げて僕たちを見る。僕は玉野さんの手を握って、笑顔で言う。

「友達になるう？ 『アキちゃん』っていう偶像の人じゃなくて『僕』と『アキト』っていう目の前にいる人と」

だから友達になるう。彼女の追い求める偶像の人を捨てて、目の前にいる僕たちと。

彼女は『アキちゃん』を追い求めるあまり友達がいらない。陸君が言っていたから間違いないだろう。だから支えてくれる人もいない。だから負けたときは誰にも悟られることもなく、大好きなものを捨てようした。それは凄くつらい。どうしようもないぐらいに。

だから僕は支えてあげたいと思った。このまま放置するのは嫌だつ

た。どんな形にせよ、僕たちを慕ってくれる人の悲しむ姿は見たくなかったから。

……変な理屈になっているかな？ でも、僕は出来る限りのことをしたつもりだ。これが的外れな考えだったのなら、僕はそこまでの男だったただけだ。

「……あは、あはは」

玉野さんが笑顔になって笑い始めた。僕はその笑顔を見てよかったと思う。だって玉野さんはとても晴れやかな笑顔だったから。一通り笑い終わると玉野さんがしゃべり出す。

「あはは……うん、友達になろう！」

「うん！」

僕が返事した後、僕はアキトの方を見る。アキトも頭を掻きながら、
「……もう女装なんざしないからな」

と呟いた。これはアキトなりの返事だ。素直に言えばいいのに。

こうして、僕たちの召喚大会の一回戦は幕を閉じた。

第三十六話：大会一回戦（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみに。

第三十七話：妨害

玉野さんをDクラスに送り届けた後、Fクラスに戻った僕たちはアキトは調理班、僕はホール班に入った。僕たちの活躍を知ってFクラスにはそれなりに客足が増えていた。人数もいるので忙しく回る。「胡麻団子とウーロン茶を一つ！」

「わかった！」

注文が入り、それを厨房に伝えて料理を作る。出来た料理をホール班が運んでいく。

「お待たせしました！ 胡麻団子とウーロン茶です！」

「ああ、ありがとう」

うん？ 何か聞き覚えのある声がしたような……？ まあ、いつか僕は客を捌いていく。少したった後、姫路さんと島田さんが帰ってきたので二人にもホール班で働いてもらう。最初は二人とも緊張していたが、回数をこなすにつれてスムーズに動くようになった。ちなみに二人も一回戦を突破したらしい。また少したった後、

「おい！ 責任者を出せゴラア！」

急に一組の客が騒ぎ出した。何だろうか？ いつの間にか戻っていた双月君が厨房から現れて騒ぐ客の方に向かう。

「責任者は私ですが……なんでしょう？」

「食べ物の中に虫が入っていたぞ？ どんな衛生管理をしているんだ、ここは！」

食べ物に虫？ キッチン班に限ってそんなことをするはずが……

僕も気になって双月君の方に近寄る。

「申し訳ありません、今すぐ新しい料理を用意します。ですので……」

……

「そんなこと言っているんじゃないぞゴラア！」

双月君が頭を下げて謝るが、客は許す気もないのか怒鳴り続ける。よく見たら客は内の学園の生徒だ。あそこまで怒鳴らなくてもいい

ような気がする。さらに客がさらに怒鳴り続ける。

「こんなこととしていいと」「まあまあ落ち着きたまえ、君たち」「ああ！？」

クレームを言い続ける客に対して他の客が話に割り込む。うん？

あの人は……

「せっかくみんな仲良く食べたり、飲んだりしているんだ。こんなところでピリピリしたら料理が不味くなってしまっよう？」

「何言ってやがる！？ その料理に虫が入っているから文句言ってやがるんだろうが！」

「嘘を言ってはいけないよ？ その虫は今君たちが入れたものだからね？」

何だって！？ 僕と双月君は驚いてクレームを付ける方の客を見る。本当ならこれって……

「な、何言ってやがる！？ これは最初から……！？」

「息子の勇姿をこのビデオカメラで納めようとカメラ越しに息子を捜していたらいらぬものまで映ってしまったね。何だったら見せてあげようか？」

そう言ってカメラを双月君に差し出すもう一人の客。双月君がそれを確認する。するとクレームを付けてきた客が急に席を立って逃げようとする。突然のことで僕は反応できず、取り逃がしてしまう。

出口に差し迫った迷惑客だが、

ガシッ！

「……何処に逃げようとしている？ それ以前に食い逃げをするつもりかアア！」

アキトが迷惑客二人の頭を鷲掴みにした。手加減しているのか、いつものようにメキメキという音がしない。

「どうやらこの客の言うとおりらしいな。ビデオでも確認した」

つまりこれって立派な……

「営業妨害……だな」

「どうする？」

「風紀委員に引き渡そう。俺が行ってくる」

双月君はどこから取り出したのか、ロープを迷惑客に巻き付けて連行していった。入れ違いで雄二と秀吉が入ってくる。

「何かあったのか？」

「あ、雄二に秀吉。実はね……」

僕はさっきまでのことを説明する。説明を受けた雄二は「肝心なときにいなくてすまなかったな」と言った。雄二がこうも素直になるなんて……明日は槍が降ってくるのか？

「風紀委員に引き渡されたなら大丈夫じゃろう。しかし、はた迷惑なことじゃ」

「ああ、迷惑極まりないな」

「これもそれもさっきの人のおかげだよ」

さっきに人にお礼を言おうと僕たちはそっちの方に振り向くと……

ゴシャ！！

先ほどの人が見事にアキトに蹴り飛ばされていたところだった。つて！

「何やっているのアキト！？」

恩人とも言える人を蹴り飛ばすなんて何を考えているんだ君は！？

僕たちは急いでかけつける。

「学園祭に来るなって言っただろうが、糞親父い……！」

……えっ？

僕はアキトの言葉を聞いて蹴り飛ばされた人をよく見てみる。黒髪に黒目、若そうな人……あっ、本当だ。この人は……

「フッ、相変わらずの右の蹴りだね……アキト」

何故か恍惚とした表情を浮かべるアキトの父親ことアーカーシャ・
守さんがいた。
来ていたんだ、この人……。

第三十七話：妨害（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみに。

第三十八話：親バカ（前書き）

今回は謎の女性の正体が分かります。

それではどうぞ。

第三十八話：親バカ

清涼祭アンケート

今回の清涼祭に？来て欲しい人と？来て欲しくない人を書いてください。

吉井明久の答え

？ 母さんと近所の人
？ 姉と父

教師のコメント

吉井君は母親が大好きなんですネ。

坂本雄二の答え

？ 特になし
？ 母

教師のコメント

吉井君と打って変わって母親に来て欲しくないとは……何か事情があるのでしょうか？

清水美春の答え

？ 女性（特にお姉様）
？ 豚野郎共（男子）

教師のコメント

男女差別はいけませんよ。

アーカーシャ・アキトの答え

？ 母親

？ 親父、何が何でも親父、死んでも来て欲しくない親父、むしろ死ね親父

教師のコメント

自分の父親をそんな風に言うのはいけませんよ？

教室 side

時間を少し遡ってFクラスの中華喫茶「ニーハオ」。アキトは双月に妨害犯を引き渡した後、厨房に戻ろうとした。だが、何か嫌な視線を感じて視線を感じる方を見ると、アキトは心底顔を歪めた。そこには何かに打ち震えている先ほどのビデオカメラを持った客がいた。アキトは咄嗟に身構える。そして、

「会いたかったよー！！ マイ スウィート サーーーーーン！！」
服を脱がないルパンダイブで襲いかかってきた。アキトはその客をドガッ！！

足で蹴り飛ばした。

「グハッ！」

何故か悦惚とした表情で吹っ飛んでいった。幸い吹っ飛んだ先は廊下だった。

明久 side

アキトの父親ことアーカーシャ・守さんが廊下で伸びているけどアキトは微塵も心配せず、むしろ止めを刺そうと拳を構えていた。さすがにそれはいけないので止める。

「落ち着いてアキト！ そんなことしたら駄目だよ！」

「放せ明久！ こいつは今日、ここで仕留めてやる！」

押さえてもアキトは尚も暴れ続ける。それを見て守さんが笑みを浮かべて一言。

「全く、恥ずかしがり屋だなアキトは。そんなに恥ずかしがることなんて何一つないんだよ？ なぜなら……」

守さんは服をはたきながら立ち上がり、アキトに向けて満面の笑みを浮かべてまた一言。

「私はこんなにもアキトのことを『息子』として愛しているんだからね！！」

「殺してやる、この糞親父！！！！」

これ以上煽らないで守さん！と心の中で叫ぶ僕。言われたアキトはさらに暴れ出すため、僕と雄二、秀吉の三人がかりで押しとどめた。

「ぜえ、ぜえ、ぜえ、ぜえ……」

あの後アキトを何とか沈静化した。全く、守さんには困ったものだよ。僕はアキトのことをビデオカメラで撮影し続けている守さんを見る。

彼はアーカーシャ・守。アキトの義父である。何故義父なのかはこの際置いておく。彼はこの町にある銀行の役員で、相談しやすい性格で人の愚痴やら相談やら聞いているため人望は厚い。だが、一つだけ欠点がある。

それが先ほどの過剰な家族愛である。特にアキトに対しては初めて

の息子だからと過剰な愛を注いでいる。アキトには気持ち悪がられているのだが守さんは気にしていないため、アキトは蹴りやパンチ、格闘技、プロレス技で沈めている。だが最近耐性が着いたためか一撃で沈むことはなくなった。かといって過保護というわけではないのである程度アキトの自由にさせている。でも会えばこうなる。

ビデオカメラで撮るのを一時やめて守さんはアキトに話しかける。

「先ほどの一回戦見たよ、アキトに明久君。すごいねえ、さすがだね」

守さんが笑顔を浮かべながら先ほどの試合の感想を述べる。なんかそんな風に真つ正面からいきなり言われると少し照れる。アキトもそっぽ向いている。アキトも恥ずかしいのかな。守さんはなおも続ける。

「最初Fクラスに入ると聞いて勉強の面やアキトの負担とかを考えていたのだけど、あの一試合を見る限り大丈夫そうだね。教室自体も最低限の衛生面も保証されているみたいだし」

「えっ、守さんは教室とかも見に来たんですか？」

「当たり前じゃないか。学校の入学の際、クラス環境とかちゃんと見たんだよ？ その中でもFクラスは学年最低ランク設備だったという印象が強く残っていたからね。アキトやアキトのお友達を含めて少し心配だったんだ。なんだったら抗議に出向こうかと思っていたからね」

守さん……アキトのみならず僕たちのことまで心配して……。

「ありがとうございます、守さん」

「いや、気にする必要はないよ。親として息子や息子のお友達を心配するのは当然さ」

守さんはこういうところが大人だなあって思う。

「アキト、そっちを見てないでこっちも見ておくれ。ずっとそっぽ向かっていると父さん寂しいぞ」

「……フン！」

アキトは守さんの方を見ることなくFクラス内の教室に戻っていつ

た。もう、照れ屋さんなのだから……

「もう照れ屋さんなんだから……母さんに甘えるつもりで私の腕の中に来てもいい「オラア！」グハア！」

一言余計なことを言った守さんはあえなくアキトに蹴り飛ばされて今度こそ撃沈した。……守さん、その一言がなければ良かったのに。

「……あいつも身内で苦労しているんだな」

後ろで雄二が何か呟いたが僕には聞こえなかった。さて、これ以上仕事を抜けるわけにもいかず、僕は教室に戻ろうとした。

その時、

バラバラバラバラ！！

グラウンドにヘリが着陸してきた。僕は驚いてそのヘリを見る。よく見てみるとそのヘリにはある紋章がついていた。その紋章を見た瞬間、僕はグラウンドの方に駆け出す。途中、双月君と合流してグラウンドに出る。他の暇だったと思われる生徒もグラウンドに出てくる。ヘリの周りには黒服の人が数人いて、ヘリの中から人が出て来た。

出て来た人は夜空のような長髪ストレートの黒髪でスーツを着ている女性だ。スタイルもリーナと匹敵するぐらいに美しく、出るころが出て締まるところは締まっている。瞳は黒色で柔らかい雰囲気醸し出しながら、他者を圧倒する雰囲気を出している。

彼女は秘書に支えられてグラウンドに降り立った。礼を秘書の人に言うと、人を探しているのかキョロキョロと周りを見渡す。そして双月君と僕を見ると笑顔を浮かべて、こっちに歩いて近づきながら声を掛けてくる。

「双月君！ 明久君！」

僕は久しぶりの会合に驚いて言葉が出ない。双月君はその女性を見て一言。

「姉さん……」

と言った。

そうこの女性こそ世界屈指の経済グループ、『黒斗グループ』の総帥にして、双月君のお姉さん、黒斗美月さんだ。

第三十八話：親バカ（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみに。

第三十九話：2回戦（前書き）

実を言うと美月さんの活躍の場はまだ先なんですね。

それでは、どうぞ。

第三十九話：2回戦

「へえ、これがあなたたちのクラスの出し物なのね。フムフム……」

今僕たちの喫茶店では双月君のお姉さん、黒斗美月さんがいる。付き添いの秘書に黒服の人が男女一人ずつ付き添っている。この状況を見て客がにわかにざわめきたったり、Fクラスの男子が「美女が来たあ！」と料理を気合いを入れて作り出す。

「姉さん、来るなら開会式の時から来ていて欲しかったんだが……」
「いいじゃない。主役は遅れてくるものよ」

双月君がお茶を出して美月さんの相手をする。美月さんか……

この人は黒斗美月さん。双月君のお姉さんにして世界屈指の経済グループ『黒斗グループ』の総帥である。12歳の時にハーバード大学を首席卒業した世界を震撼させた天才児。18になったときに大がかりな黒斗グループの後継者争奪戦で他の大人を退けて総帥に着任した。その才覚は留まるところを知らず、彼女の代で国内最大から世界最大級の経済グループにのし上げた。双月君のことを弟として愛しており、僕の姉やアキトの父親と違い常識人で場を弁えてくれる僕にとって理想的な姉だ。

来るってことは知っていたけど、まさかあんな登場をしてくるとは思わなかった。双月君は呆れながら話を続ける。

「あんな登場をすれば何事かと思うでしょう。実際あれだけ生徒が集まっていたし」

「ごめんなさいね。一刻も早く会いたかったから空港から直に着たのよ」

美月さんは苦笑しながら答える。そうか、だからあんな登場をしたのか。僕は納得がいった。

「明久君？」

「は、はい。何でしょうか？」

急に美月さんに話しかけられて我に返る。美月さんは柔らかい表情を浮かべながら話しかける。

「弟はどうかしら？ うまくやっている？」

「は、はい。仲良くしています」

「もう、そんなに堅くならなくてもいいのよ？ いつもみたいにして」

「す、すみません」

うう、美月さんを前にするとやっぱり緊張する。ここに健二君がいたらまた場の空気は違ったんだろうけど。僕は美月さんから溢れる圧倒的な存在感にたじたじになっていた。やっぱりあるんだよね、貫禄ってものが。若いながらすさまじいよ。

ピンポンパンポーン……

うん？ 放送？

『今から召喚大会第2回戦を行います。選手の皆さんは試合会場に集まってください。繰り返します……』

「明久！」

「うん！」

厨房にいたアキトに声を掛けられて僕は返事をする。僕は美月さんに一言断ってから行こうと美月さんの方を向いた。

「僕、今から試合がありますので……」

「ああ、待って。私も行くわ」

「へっ？」

一言告げて分かれようとすると思月さんも立ち上がって、一緒に行くと言いだした。どうしてってああ、そうか。

「召喚大会の見物したしね」

そう言っと思月さんは僕たちに案内を促した。僕達は美月さんを会場に案内する。案内している途中、

「おい、明久」

「なに、雄二？」

雄二が僕に話しかけてきた。言い忘れていたけど雄二は秀吉と組ん

で出場しており、一回戦を無事突破している。秀吉には事情を話しており、協力するとのことだ。

「お前、あの黒斗美月と知り合いなのか？」

「うん、そうだよ」

「マジかよ……」

雄二は手で顔を押さえる。何だろう、何かあるのだろうか。アキトは美月さんに話しかけられていてそれに対応している。僕は雄二の質問にさらに答える。

「美月さんとは中学校の時から知り合いでね、とてもよくしてもらっているんだ」

「お前、ある意味凄いな……羨ましいぜ」

そんな話をしている内に会場にたどり着いた。入り口で美月さんと別れて僕たちは選手入り口に向かう。2回戦初戦も僕たちの番だ。

試合会場入り口で雄二達と分かれて、配置につく。最初の試合同様、僕は緊張していた。

「……最初と同じようにやればどうにでもなるから緊張するな」

アキトが僕が緊張していることに気付いてか、声を掛けてくれた。

アキトの方を見るとまっすぐ前を見つめている。緊張している風には全く見えない。僕は一度深呼吸して答える。

「（スーハー）うん、大丈夫。いつでも行けるよ」

「そうか、なら行くか！」

『それでは2回戦を始めます！ 選手入場』

！！！！

アキトの声と共に入場のアナウンスが掛かり、僕とアキトは試合会場に入場する。会場はより一層歓声が上がる。一回目と違い慣れたのか圧巻されることもなく試合の位置に着いた。

「2回戦最初の試合は1回戦の初戦、見事な試合を見せてくれた今大会優勝候補の一组、青コーナー、吉井明久選手とアーカーシャ・アキト選手です！ 見事な操作技術でまたもFクラスの見方を覆してくれるのか！？」

「二人に期待しながら見ましょう」

実況の人と解説の高橋先生が僕たちのPRをする。そこまで言ってくれるのは正直嬉しい。僕たち二人は立ち位置で気合いの声を掛ける。

「行くよ、アキト！」

「おうよ、明久！」

「対する赤コーナー、岩下律子選手と菊入真由美選手！ 2年にしてはいい動きで一回戦を勝利して2回戦にコマを進めました。Fクラスの最強コンビの進撃を阻止できるか！？」

「行くわよ、真由美！」

「ええ、律子！」

二人は仲がいいのか互いに名前呼び合っている。一筋縄じゃ行かないかな？僕たち四人はにらみ合う。その間実況が高橋先生と話し始める。

「今回はBクラス対Fクラスの構図になりました。どうなるでしょうね、高橋先生」

「先ほどの一戦の結果がありますからね。一概にBクラスの方が有利というわけじゃないですね」

「なるほど」

二人が話している間にこちらも試合前の舌戦を始める。本当はする必要はないんだけどね。

「さっきの試合を見たけど、所詮はFクラス。点数で負けるのが落ちよ」

「先に棄権したら？ それぐらいは許してあげるわよ？」

完全にこちらを舐めきった態度で見下してくるBクラスの二人。というよりこの人達姫路さんに瞬殺された人だったような……おそろく双月君と姫路さんの方が印象が強く、僕のことを覚えていないんだと思うなあ。アキトは苦笑を浮かべて言い放つ。

「弱い犬ほどよく叫ぶ……弱く見えるぜ？ 格上？」

「そうそう、それにそういう台詞を吐く人って大抵やられ役だよ？」

「言ったわね、Fクラスの分際で！？」

「もう謝つても許してあげないんだから！」

僕たちの挑発に簡単に乗ってくれるBクラス二人。これなら今回は楽勝かな……？　僕はそんな考えを持つが油断は禁物、改めて気を引き締める。実況はこちらの会話が良いところでしゃべり出す。

「それでは科目とバトルフィールドを決めます。ルーレットスタート！」

科目のルーレットがまわり、僕たち四人はそれに注目する。少し回ってルーレットが決まる。

「科目は……科学！　バトルフィールドは……荒地！　それでは両者召喚してください！」

「……サモン！……」

科目が決まり僕たちはそれぞれ召喚獣を召喚して、バトルフィールドに降り立つ。向こう側の召喚獣は一般的な装備、西洋型の鎧と剣だ。そして点数が表示される。

科学

岩下律子　198点　B

菊入真由美　187点　B

VS

吉井明久　113点　F

アーカーシャ・アキト　132点　F

やっぱり苦手教科の一つなだけあって点数は低い。でもこれなら負けはしない。点数差があっても操作技術でどうにかなる。僕とアキトは戦闘モードに入る。

「それでは勝負開始！」

試合開始の合図と共に向こうの召喚獣が突っ込んできた。僕とアキトは一瞬視線を合わせて互いに離れる。それを別々に追うBクラスの二人。

「おーと！　Fクラスチーム、先の戦いとは打って変わって防御の

方に回った！」

「やはり点数差があるので下手に攻撃に移れないのでしょうか。賢明な判断だと思います」

実況の人が僕たちの動きを解説して、高橋先生がそれを説明している。確かに防御に回っているけど、これには意味がちゃんとあるんだけどね。僕たち二人は尚もBクラス二人の攻撃を避け続ける。

「この、ちょこまかと……！」

「いい加減当たりなさいよ！」

二人は焦れてきたのか、さらに攻撃が雑になる。ただでさえ突撃しづらいのにこの上雑になれば僕たちにとっては全然脅威にならない。だがここはあえて追い詰められているふりをする。そうこうしている内に僕たち二人は互いに背中合わせになって追い詰められた。「やっと追い詰めたわよ……」

「覚悟しなさい！」

二人は同時に僕たちの正面から突撃してくる。丁度サンドイッチ状態になっている状態だ。互いの召喚獣があと少しになったところで僕たち二人は避ける。あと少しで避けられたため、

「えっ、ちよつと！」

「急に避けないでよ！」

互いに衝突した。二人の召喚獣は頭からいったため、目を回している。ちなみにこれ、ただ避けた訳じゃなく、空中に回避したので。ザンツ！！

岩下律子 戦死

菊入真由美 戦死

落下と同時に剣を頭に突き刺した。それにより急所に入ったため一撃死する。

わぁーーーーー！！

「なんと！回避で敵を一時的に無力化して、その隙に回避した場所からの奇襲！しかも二人とも同時に！なんと息のあったコンビネーションでしょうか！」

「これは驚くほかありませんね」
試合終了と同時に歓声が沸き上がる。実況はさっきの出来事を説明して、高橋先生はいささか興奮気味に話す。敵さん二人は愕然としており、シヨックを受けている。恐らくFクラスに二度も負けたとを考えているんだと思う。それだから勝てないんだけどねえ。僕たち二人は恐らく見ているであろう美月さんに恥ずかしくない試合をすることができて一安心しながら、歓声を受けて退場した。

第三十九話：2回戦（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみに。

第四十話：閑話 とある男の決断？（前書き）

今回は閑話を挟みます。

それでは、どうぞ。

第四十話：閑話　とある男の決断？

根本　side

「もうすぐ試合ね……」

「ああ、そうだな……」

俺は二回戦に備えて待機室で友香と共に待機していた。周りは負けたとか勝ったとか何とか言っているが俺はそんなことお構いなく考え事をしていた。

Fクラスに敗北した日、俺と友香は大きく変化した。友香は自分の趣味をオープンしたおかげで高圧的な雰囲気は抜けて、クラスメイトから信頼されるようになった。まあ、趣味が一緒の者同士、何かのサークルのようなものを作ったらしいが……。

対する俺はあの日から周りから卑怯と呼ばれるようなことを一切やっていない。どういう訳か、そういうことをやろうとすると吉井の言葉が胸に引っかかり躊躇するのだ。圧倒的な実力差を見せつけられての敗北、その後と言われた吉井の言葉。これが躊躇させているのだと俺は思う。

俺はため息を吐いて友香を見る。先ほどとは打って変わって他の試合の生中継を静かに見ている。先ほど吉井とアーカーシャの試合があり、それを見て友香は大興奮して観戦していた。声を上げてファンコンサートを見るかのような盛り上がりっぷりに、俺は焦ったものだ。まあ、そんなところもいつもと違って可愛いんだが……。

俺はらしくもない考えを頭を横に振ることで振り切る。

しっかりしろ、俺！　今は目の前の戦いに集中しろ！　次はFクラスとの対決なんだぞ！

俺はここで負けるわけにはいかない。せめて決勝まで行かないと……。

今回の大会は俺から友香に頼み込んだ大会だ。理由は至極簡単、友香に如月グランドパークプレオープンペアチケットをプレゼントし

たが為である。それに決勝まで行けば吉井と戦うことが出来る。友香にとつては最大のご褒美だろう。だからその為にも何とかして勝たないと。最悪、卑怯と罵しられても……

『小山さんのこと、悲しませるようなことだけはしないでよ』

……っ！！

俺は再度頭を横に振る。

駄目だ、駄目だ！ そんなことをして勝っていったら逆に友香が吉井に顔向けできない！

この時ばかりは俺は吉井のあの言葉に感謝した。俺はあろうことが自分の彼女を悲しませるところだった。

そうだ、卑怯なことと言わず戦略を立てて戦えばいい。それでさっきの試合も勝てたんだ。それなら何とかなる。よし、それで行こう！俺は再度これからの戦いの指針を決めて友香に話しかける。

「友香、少し話が「恭二」？」

俺が話そうとしたら友香が話を遮ってこちらに話しかけてきた。何だ？

「絶対に決勝まで行くわ。そしてマイスターと……」

意気込みを語ったが、最後に表情が崩れて幸せ顔になった。俺はため息を吐く。

「……あー、友香？ その“マイスター”ってのは何なんだ？」

「マイスターってのはね！」

俺がずつと疑問に思っていることを聞いてみると友香はめちゃくちや澀刺とした表情で迫ってきて説明しようとする。俺は驚いて思わず後ずさる。

『次の試合の方は試合入り口に来てください』

まさに説明が始めようとしたときに招集のアナウンスが掛かる。俺はこれ幸いと話を切り上げる。

「ゆ、友香！ とりあえず試合の後でな！」

「そうね！ さあ、ちゃちゃっど行くわよ！」

「あっ、おい！ そんなさっさと行くな！」

友香はちゃつちやとバトルフィールドに向かったため、俺は急いで追いかける。会場に出ると、沢山の歓声が聞こえてきた。一回目と違い人が増えているため、さらに大きく聞こえる。俺は友香に追いついて隣に立つ。そして二人一緒にバトルフィールドに向かう。

『続いて赤コーナー！ Bクラス代表根本恭二とCクラス代表小山友香！ 互いにクラス代表でその力は一回戦で遺憾なく発揮されました！ この戦いも勝つことができるか！？』

紹介と同時に俺は対戦相手と対峙する。今回の対戦相手は……

「よお、Bクラス代表。久しぶりだな？」

「さ、坂本と木下か」

Fクラス代表の坂本雄二と木下秀吉だ。俺は少し顔をしかめる。

坂本は頭が切れて、木下は操作が旨い。厄介な組み合わせにぶつかったものだ。だが、だからといって負けるつもりはないが。友香も気合い十分なのか木下を挑発する。

「この勝負、勝たせてもらうわよFクラスさん達？」

「そうはいかぬ。こちらにも引けぬ理由があるからの」

「そう、じゃあ勝負よ！」

「望む所じゃ！」

「まあ、待て秀吉」

友香と木下が互いに威嚇し合っていていざ勝負と言ったところを坂本が止めた。何だ？ 何かあるのか？

「まともに戦えばこちらの不利は否めない。だろ？」

「確かにそうじゃが……何か策でもあるのか、雄二よ」

「ああ、もちろんだ。（土屋、例の物を）」

坂本と木下が相談している最中、坂本がどこから現れたのかわからないものを受け取った。形状からして本のようなだが……。俺は警戒を強める。

「根本、これが何か分かるか？」

「うん？ ……ってそれは！」

坂本が受け取った本をちらつかせて俺に見せた。よく見るとそれは、

根本恭二写真集『生まれ変わった私を見て』

あの屈辱の女装写真集だった。Fクラスとの試召戦争に負けて敗者の烙印と同時に、強制的にさせられた女装。恐らくあの写真集にはその姿が沢山載せてあるのだろう。俺は坂本に尋ねる。

「くそつ、要求は何だ!？」

「察しの良いBクラス代表なら分かるだろう?」

「雄二……お主……」

「恭二……アレ何……」

坂本は棄権しろと言っているのだろう。この勝負、向こう側は点数で劣る分不利は否めないので、確実に勝つためにこの手段を使ったのだ。あんな写真集が出回れば、確実に変態扱いの上に友香ともお別れだ。木下は坂本から距離を取り、友香は疑惑の目で俺に尋ねる。この状況に俺は卑怯な……と噛みしめる。と同時に俺はハツとする。

この手の手段は今までの俺の常套手段なのだ。ただ、今回は俺がされている側で向こうがしている側だ。俺はされている立場になってやつと気づいた。

今まで俺がしてきたことの醜さを。

これはその報いなのだろうか。それなら報いを受けるのが当然なのだろう。俺は顔を俯かせて、歯がゆいながらも棄権を言おうとした。『小山さんのこと、悲しませるようなことだけはしないでよ』

「……（ハッ!）」

言おうとした瞬間、また吉井の言葉を思い出した。

そうだ、何をしているんだ俺は。さつき待機室で友香にプレオープンペアチケットをプレゼントするって決めたばかりじゃないか。それを簡単に曲げるのか、俺は! 最悪、俺以外の誰かに行くことになっても友香が幸せならそれで……!

俺はゆっくりと顔を上げながら、しゃべり始める。

「……ったことか」

「うん？ 何だって？」

「知ったことかって言っただよ、坂本！」

「な、お前、これが出回っても良いのか！？」

「もう一度言つてやる、知ったことか！！」

俺は坂本の要求に明確に拒絶した。それと同時に何か、分からないが何かを振り切った気がする。

「友香、頭の良いお前ならあれが何なのか大体の察しがつくと思う。だからこの後、別れてもいい。だが、この大会の間だけは協力してくれ。頼む……！」

俺は友香に嫌われる覚悟で話しかける。誰だってあんな気色悪い写真集を持つ彼氏なんて願い下げだろう。故の言葉だった。友香は少しの間俺を見て、坂本達の方を見据えた。

「……試合が終わった後で答えてあげる。今は試合に集中しましょう」

「……ああ」

友香が俺の頼みに対して答え返して、俺も返事をする。俺も坂本達の方を見据える。坂本は少し焦っていて、木下はそんな坂本を呆れ顔で見ている。

『どうやら話は付いたようです！ それでは科目とバトルフィールドを設定します！』

実況が俺たちの話の終わりを待っていたかのように喋り始める。

『科目は……日本史！ バトルフィールドは……岩場！ それでは両者召喚してください！』

「「サモン！」」

設定と同時に俺と友香が召喚獣を召喚する。俺の召喚獣は陣羽織を纏い、鎖で繋がれた鎌と分銅の武器だ。

友香の召喚獣は和服とブリーツスカートを合わせた服装にハンドガン二丁である。

「サモン！ ……雄二よ、早くせぬか」

「あ、ああ。すまん。サモン！」

向こう側も召喚獣を召喚してきた。坂本の召喚獣は特効服にメリケンサックとどこぞのヤンキースタイルだ。木下は袴に薙刀のシンブルな装備である。

両方召喚されたため、点数が表示される。

日本史

根本恭二 297点 B

小山友香 232点 C

VS

坂本雄二 167点 F

木下秀吉 298点 F

くつ、やはり今回の要注意人物は木下か！ Fクラスらしからぬ点数に周りの観客と友香が驚く。だが、総合的には俺たちの方が勝っている。うまくやれば勝てる！
俺は気を引き締めて勝負に望んだ。

第四十話：閑話　とある男の決断？（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみに。

お知らせ

突然で申し訳ありませんが、この規格外を読んでいる皆さんにお聞きしたいことがあります。

今までの『規格外』と『奇知外』、『明久様』の作品の書き方と、新しく書いている『バカ兄弟』の書き方でどちらかに固定するべきか、各々の書き方にするべきかで迷っています。

今までの書き方もありますが、それだと携帯などで見るとき文章が読みにくいのではないのでは、と私は思っています。

だからといって、いきなり変更したりすると驚かれてしまうと思いますので、皆さんの意見をお聞きしたいと思いました。

自分が『規格外』の書き方か『バカ兄弟』の書き方、どちらが読みやすいか感想欄、またはメッセージ送信などでご意見を出していただければ助かります。期間は12月25日まで。それまでにお願います。

突然のお知らせ、申し訳ありません。ご協力お願いします。

紫炎より。

第四十一話：とある男の決断？（前書き）

お知らせでは12月25日と書いてありましたが、これ以上意見が集まらないようなので早めですが結果をお伝えします。

書き方を分けて書くことにします。

意見をくださった皆様、ご協力ありがとうございます。これからもよろしく願います。

それでは、どうぞ。

第四十一話：とある男の決断？

「それでは試合スタート！」

試合の開始の合図が掛かるが、俺たちはむやみに攻めに行ったりはしない。俺はまず敵の武器とこちらの武器を比較してみた。

近接戦闘で一番リーチが長いのは木下の薙刀だ。アレは槍として使えるし、剣としても使える。さらに打撃も出来るという優れたものだ。普通の文月学園生ではそこまで器用に使えないのだが、木下は操作が旨いと学年始めのFクラス戦で知った。だから扱いは旨いだらう。坂本に関してはそんなに召喚獣を使っているとは聞いていないため、初心者に近い状態だ。つまりは俺たちと同じくらい。

対する俺の召喚獣の武器は鎖がま。使い方次第ではこの二人を圧倒できるかも知れないが、あいにくとそこまで俺は操作が旨くない。

あと……

俺は近くにある岩に向かって鎌を振りかざして切ろうとしたが、弾かれる。これで分かったことはむやみやたらに投げたら、岩場に当たって大きな隙が出来るということだ。友香の召喚獣はハンドガン、ベレッタP×4。殺傷力には優れていたはず。少なくとも木下の薙刀の攻撃範囲内には入らない。

となると……俺は少しの間考えて、戦略を決める。

「友香、俺が盾になるから木下と坂本を撃つてくれ」

「分かったわ」

戦略を決めて俺たちは前に俺、後ろに友香という形で木下と坂本に向かっていく。木下は迎撃の構えを見せており、可愛い容姿でありながら相当な気迫を見せる。坂本は木下に習う形で召喚獣を構えさせる。

俺は鎌で木下に斬り掛かる。木下はそれをいなして一撃を入れようとするが、そこを友香がハンドガンで牽制する。木下は回避するが連続で撃たれたため、二発目は躲しきれなかった。その間に坂本が

友香に近づこうとするが俺が分銅の方を投げて、坂本を牽制。避ける坂本だが、すかさず友香が坂本を撃つ。撃たれた坂本はたまらず大きく後退。木下も後退した。俺は確かな手応えを感じ、この戦略で木下達に追撃を駆ける。

明久 side

『これは先ほどのFクラスの二人の試合と打って変わって、逆に追い詰められているFクラスチーム！ やはり総合的な点数の差が仇になったか！？』

『点数さもそうですが、代表チームの戦略に乗せられているといった感じでしょうか。これでは負けてしまいますね』

僕は試合のあと店に戻り、ホールの手伝いをしながら放送で流れる試合の経過を聞いていた。聞く限り、秀吉達の旗色が悪いらしい。余談だが本来キッチン班の僕がホール班の手伝いをしているのかについては、人数不足だからだ。秀吉が危ないなあと思いつつ、根本君が卑怯戦略を使わないことに僕は嬉しく思っていた。根本君の戦略自体は僕は良いと思っているけど、そればかりはな……って苦々しく思っていた。それにあの時も言ったけど、どんな形にしろ僕を慕ってくれる人が悲しい思いをしたり、悔いが残るような思いをさせたくなかったからね。でも、秀吉達が負けるのも駄目だ。秀吉達（というより雄二）には“チケット回収”の役目がある。僕としてはどうでも良いんだけど、学園側としては回収して欲しいみたいだし、雄二としては死活問題らしい。どっちかって言うと、もう一つの副賞の腕輪の方が気になるのだが……どちらにせよ負けてはいけないのだ。

僕は頑張れと心の中で秀吉にエールを送った。

根本 side

日本史

根本恭二 162点 B

小山友香 201点 C

VS

坂本雄二 97点 F

木下秀吉 153点 F

試合は終止俺たちの優勢で進んでいた。俺が友香に対しての攻撃を一撃も通さず、木下達がダメージを負うばかりだ。俺はこのままいけば勝てると思い、なおもこの戦略をとる。それに、

「……っ！？ 弾がつ！？」

「早く装填しろ！ 押さえる！」

「分かった！」

「させぬ！」

「やらせるか！」

弾が切れても分銅を坂本に投げて、多少のダメージ覚悟で木下を押さえる。これにより、友香が安全に弾を装填できる。これにより装填による隙を埋めていた。装填したところで友香が木下と坂本を撃った。二人はまた仕方なく距離を取る。俺はさらに追撃を掛ける。

追撃を掛ける中で、俺は今までのことを考えた。

俺は今まで勝負事や試合などでは人から卑怯者と罵られるような戦い方をしてきた。その時は勝てば官軍、負け犬の遠吠えと考えていた。友香と付き合うことになってからは割と控えていたものの、戦い方は変わらず、それで良いとずっと思っていた。

だが、Fクラスとの試召戦争の時に完膚無きまでに敗北し、敗北と同時に女装などさせられて堕ちるところまで堕ちた。だから、今こここでリベンジを果たす。俺は焦る気持ちを抑えながら友香を気遣い

つつ、木下と坂本に追撃を掛ける。

だが、次の瞬間木下の召喚獣が坂本の召喚獣の後ろに回り、薙刀を振りかぶって、打った。

「ちょ、秀吉!？」

「「なっ!？」」

急な裏切り行為とも取れる木下の行動に驚く坂本と俺と友香。打たれた坂本の召喚獣は真っ正面に俺の召喚獣に突撃してきた。いきなりの理解不能な行動に俺は焦って急停止して受け止めるが、木下はその隙に俺を抜けて友香の所に行く。俺はしまったと思い、坂本を捨てて友香の方に行こうとするが、

ガシッ!

「秀吉、あとで覚えている……!」

坂本が俺を武器ごとがっしりと捕まえて、逃さないようにした。俺は点数差のパワーを頼りに坂本を引きはがすが、先に木下が友香に対して薙刀で一刀両断した。
ザン!

小山友香 戦死

ワァーーーーー!!!!!!

いきなりの逆転劇に周りの観客も大声を上げる。

「こ、これはいきなりの逆転! 木下選手の機転により一気に戦況が傾きました!」

「これはすごいですね。誰も想像だにしない方法で窮地を切り抜きました」

誰もが木下の逆転劇に興奮するが、俺は友香を戦死させたことにシヨックを受けていた。自分の大切な人を守れなかった……俺は思わず俯きかけたとき、

「恭二、何をやっているの!? 今なら坂本を戦死させれるわよ!」
隣の友香の声に俺はハッとして、すぐ側の坂本の召喚獣に鎌を突き

立てた。

坂本雄二 戦死

「な、何っ!？」

いつの間にか戦死させられていた自分の召喚獣に驚く坂本。余所見をする方が悪いのだ。まあ、今は友香のおかげだがな……。俺は心の中で友香にお礼を言いながら、最後の敵を見据える。そこには薙刀を構えた木下の召喚獣がいた。

「後は木下、お前一人だ」

「……自分の相方が倒れても衰えぬその闘志や良し。わしも全身全霊を持つてお主を沈める」
俺は点数を見る。

日本史

根本恭二 132点 B

VS

木下秀吉 142点 F

点数差では負けているが、まだ勝機はある。俺は一瞬だけ地面を見る。岩場なだけあって、地面は少しごつごつしているが砂地だ。俺は渾身の力を込めて、分銅を木下の前の地面にたたきつけた。同時に砂埃が舞う。木下の視界を奪いながら、俺は武器を構える。これならこちらから攻撃に転ずることが出来る。その後は攻めて攻めて攻めまくる。

友香が繋いでくれた勝利への道、絶対に無駄にはしない！俺は攻撃を仕掛けようとする。

だが、次の瞬間砂埃から岩が出て来た。俺は咄嗟に回避するが、回避したところに木下の召喚獣が薙刀を大きく構えていた。そして、

ザン！

根本恭二 戦死

俺は友香と同じく一刀両断されて戦死した。

ワァーーーーーー！！！！

「試合終了おーーーー！！ 試合に勝ったのはFクラスチーム！ 代表チームとの激闘を終えて、勝利を収めました！！」

歓声上がり、実況が試合結果を大声で伝えた。木下は深く深呼吸をして、歓声上がる観客に応える。坂本も同じようなものだ。俺は試合に負けたのだが奇妙の充実感に包まれていた。だが、友香が先に退場したのを見て俺は急いで友香を追いかける。

友香は会場から出て、人気のないところに着くと立ち止まった。俺も立ち止まる。友香を俺に背を向けたまま、何も喋らない。俺はそれを見ていよいよかと、別れる覚悟を決める。

「友香、その……」

「チケット、手に入らなかったわよね」

「うっ……」

俺は当初の目的を指摘されて、さらに気持ちが沈む。

「マイスターとも闘えなかった」

「……すまない」

友香にとって、一番の目的を出される。マイスターって誰かは大体は分かる。吉井明久だろう。俺はもつと気持ちが沈み、これ以上先延ばしにされても辛いので話を切り出す。

「……すまない、友香。だから「でも、それ以上に良いものを見る」ことが出来た」……えっ？」

急に友香が良いものが見られたと言った。何だ、良いものって……？

「初めて恭二が良い意味での必死な姿を見せてくれた」

「必死な姿……？ 俺は意味が分からず混乱する。」

「今まで見たことがなかったけど……」

そう言っつて、友香が振り向いて言い放つ。

「凄く頼りがいがあつて、格好良かったよ。さすがわたしの“彼氏”」

「……友香」

そこには俺が一目惚れしたときの友香の綺麗な笑顔があつた。思わず俺は友香の名前を呟きながら見惚れる。友香は笑顔のまま話す。

「女装の写真集とか、約束を破ったこととか言いたいことや聞きたいことは色々あるけど、恭二の格好いい姿を見ることが出来たから良しとするわ」

俺は笑顔で話す友香を見て、今回この大会に出場して良かったと思つた。

なぜなら、俺と友香の仲をより一層強くして、俺自身の醜さと友香の優しさに気づくことが出来たのだから。

友香は「各々のクラスに戻りましょう」と言つて、歩き始める。俺も友香に付き添う形で歩き始めた。

第四十一話：とある男の決断？（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみに。

第四十二話・閑古鳥（前書き）

もつすぐ年も終わりの終わりますね……なんか感慨深いです。

それでは、どうぞ。

第四十二話：閑古鳥

陸 side

「今帰った」

「あつ、陸君にニーナちゃん」

「おかえり」

俺とニーナは風紀委員の仕事が一段落つき、健二の手伝いを終えて2-Aクラスに帰った。そこで丁度厨房で料理を受け取っていた工藤に出くわした。客足も上々みたいだ。俺は更衣室に向かい、急いで執事服に着替えるとホールの方に出向いた。

「何の問題もないみたいだね」

「ああ、そうだな」

問題がなくてなによりだ。先ほど風紀委員室に收容された3年生の指導でいきなり抜けることになり、そこから仕事がどんどん舞い込んできたのだ。これ以上問題を起こさないで欲しい。俺とニーナは客の対応に向かった。余談だが当初、店名をメイド喫茶「ご主人様とおよび！」と意味不明の名前になりかけたため修正している。

「お帰りなさいませ、ご主人様」

「おう、客二人だ」

「かしこまりました、こちらにどうぞ」

入ってきた客が席の中央に案内されて座る。その客を見て、確かアイツらは……と風紀指導していた3年生を思い出した。なぜ解放されているのか疑問だが、今は気にしないでおう。俺は考えを切り替えて他の客の注文を聞いていると、入ってきた3年がなにやら周りによく聞こえるよう大声で話し始めた。

「やっぱりいいなあ、Aクラスはよ！」

「そうだな、さっき行った2-Fの中華喫茶は酷かったしな！」

「言い掛かりはつけてくるし、飯は不味いし！」

「あんな所に行く奴の気が知れねえな！」

明久 side

「ありがとうございます！ またのお越しを！……ふう」

「……ずいふんと客が減ったな」

「はい、どうしてでしょうか？」

「おい！ 注文は！……っていねえじゃねえか」

僕たちが店に入って仕事をしていると、どんどん客が減っていき閑古鳥状態になった。手持ち房になって良い休憩になるけど、さすがに閑古鳥状態は見過ごせない。双月君はあごに手を当てて考え込む。他のFクラスメンバーも戸惑いを隠せない。

「何でこんなに客が来ないんだ？」

「机も良いし、壁も窓も改築されて新築同然よ？」

「掃除もしましたし、飾り付けも綺麗に飾りましたし……」

「……少なくとも内的要因ではないだろう。俺たちが何かしたわけでもない」

「じゃあ何で……？」

ますます深まる謎。みんなで考え込んでいると秀吉が帰ってきた。

「ただいまなのじゃ。……って客がおらんの」

「あつ、秀吉。おかえり」

「うむ」

秀吉もこの事態に困惑している。まあ、そうだよな。接客には学園でも人気の美人と美男子（僕は含まない）が接客に応じているし、粗相をしたこともない。序盤にあった営業妨害以外は何か問題が起こったとかもないし……。うーん、何だろう。僕が悩んでいると双月君が秀吉に話しかける。

「秀吉、何かFクラスに関して噂とか聞いていないか？」

「噂？……すまぬ、聞いておらぬ」

「そうか……」

噂とかじゃないとなると何だろう……？　僕たちがさらに悩んでいると雄二が帰ってきた。

「お兄さん、すみませんです」

「いや、気にするな、ちびっ子」

「ちびっ子じゃなくて、葉月です！」

「んで、探しているのはどんな奴だ？」

何やら幼い声と共に。……雄二、幼女誘拐は犯罪だよ？　僕は一瞬そう思ったが、さすがにそこは弁えているだろうと警察に電話するのは遠慮した。他のFクラスメンバーも暇なのか、2人を囲む。

「お、坂本の妹か？」

「可愛い子だね。ねえ、5年後にお兄さんと付き合わない？」

「俺はむしろ、今だから付き合いたいなあ」

各々の興味を示しているが、一名ほど警察に電話すべき奴がいたが気にしないことにした。

「あ、あの、葉月は2人のお兄ちゃんと1人のお姉ちゃんを探しているんです」

「お兄ちゃん？　名前は何て言うんだ？」

「あう……分らないです……」

「家族の兄じゃないのか？　それなら、何か特徴は？」

雄二は割と面倒見が良い方と言われているが、どうやら本当だったらしい。それならその面倒見の良さを僕にも向けたらどうだと思う。僕たちも話に参加したいが、Fクラスメンバーに囲まれているため近づけない。

「えっと……美人なお姉ちゃんとちょっとおバカなお兄ちゃんと怪力お兄ちゃんでした。3人ともとても仲良かったです」

「そうか……ちょっとおバカなお兄ちゃんはいないし美人なお姉ちゃんも何人かいるが、怪力お兄ちゃんならいるぞ」

「「「アーカーシャだな」」」

「何だ？　俺を呼んだか？」

アキトが呼ばれたのと同時にFクラスメンバーは一気に道を譲った。君たちはどれだけアキトのことを恐れているのだろうか？ アキトが行くのと同時に僕と双月君も一緒に行く。そこには小学生ぐらいの元気そうな少女がいた。

「あつ！ おバカなお兄ちゃんと美人なお姉ちゃんと怪力お兄ちゃんだ！」

僕たちを見るのと同時に満面の笑顔で駆け寄ってくる少女。僕は向かってくる少女を受け止める。受け止められたのと同時に少女は僕の腹に顔を埋めた。

「ふむ……明久、モテないからってついに」

「そんな想像する雄二の方が危ないと思うよ？」

「こいつは確か……誰だったけか？」

「あの時、ぬいぐるみが買えなくて困っていた少女だろ？」

「ああ！ あの時のぬいぐるみの子か！」

「ぬいぐるみの子じゃないです！ 葉月です！ せつかくのフィアンセとの再会なのに、失礼です！」

この瞬間、僕は殺気を感じて葉月ちゃんを抱きかかえて逃げようとする。

「瑞希！」

「美波ちゃん！」

「殺るわよ！」

「すんなボケエ！」

「きゃあー！！！」

が、その前に攻撃力669のハリセンでアキトがノックダウンした。本来なら責められるところだが、今回に限ってこの行いも許されるだろうと僕は思う。あれでも超手加減しているのだし。頭を押さえる島田さんを見て、葉月ちゃんが声を掛ける。

「あつ、お姉ちゃん！ 遊びに来たよ！」

「痛い……って、葉月！ えっ、何？ 葉月ってアキ達と知り合いな？」

「去年ちよつとしたことだな。それよりお姉ちゃんって?」

「ウチの事よ?」

僕はそれを聞いて、驚く。アキトも心底驚いているみたいだ。だって、こんな純真な子が島田さんの妹って……

「全然性格が似てねえ……!」

「ちよつと! どういう事よ!」

アキトが漏らした本音が島田さんに聞こえて島田さんが突っかかる。島田さん、そう言われても仕方ないような気がするよ、普段の行いを見ていると。

「葉月ちゃん? 俺は美人な“お姉ちゃん”ではなく“お兄ちゃん”だからな?」

「えっ! そうなんですか! 葉月、驚きです!」

すぐ側では双月君が葉月ちゃんに自分の誤った認識を訂正させていた。確かに初対面で双月君を男と見抜くのは至難の業だからね。特に小学生には。

「吉井君はずるいです……」どうして美波ちゃんとは家族ぐるみの付き合いなんですか? 私はまだ、両親にも会ってもらってないのに……もしかして、実はもう“お義兄ちゃん”になっちゃってたり……」

「姫路よ、落ち着くのじゃ」

姫路さん? 家族ぐるみも何も僕は島田さんの家族構成自体知らないからね? 大体、島田さんのこと友達程度でしか思っていないし。僕はどうすれば良いんだろうか? と、そこで今まで黙っていた雄二が口を開く。

「ところで、この客の少なさはどういう事だ?」

雄二は閑古鳥状態のFクラスの教室を見渡して僕たちに尋ねる。僕はそうだと思い、雄二に事情を説明する。それを聞いて雄二も顔を曇らせる。どうやら心当たりがないらしい。

「葉月ちゃん、ここに来るまでに何か嫌なことを聞かなかったか?」
「嫌なこと……ですか?」

双月君が葉月ちゃんに尋ねる。少し考え込む葉月ちゃんだったが、すぐに思い出したかのように話し始める。

「あつ、そうです！ 中華喫茶は店員の人の対応が酷いって聞きました！」

他にも食べ物是不味いし、教室は汚いつて聞いたと言ってくれた。そんなことは……と思い、教室を見渡す。飲食店なので衛生面は万事ぬかりなく大丈夫だし、壁や窓の問題も解決、みかん箱やござに關しては双月君の実家から取り寄せた卓袱台と座布団でカバーしている。だから大丈夫なはず。なのにどうして……？ ぼくが考えていると雄二が喋る出す。

「連行されていった3年がいるだろう？ 恐らくそいつらだな」

「風紀委員に引き渡したハズなんだがな……どこかの教師に開放でもされたか？」

「さつきの3年？ さすがにそこまで暇じゃないでしょ？」

「くだらねえ真似しやがって……潰してやる」

雄二の推論に双月君が補足する。さすがにそこまで暇じゃないはずと僕が言うが、アキトは双月君と雄二の推論を信じて、潰す気満々で手を鳴らしている。公衆の面前でやらないようにしないと……

「というわけで、敵情視察も兼ねて昼飯でも食いに行くか」

「葉月ちゃんも一緒に行かない？ 僕が奢るから」

「わーい、ありがとうございます！」

雄二の提案に乗っかって僕たちも昼食兼敵情視察に回ることに。葉月ちゃんを誘うと嬉しそうに返事してくれた。他にも秀吉と姫路さん、島田さんも一緒に行くことに。双月君は生憎、店をこれ以上の人数が店を離れるわけにはいかなないので残るらしい。敵情視察をするために噂の出所を確認することに。

「それで葉月ちゃん、中華喫茶の話はどの辺で聞いた？」

「えつとですね……短いスカートをはいた、綺麗なお姉さんがいっぱい居るお店で……」

「何だつて！？ 明久、アキト！ すぐに向かうぞ！」

「……」

葉月ちゃんの話聞いて全力ダッシュで駆けていく雄二。……一瞬康太が見えたのは僕の幻覚だろう。僕とアキトは呆れた目でそれを見送ると葉月ちゃんに道案内を頼み、目的の場所に向かうことにした。

第四十二話・閑古鳥（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみに。

第四十三話：風紀委員長（前書き）

実はとつくに10万PV超えていたという事実。とても嬉しいです。

それでは、どうぞ。

第四十三話：風紀委員長

「行つてらっしゃいませ、ご主人様……ハア」

私にしては珍しくため息をついていた。何故かというと先ほど出て行つた客がとても迷惑だったからだ。周りの客にお構いなく大声で喋り、女子のメイド服を変な目でジロジロと見てくる。店の性質上ある程度は覚悟しているけど、他の客に比べて露骨に見てくるので気持ち悪い。

「どうしたの、ニーナ？」

「優子……」

珍しく私が悩んでいるのを見て声を掛けてくれたのは優子。女友達では初めての友達である。普段人の悩みの相談を受けている私だが、私自身の女の悩みは優子によく話している。私は仕事中だが話すことにした。

「さっきの客のこと……」

「ああ、さっきの3年ね」

優子も迷惑そうにため息を吐く。優子も迷惑しているようだ。

「気にするなつて方が無理よねえ……。陸が来て注意するけど」

「どうにか出来ないかな？」

私は優子に相談する。優子も考えるがいい案が浮かばないのか頭をひねるばかりだ。どうすればいいだろうか……

「……優子達も？」

「……そこまで被害がいつていたか」

「代表に陸」

私が思い悩んでいると霧島さんと陸が互いに難しい顔をしながらこっちに来た。2人もどうやら先ほどの客に頭を悩まされているらしい。

「陸、どうすれば……」

「任せろ、もう再三注意をしたんだ。もういいだろう」

私が陸に相談すると陸は頼もしい返事と共に、無線マイクのようなもので誰かと連絡を取り合い始めたのであった。

葉月ちゃんの案内で噂の元に辿り着いた僕たちだけど……そこでは雄二が店の看板を見て硬直していた。何かと思い店を見てみると、

2-A メイド喫茶「ご主人様」 会いたかったです」

という店名があった。

その瞬間僕たちは理解した。ここには霧島さんがいる……と

「……明久、ここはやめよう」

雄二が諦めたかのように回れ右をして立ち去ろうとするが、敵情視察できたので絶対に逃さない。アキトががっしりと雄二の首根っこを掴んだ。

「頼む！ ここだけは！ Aクラスだけは勘弁してくれ！！」

「ここまで来て何言ってやがる！ さつさと入るぞ！」

アキトががっしりと掴んでいるため逃げることの出来ない雄二を店の入り口まで連行する。えっ？ 表現が可笑的い？ 全然可笑しくないよ？

「こんな店名でよく陸が通したの」

「陸君もそれぐらいの許容はあると思うよ？」

「つーか霧島怖さに逃げ回るんじゃないやねえよ！ このヘタレ！」

「坂本君、女の子から逃げ回るなんて駄目ですよ？」

各々が反応する中、僕はFクラスの厨房にいるはずの康太を発見した。やはり先ほど雄二と行っていたのは幻覚ではなかったようだ。

僕は一言注意することにする。

「康太、何やってるの？」

「……敵情視察」

「駄目じゃないか。盗撮とか、そんなことしたら取られる女の子が可哀相」

「……1枚100円」

「いらないから……可哀相だと思わないのかい？」

僕が注意しているといきなり取引を持ちかけてきたが、即座に断り注意を続ける。康太も聞き入れたのか、撮り終えたのかFクラスに戻っていった。僕たちもそろそろメイド喫茶に入る。

「それじゃ、お邪魔しまーす」

「……お帰りなさいませ、お嬢様」

島田さんを一番手にメイド喫茶に入った僕たちを迎えたのは、Aクラス代表霧島翔子さんだ。いつ見ても美人で、メイド服もよく似合っている。

「それじゃ、僕も」

「ふむっ、さすがはAクラス。雰囲気から違うのう」

「はい、失礼します」

「わぁ、お姉さん綺麗です！」

続いて僕、秀吉、姫路さん、葉月ちゃんと順番に入っていく。

「……お帰りなさいませ、ご主人様とお嬢様」

入ってきた僕たちに対して、霧島さんは模範的な礼儀を持って出迎える。

「おらぁ、とつと入れ！」

「分かったから押すな！」

雄二もアキトに背中から押されながら渋々入った。霧島さんは雄二を見つけると雄二に向かっていき、出迎えの挨拶をした。

「……お帰りなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

かなり変わった出迎えの挨拶だが、問題はないだろう。僕は改めて周りを見ると、またメイドがこっちに1人やってきた。

「お帰りなさいませ、ご主人様」

そこにはメイド姿のニーナがいた。笑顔の出迎えで僕としてはとても目福で、嬉しい。

「お帰りなさいませ、旦那様　な～んて」

「えっ？　って、何だ、工藤さんか。冗談が過ぎるよ？」

「あはは、ごめんね？　でも、来てくれて嬉しいよ」

「私も嬉しいよ？　明久、アキト」

「そう？　ありがとう」

いきなり冗談交じりに工藤さんが現れて、僕はそれを諷める。でも、嬉しいって言われると嫌な気分はしないね。

「霧島さんに工藤さん、アルレイヤさんも大胆です……」

「ウチも見習わないとね……」

「あのお姉さん、夜の間ずっと遊ぶのかな？」

「葉月ちゃんはまだ知らなくても良いことなのじゃ」

「見習うって、何をだよ……」

「そうだな、というわけでお邪魔しました！」

と雄二は逃げようとするが、あえなくアキトに首根っこをまた捕まれて逃走を失敗していた。

「では、お席にご案内します」

ニーナがそう言くと、工藤さんと霧島さんは散ってニーナが席に案内してくれた。案内された席に僕たちは座る。

「こちらがメニユーです。注文が決まりましたら、そのボタンを押してください。それではごゆるりと……」

そう言くとニーナは他の注文を取りに行った。僕たちはそれぞれメニユーを見ながら、注文品を考える。全員決まったところでボタンを押して、メイドが来るのを待つ。少ししたら霧島さんがやってきた。

「……ご注文をどうぞ」

「えっと、ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「私もそれで」

「葉月もー！」

女性陣は女性らしいメニューを注文する。次は男子なので、注文品を言う。

「僕はフレンチトーストで」

「わしも明久と同じで良いのじゃ」

「俺はブラックコーヒー」

「えっ、それだけで良いの？」

「糞親父がさつき弁当を押しつけやがったんだよ」

「そうなんだ」

僕達男性陣が次々と注文していくのを、霧島さんは注文紙で書き留める。そして雄二の番。

「で、俺は……」

「……ご注文を繰り返します」

だったのだが、霧島さんが雄二の注文を遮る。雄二は俺はまだ注文をいってねえとばかりに不思議げな顔をする。

「……“ふわふわシフォンケーキ”を3つ、“フレンチトースト”

を2つ、“ブラックコーヒー”を1つ、“メイドとの婚姻届”を1

つ、以上でよろしいですか？」

「全然よろしくねえぞ!？」

「おう、いいぞ」

「おい、アキト!！」

「……では、食器をご用意します」

そうしてすぐさま食器が用意されたが、雄二の所にだけ実印と朱肉、

“本物”の婚姻届がおかれた。幸せ者だね、雄二。

「しょ、翔子!？ これは本当にウチの実印だぞ! どうやって手に入れたんだ!？」

「……では、メイドとの新婚生活を想像しながら、お待ちください」
そう言つて雄二の疑問を華麗にスルーして、霧島さんはキッチンの方に歩いていった。さすがに僕も哀れに思う。

「明久あ、どうやら俺はどうしても優勝しないといけないんだ……」

！」

「うん、頑張つて……」

僕は一年に一度しかないのであろう雄二に対する仏心を出して、励ました。少しして、僕たちは本題にはいることにする。

「さて、そろそろ本題に入ろうか。葉月ちゃん、このあたりで聞いたんだよね？」

「うん。ここで嫌な感じのお兄さん2人がおつきな声でお話していたの！」

嫌な感じの2人組か……見る限りいないみたいだけど。辺りを見渡していると、客が新しく入ってきたようだ。

「お帰りなさいませ、ご主人様」

「おう。2人だ。中央付近の席は空いているか？」

「あつ、あの人達だよ！ さつき大きな声で『中華喫茶は汚い』って言つてたの」

葉月ちゃんの言葉を受けて、その2人をよく見てみると先ほどこちらで営業妨害してきた3年だった。あいつらまだ……！ 奴らは席に座ると周りに聞こえるぐらいの声で話し始めた。

「やっぱいいなあ、この喫茶店は！」

「そうだな。さつき行つた2・Fの中華喫茶は酷かつたからな！」

「接客は最悪だし、飯に虫が入つてたしな！」

僕は余りにも露骨に悪評を言い始めるのを見て、僕は一発殴つてやるつかと席を立つ。

「待て、明久。落ち着け」

だが雄二に止められる。いきなり止められて僕は雄二に突っかかる。

「雄二、どうして止めるのさ！？ あの連中を早く何とかしないと！」

「落ち着け、こんなところで騒ぎを起こせば悪評はさらに広まるだけだ」

「クッ！」

僕は考えてみれば分かる現実に歯を噛みしめる。すぐ側にいながら

何も出来ないとは……！ 僕たちの話が聞こえたのかニーナがこっちに近づいてくる。

「どうしたの？」

「ニーナ、ちょっとあいつらを……」

「ああ、あの2人……。正直、こっちも迷惑しているの。陸が何とかするって言っただけど……」

「それまで待てないな。そうだな……アルレイヤ。メイド服のスペアはあるか？」

「あるけど……どうするの？」

雄二が何か思いついたかのようにニーナにメイド服を要請するけど……まさか……

「雄二よ、メイド服などどうするのじゃ？」

「もちろん着る。……明久がな？」

「近寄るな変態！」

「明久に近づくんじゃねえ！ 変態ゴリラ！」

「明久に近寄らないで！ 変態！」

「やっぱりか！？ 試召戦争の時から薄々思っていたけど雄二には女装を強要する変態だったのか！ 僕は雄二から一気に離れてアキトとニーナは僕を庇う。」

「ちげえーよ！？ なんで変態なんて呼ばれないといけないんだ！？」

「女装を強要しようとした時点で変態だろうが！」

「そんな奴が明久に近寄らないで！」

「だからちがうっつーの！ これを着るのは変装って意味でな……！！」

雄二が必死にこちらに説得しようとするが僕は信じる事ができない。なにせ、前例があるので。僕たちが騒いでいると向こうの3年の方にも動きが起こった。

「お客様、何度もおっしゃっていますが、大声で話されると他のお客様にもご迷惑が掛かります。やめて貰えませんか？」

「ああん？ いいだろう、別に」

「そうだって、他の奴らに俺達は行ったら危ないって知らせているだけだぜ？」

「いえ、ありもしないことをでっち上げるのは大変不愉快ですし、聞いていても良い気分がしませんので」

「んだとコラア！？」

そっちの方を見ると陸君が3年に注意しているところだった。陸君の注意がうるさいと思ったのか、陸君に怒鳴りながら詰め寄る。他の客は急な出来事で息をのんで見守る。僕はやばいと思ってニーナと一緒に近づこうとするが、アキトに止められる。どうして！？

「黙って見てろ。アイツが何の策もなしにあんな事はしねえ」

と真剣な目で僕たちを止める。僕とニーナもアキトの言葉を信じて見守ることにする。

「てめえ、舐めてんじゃねえぞ？ アアン！？」

「……清涼祭事項、第十二条『清涼祭の際、クラスの出し物に対する妨害行為、および風評妨害を禁ず』。貴様らは再三の注意を聞き入れず、さらに店員に対する恐喝行為を行った。故に風紀委員長として実力行使を執行する！」

ザッ！！

陸君の宣言と共に周りの客の数名が立ち上がり、3年を取り囲む。突然のことで3年は困惑するが、陸君はお構いなく言葉を続ける。

「3年生、常村勇作、夏川俊平。貴様らは召喚大会出場者のため、以後選手待機室で監禁する。連れて行け！」

『はい、委員長！』

「なっ、てめえ！ 放せ！」

「くそっ、覚えているテメエ！」

「それと罰として3 - Aクラスの出し物は今日限りだ」

「分かりました」

あっという間に風紀委員に連れて行かれ、相応の罰が言い渡された。僕たちはその光景を眺めているだけだった。陸君が他の客に振り向

き至極丁寧に謝罪をする。

「お騒がせして申し訳ありませんでした。今いるお客様は値段を半額とさせていただきます。なお、先ほどの2・Fクラスの噂は全て根も葉もない嘘なので、2・Aクラス、Fクラス共々これからもよろしく願います」

そう言つて陸君は去つていった。他の客も陸君の言葉を聞いて中華喫茶に行こうかなつと言つてくれた。陸君の発言にはとても影響力があるので、少ししたらまたお客さんがFクラスに来るだろうと思つた。何にせよ、これで風評被害は何とかなりそうだと僕は思い、いつの間にか来ていたフレンチトーストをみんなと一緒に食べ始めた。

第四十三話：風紀委員長（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみに。

第四十四話・三回戦、そして事態は急変（前書き）

あけましておめでとついでいます！ 今年もよろしくお願いします。

それでは、どつぞ。

第四十四話：三回戦、そして事態は急変

アキト side

「アキト、ちよつとトイレ行ってくるね」

「ああ、試合までには戻ってこいよ」

「あはは、そこまで長くはならないよ」

メイド喫茶で昼食を済ませた俺達はFクラスの教室に戻っていた。明久も厨房に立ち、キッチン班もフル稼働して料理を作っていく中、明久がトイレに行くため厨房を抜ける。俺はそれを見届けると、料理を再開する。陸のおかげで客も徐々に戻り始めて忙しくなった。俺は改めてアイツの影響力に舌を巻く。しばらくすると放送が掛かる。

『三回戦を行います。選手の皆さんは選手待機場に来てください。繰り返します、三回戦を行います。選手の皆さんは……』

俺は招集の放送を受けて、厨房を一時抜ける。明久がこの場にいなのが少し不安だが、アイツも選手待機室に向かっているだろうと思ひ、俺もそこに向かった。向かう途中、

「よつ、アキト。今から試合か？」

「健二か……。まあ、そうだ」

後ろから健二に声を掛けられてそれに返事を返した。こいつ、体育館に缶詰じゃなかったのか？俺はその疑問をぶつける。

「お前、今日は体育館に缶詰じゃなかったのか？」

「いや、粗方の説明が終わったからちよつと抜け出てきたんだよ」

「おいおい……」

「大丈夫だつて！明久直属のソルとルナがいるから説明と警備は万全だぜ」

自信满满みたいなので大丈夫だろう。健二は辺りを見渡した後、俺に質問する。

「おい、明久は？」

「ああ、トイレに行っている。まあ、待機場で合流すると思うぜ？」
「にしては全く見当たらないってどうかと思うぞ？」

「そうか？」

警備も万全の上に、情報漏れもない。裏道も全部封鎖。不審者は侵入不可能とも言える万全な体勢で誘拐なんて起こるハズもないし、“奴ら”も全く動きを見せない。俺は明久が遅れているだけか、人間関係でのトラブルに襲われているだけだと思う。だから大丈夫だろう。だが、健二は不安をぬぐえないのか、俺に相談する。

「やっぱ俺、明久のこと探してくるわ。試合には間に合わせるぜ」
「そうか？　じゃあ、頼む」

俺は明久のことを健二に任せて試合会場に向かう。少し歩くと試合会場にたどり着く。受付を済ませて、最初の初戦なので選手入り口にて待機する。俺は一回深呼吸をして、明久を待つ。だが、明久が来ることもなく、

『それでは三回戦を始めます！　選手入場』

！！！！

試合が始まった。俺はさすがに不安になるが、仕方がなく前に進む。会場はいつも通り大賑わいで、観客が大きく歓声を上げていた。

『まずは赤コーナー、Fクラスの中でも優勝候補と噂されているアーカーシャ・アキト選手と吉井明久選手！！　っておおっと！　よく見たら吉井選手がいません！！　これは今回遅刻かぁー！！？』

俺は定位置に着き、試合開始を待つ。いつもならここで明久と気合を入れるのだが、肝心の明久がいないので気合いの入れようがない。それに、会場に入場したときから胸騒ぎがする。健二は結構大雑把なところはあるが、人捜しに関しては野生の勘とも言えるのか、すぐに見つけ出す。その健二が間に合わせると言っ、間に合わせることができないだ……？　ありえねえ……明久のことならなおさらだ。

『対する青コーナーは3年Aクラスの夏川俊平選手と常村勇作選手だ！　ええ、この選手に関してのコメントは風紀委員長と生徒会

長からの指示により、ノーコメントとさせていただきます』

「おい、どうゆうことだ!」

「なんで俺達の扱いが杜撰なんだよ!？」

出て来た相手は先ほど風紀委員に連行された夏川と常村……面倒くさいから坂本の案をとって、常夏コンビにするか。とにかくそいつらだった。俺は一気にテンションが下がって、思わずため息をついた。

「おい、後輩のくせに先輩にため息つくなんて上等じゃねえか」

「目上に対する態度つてもんがあるんじゃないのか、アアン?」

「……うるせーよ、三下。やられ役みたいな台詞はいてんじゃないよ」

「なんだと、テメエ!？」

なんだコイツら……今までで一番疲れる相手だな。俺はさっさと終わらせることにする。

『それではフィールドと科目を設定します。フィールドは……橋！

科目は……英語！ それでは召喚どうぞ!』

「すぐに終わらせてやるぜ、サモン!」

「礼儀つてもんを教えてやる、サモン!」

「……（ハア）サモン」

常夏が先に召喚した後、俺が遅れて召喚する。その間にフィールドが設定されて、横幅が広い橋が現れた。召喚獣もその橋の上に召喚される。

英語

夏川俊平 412点 A

常村勇作 402点 A

思っていたよりも高い点数に少しだけ感心した。さすがはAクラスなだけはある、それなりの点数は取れているか。なんて思っているのもつかの間、

ここで俺の立ち位置と状況を再度教えてやろう。

俺は橋の縁にいて、後ろは何もない。そして、常夏が考えもなしに突進。俺は悠々とそれを避けた。

つまり俺が言いたいのは……

「えっ！？ 待て、そっちは！？」

「なっ、おい！？」

奈落の底に真っ逆さまって事だ。常夏の召喚獣は物理の法則に従って、奈落の底に落ちていった。

ヒュウウー………バキィ×2。

常村勇作 戦死

夏川俊平 戦死

………

派手な戦いを期待していた観客だったが、あまりのあっけなさに一
同時停止。俺は明久のことがいない上、なんか相手にするのも億
劫な相手だったため、この方法をとった。

『……え、赤コーナー、アーカーシャ・アキト選手の勝ちです。

何と言えいいのでしょうか、この試合は』

『期待はずれとだけ言っておきましょう』

高橋先生が締めて俺はゆっくりと去っていった。常夏は卑怯だの何
だのと騒いでいるが関係あるか。

試合会場を去りFクラスに戻ろうとしたが、そこで携帯が掛かる。

俺はそれを取り、発信者を見て少し驚く。発信者は陸だったからだ。
俺は電話に出る。

「おい、どうしたんだよ陸」

『アキトか！？ 今すぐ一階の空き教室に来い！ 大変なことにな
った！』

「何だ、何があった」

陸にしては珍しく慌てた声に早歩きなりながら言われた場所に向かう。だが次の瞬間、俺の頭は真っ白になる。

『明久が攫われた!』

……何だと？

第四十四話・三回戦、そして事態は急変（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみに。

第四十五話：敵（前書き）

規格外の敵がその全貌を現します。

それでは、どうぞ。

第四十五話：敵

「どういう事だ！？ 明久が攫われただと！？」

俺は陸に指示された教室に入るなり怒鳴るように声を張り上げる。

教室では健二がパソコンを弄っており、双月と陸、ニーナが話し合っていた。

あの後俺は真っ白になってしまった頭を一発殴ることで正気に戻し、教室へと向かった。途中、変なチンピラが女子を強引に連れ出そうとしていたので一ヶ月は再起不能の怪我をさせてイライラを押さえつつ、教室にたどり着いた。

陸はこちらに気づいたのか、こっちに近寄ってきて事情を説明し始める。

「言ったとおりだ。明久が誘拐された、分かっているのはそれだけだ」

「どうして誘拐されたって分かるんだよ！」

「健二！」

「おう！」

陸に返事に健二が答えるとある映像を出す。出て来た映像は裏口から明久が数人の男に連れ出される映像だった。俺は拳を握りしめて叫ぶ。

「どうして裏口の警備がないんだよ！？ ここにはそれなりの数を配備していたはずだろう！？」

「それに関してだが、聞いてみたところ丁度交代の時間帯に交代に来るはずの警備員に化けたらしい。それで本来警備ついていた人間も外されたそうだ」

「くそっ……！」

警備体制が甘かったと双月が舌を打つ。俺もやりきれなくさらに拳を握りしめる。

「悔やんでいる暇があるなら探すぐらいの気概を見せたらどうだい

？」

「ババア……」

そこに何かの資料を持ってババアが現れた。こいつ、何のようだ？俺は睨めつける。

「デメエーに言われなくてもわかつている」

「だったらその拳を引つ込めな。犯人に対してぶつけるんだよ」

俺がババアから叱咤を受けるとは……。見れば他の奴らもすでに頭を切り換えているのか、各々の仕事をしている。俺は両手で顔をはたいて気合いを入れる。

「ほら、アンタの言われたとおりの資料だよ。受け取りな」

「ありがとうございます。……なるほど、そう言うことが」

「なんだよ、何が分かったんだよ？」

「今回の共犯者だ」

「誰だ！？」

ババアから受け取った資料を目に通した陸が、今回の共犯者を割り出したようだ。俺はソイツをぶつ潰すため、ソイツが誰かを聞く。だが陸は資料を懐に入れ、俺に話しかける。

「アキト、お前が暴れるのは主犯者に対してだ。そいつに、じゃない」

「でもよ！」

「そいつは俺がやる」

陸がそう言うので俺は素直に引き下がることにする。先ほど言い放った陸の目、あれはマジだ。ああなったら健二か明久でないと止まらない。だが、自業自得だ。

「それとこんなまで置いてあったよ」

「何々、『吉井明久は預かった。指定の場所に月宮健二の発明品を持ってこい。AWTSOO』」

「奴らか！」

「懲りない……！」

俺とニーナが憤る。思った通りの連中だったが、同時にしつこいと

思った。

「コイツらと知った仲かい？」

「知っているも何も、何回もお世話になった連中だ。毎度しつこい……！」

AWT S O。正式名称、全世界科学技術共有主張組織。

「全世界の科学技術は全世界で共有するべきだ」と主張する組織だ。聞こえは良いがその実態は、自分たちの所に全科学技術を集約させる危険な組織。目的のためなら誘拐、拉致、脅迫といった犯罪行為も辞さない。

奴らは幾度となく健二の発明と科学技術、頭脳を狙って、俺達の親友、明久を幾度となく誘拐して服従を要求しようとするが、黒斗グループの警備、俺達五人に全てふさがれている。だが、まさか今日に限って成功するとは思わなかった。

「指定の場所ってどこだ」

「……地図がついているが、詳しい場所までは「よし出たぜ！ 明久の場所！」本当か！？」

陸がどうすればという顔をしていたが、その直後健二が場所を割り出した。俺達はすぐに健二の所に集まる。

「……近くの廃工場だな。ここの内部は分かるか？」

「お任せあれ！」

そう言って健二はすぐさま内部地図をスクリーンに立体的に表示する。なにげに広いし、物も少ない。奇襲には向かない場所だ。

「……よし、作戦は決まった。アクト、『蛇亀組』とパイプを持っていたな。そいつらに連絡を取って俺達が騒ぎを起こしたのと同時に周囲を囲むように指示をしてくれ」

「よし、来た」

俺は指示された通り、奴らに電話を掛けた。ちよつと待ったらすぐに電話に出てくる。

『へい、アクトの兄貴！ どうしやしたか！』

「お前達の力を借りたい。今から事情とお前達の行動を話す。一発

で覚える、いいか！」

『わかりやした！ どうぞ！』

「健二、お前は『幻想獣ボックス プロトタイプ』を持って取引に応じる。双月、美月さんに連絡してもしもの時の根回しを頼め。二人、お前は……」

俺が野郎共に指示している間に、陸は次々と他の奴らに指示を出す。俺は説明を終えて電話を切る。いざ救出にと全員動き出したとき、ボタン！

「明久が攫われたって本当か！？」

教室に坂本と島田、姫路に秀吉、土屋が現れた。全員心配そうな顔をしている。弱ったな、コイツらのことだから救出に手伝うって言出すぞ。秀吉なら事情を知っているから引き下がるだろうが、他の奴らは事情を知らないから余計に、だ。どうするかと思ったが、陸がコイツらの対応に出る。

「そうだ、攫われた」

「どこのどいつだ！？ 殴り飛ばしてやる！」

「アキは！？ アキは無事なの！？」

「明久君は大丈夫なんですか！？」

「……心配！」

「陸よ、どうなのじゃ！？」

「落ち着け、恐らく明久は無事だ。犯人にとっても明久は重要人物だからな」

「なら……！」

「だが、救出は俺達だけでやる。お前達は騒ぎが広まらないようにしてくれ」

明久の安否を聞いてくるが陸は大丈夫だと言って聞かせる。坂本が手伝うと言おうとしたが、陸はその前にコイツらに指示を出す。向こうはどうしてとばかりに食ってかかる。

「どうしてだ！？」

「そこいらのチンピラや不良とは訳が違う。言ってもお前達では足

手まといだ」

「……“奴ら”かの？」

「そうだ」

「……なら、仕方ないの」

そう言つて秀吉は下がるが、他は納得がいかず尚も食い下がる。

「何だよ、“奴ら”って」

「お前達は知らなくても良いことだ」

「何だと……！」

「……なら一つだけ特徴を教えてやる。“奴ら”は人殺しだ」

「……ッ！？」

そう言つた瞬間、奴らは押し黙つた。さすがに人殺しまでする奴らに攫われたとは思つてもいなかったようだ。陸は話は終わりだとかかりに動き始め、それに習つて他の奴らも教室を出て各々動きを始める。が、

「……待てよ」

「何だ？ 忙しいんだ俺達は」

「人殺しだろうが関係ねえ……。そんな危ない奴らに攫われたならなおさらだ。見過ごす事なんて出来ねえよ！」

「そうよ！」

「そうです！」

「……（コクッ！）」

覚悟したかのような表情を浮かべて言い放つ坂本達。秀吉は健二の頼みで幻想獣ボックスを取りに行っている。陸はスツと目を細めると、

ジャキン！

「……ッ！？」

懷から銃を取り出し、坂本達に向けた。思わず下がってしまい、恐怖がにじみ出る。陸はすぐに銃を坂本達から外し、懷に戻す。

「……さっきのは生徒から押収したモデルガンだ。それだけでビビるなら足手纏いだ」

「……くそっ！」

陸に言われて毒づく坂本。陸は俺を連れて教室を出ようとするが、坂本達に振り向いて一言という。

「……助けに行きたい気持ちも友達を心配する気持ちも分かる。だが、気持ちだけではどうにも出来ないときがあるんだ。その時は自分が何が出来るのかを考えて動け」

後はよろしくお願いしますと陸はババアに言っつて、教室を出る。俺も出ようとするが、ふと気になって坂本に聞く。

「坂本、お前は明久の幸せが大嫌いなんじゃないか？」

「……そうだ、明久の幸せは嫌いだ。だがよ」

こちらを向くことなく坂本は一言。

「あいつを不幸にするのは、俺だけだ」

「……そうかよ」

「……俺らの分まで犯人をとっちめて来いよ、アキト」

「当たり前だろ」

そう言っつて俺は教室を出て、陸の後を追いかけた。

第四十五話：敵（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみに。

第四十六話：AWSTOO（前書き）

今回の誘拐騒動は長くなりそうなので、何回かに分けることにしました。

それでは、どうぞ。

第四十六話：AWSTOO

「向こうは要求通りに動きますかね？」

「さあね……それは向こうと神のみが知ることさ」

目の前の男が私に話しかけるが、私ははぐらかすように答える。手に持ったチェスのナイトをゆっくりと指で回しながら、私は思考する。

今まで日本にいるAWSTOOはどうやっても、規格外と呼ばれる彼ら五人を出し抜くことはできなかった。私がここに配属になったときは驚いたものだ。見事に戦略を戦術で押しつぶされたり、逆に嵌められたりしているのだ。今回の仕事は今までの中で一番大変だろう。

「まさか、あの五人や黒斗グループを出し抜くことが出来るとは思いませんでした。あなたがここに来てくれたおかげですよ」

「……そうかね？　そう言ってくれるとありがたいよ」

他の者どもも私を賞賛してくれるが、私にとってはここからが大変なのだ。幾度となく妨害してくれた規格外と直接、顔を合わせるのだ。それはこちらの正体を明かすこと。必要なプロセスだが、私としては出来る限り顔を明かしたくない。しかも、その時に向こうが何かしてくる、絶対だ。勝負はその時の駆け引きだろう。

ふと、思う。今はソファで眠る白雪姫、吉井明久を見た。

本当に「親友」という理由だけであの五人はあそこまで過保護になれるのだろうか。アーカーシャ・アキトなら納得できる。彼は他の四人に比べて、普通よりの規格外だ。吉井明久との過去も一つの要因だろう。だが、他の四人は？　初めて自分たちを一人の少年少女として受け入れてくれたから？　または吉井明久には惹かれる何かがあつて、それに惹かれた？

そこまで考えた私だが、そこで一つの考えが生まれた。もし、「吉井明久が自覚してない規格外」ならば……？　私は中学時代と高校

時代のデータをもう一度見直した。見直した結果、

「……まさかと思ったが……なるほど」

「どうしましたか？」

「いや、何でもないよ」

これは下手をすれば、今までの吉井明久君に対する価値観を変えざる得ないことになる。このことを規格外の五人と黒斗美月は知っているのか？ とすれば……

「確認する必要がありますね……」

周りの者どもが口々に今後のことを話す中、私は微笑を浮かべて吉井明久君を見ていた。

「着きましたぜ、兄貴！ お友達の皆さん」

「ああ、ありがとな」

「いえいえ！ 兄貴のためなら！ じゃあ、俺達は指示通り動き出すので！」

学校の正門から少し離れたところに駐車していた二台の車に乗って、奴らが指定した場所にたどり着いた。ちなみに先ほどに奴らは『蛇亀組』。いわゆるヤーさんなのだが、こいつらが暴れているところに俺が殴り込んで、組員全員しばき倒したらいつの間にかトップにされていた。丁度良かったので、俺達が住む地域の裏情報とかの情報源として使わせてもらっている。

「ここか……なるほど。取引には丁度良い場所だな」

「もう行くんでしょ？」

「ああ。お前達、準備は良いな？」

「当たり前だろう？」

「いつでも良いぜ」

「うん」

「いつでも」

「よし……それでは行くぞ！」

俺達はそう言うと言工場に向かつて歩いていく。俺は向かつていく中、工場を見据えて思う。待つてろよ、明久……絶対助けてやるからな。

工場に入った俺達は作業場に入る。資材も機械もないのか、広々とした空間になっていた。何かの集会とかするにはもってこいの場所だ。そしてその空間の真ん中には……

「いやがったな……AWSTOO……」

数人の人間がいた。一人は椅子に座っていて、その人間を囲うように他に奴らが布陣している。リーダー格と思わしき人間を見てみると、黒髪にアイスブルーの瞳でいかにもうさんくさい感を漂わせる奴だ。長い黒のコートに黒いジーンズと黒のＴシャツ、今の時期にはいかにも怪しさ満載の服装でこいつは舐めているのかと俺は思う。「待つていましたよ、月宮健二君、アーカーシャ・アキト君、黒斗双月君……おや、二人程いないようですが？」

「別に全員出る必要はないだろう？ そっちが指定をしなかったからな」

「そういえばそうでしたね。自己紹介が遅れました、私はAWSTOOの“ノイド”と呼ばれています。以後、お見知りおきを……」

向こう側が立ち上がったて恭しくお辞儀をするがそんなことどうでも良い。

「おい、ノイドって言ったか」

「はい、何でしょうか？」

「明久はどこだ？ 無事だろうな？」

「ご安心を、吉井明久君は無事ですすよ。ええ、無事ですすとも」

俺が明久の安否を聞くと、向こうは無事だといって奥から誰かが誰かを担いできた。そこには……

「明久！」

明久が眠った状態で担がれていた。見る限り、眠らされているだけで命に別状があるという状態ではないようだ。俺達はひとまず安堵する。

「早速取引……といきたいところですが、一つお話をしようではありませんか」

「ああ、話し？」

「アキト、少し静かにしている。（健二、とりあえずこちらでも要求の物をちらつかせている）」

（了解）

急に話を変えるノイドに俺は戸惑うが、双月は話しに応じながら健二に指示を出した。健二もまた、その指示に従い、ボックスをちらつかせる。他の奴らはそれに目を惹かれ、チラチラとそれを見るが、ノイドだけは俺達を見据えて語り始めた。

「私は今まで多くの人間を組織の名の元に誘拐、脅迫、拷問……まあ、一般に犯罪行為と呼ばれるものをしてきました。そうしないと教えてくれませんし、学べませんでしたからね。ですが、月宮健二君。君は最重要ターゲットにも関わらず、幾度となく私たちの妨害をはね除けてきた。無論、君の心強い仲間がいてこそでしょう」

「しかし、それ以前から君は私たちの妨害をはね除けている。いえ、正確にははね除けている途中に成長しているといった方が正しいのでしょう。しかも、成長と呼ぶには異常な速度で。実は我が組織ではそう言った異常な速度で成長する人間をこう呼びます」

「進化体質」

進化体質……聞いたことがある。っていうか健二が提唱した理論だ。たしか、人間は学習能力が高い生き物なのだが、希に体質自体が学習する事があるらしい。例えば、ある競技の練習をすればする程とそれが体に染みつき、長い間その競技から離れてもそれができるということだ。

だが、進化体質というのはそれが著しく高いことだ。しかもそれが格闘技だと、一度受けた技を体と脳が記憶として覚えて、体がそれを出来るように身体能力を上げるといふ事象を引き起こす。しかもそれは身体能力が下がることがなく、勉強でも同じ事が起こるらしい。完全記憶能力と完全適応能力、そして異常な身体および知識強化能力。この3つを併せ持つ人間が健二の提唱した「進化体質」だ。だが、提唱したのだが余りにもあり得なさすぎるとして学会から排除された理論であつたため、世間には公表されなかった。まあ、向こうさんは信じているみたいだが……

「私は君のような力を持ちながら、まるで子供のような夢ばかり追い求める君を惜しく思っています」

「別に良いだろう？ 俺は俺の夢に忠実なだけだ」

「そうですね、私もあなたの意見には賛成です。ですが、組織としての立場としては残念に思います」

俺はノイドの話を聞きながらため息をつく。つまり？ こいつは単に健二の勧誘をしただけか？ 俺は付き合えきれなくなってきた。

「ですが、私は月宮健二君以上に吉井明久君に興味があります」

その言葉を聞いた瞬間、俺は目を開いてノイドを見る。何言ってるんだ、こいつは？ A W S T O Oは健二にしか興味がないんじゃないのか？

「私は何故君たちが吉井明久君に対してそこまで過保護なのか考えてみました。親友だから？ 友達だから？ 恐らくそれが大部分の理由でしょう。しかし、私は吉井明久君の資料を見る内にある可能

性を見いだしました」

明久の可能性？　どうということだ？

「彼は観察処分者として精神が召喚獣とリンクしている。これはアーカーシャ・アキト君も同じなはず。しかし、ここで一つ疑問があります。『何故、今まで観察処分者が出なかったのか？』。それに歴史を重ねた学校です、問題児が出なかったとは考えにくい。では、なぜか？」

確かに文月学園では明久は“文月学園始まって初の観察処分者”として有名だ。だが、俺達並とはいかずとも問題児は少なからずいたはずだ。なのに、一人もいないというのも可笑しい話だ。双月も不思議そうな顔しているが、健二は珍しくしかめっ面になっている。

「これは私の憶測ですが、いなかったのではなく“できなかった”、というのが正しいのではないのでしょうか？　現実世界に干渉だけでも多大な功績なのに、召喚者の神経をバーチャルとら感全てを接続させるというのはあなたでも不可能なはず。……吉井明久をのぞいては」

そこまで来て俺と双月は気づいてしまった。明久の異常性、いや“規格外”に……

「気づいたときには私は驚いてしまいましたね。そんなことが出来る人間がいるとしたら、世界を掌握することも可能なのではないのかと思いましたから……」

「そう、彼はこの世界で唯一バーチャル世界とら感全てを接続することが出来る人外者なのですよ！」

第四十六話：AWSTOO（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみに。

第四十七話：俺は……

俺は啞然とした。明久が“規格外”、いや“人外者”……？

「あなたはそれを知った。そして吉井明久君のデータを元に“フルシンクロシステム”、“召喚融合（サモンフュージョン）”を作り出した。違いますか？」

いきなりぶつ飛んだ話になってしまっただけで、行けなくなってしまう俺を余所に、ノイドはなおも雄弁に語り続けている。健二は沈黙を守ったため、恐らく真実だろう。

「……沈黙は肯定と取らせてもらいます。まあ、ようは、あなたはその真実を知ったが故に吉井明久君を異常なまでに構うのではないのでしょうか？」

本当にそうなのだろうか。だとしたら健二は明久を……。俺は健二が明久を“研究対象”として見ているのかと思い、健二に問いかけるような視線を送った。双月もまた健二に視線を絞る。健二は頭を掻いて、顰めっ面を浮かべたまま答える。

「……そこまで推測をたてるとはさすが幹部ってところか。そうだよ、俺は明久の異常性に気づいていて、そのデータを元にお前が言った技術を作り上げた。これは変えようのない事実だ」

……おい、健二。俺は肯定の返事を出した健二が許せなかった。こいつは、明久を……！

「だが、違うね。お前の答えは7割正解だ。残りは違う」

俺は健二に掴みかかろうとしたが、健二は今までは想像がつかない真剣な声で切り返してきた。その声には気迫と真剣みが帯びており、俺は思わずあとすざりをした。

「7割？ どこが違ったのですか？」

「異常なまでに明久に構うって理由だ。確かに俺はその異常性のことも含まれているが……」

ここで健二は一区切りつけて、再度言い放つ。

「俺が明久に構うのは、俺の夢を信じてくれたからだ」

「知つての通り、俺の夢は『合体』、『変形』のできるロボットを作ること』だ。この夢は昔も今も変わらねえ。でもな？ ある程度の年になれば、っていうかこの世界ではもう空想上の話としか信じられていねえ」

健二は唐突に自分の夢について語り始めた。そういえばそうだ。こいつの夢は子供じみてると周りからよく笑われていた。変えればいいのにつて何回俺も思ったことか。健二はため息を吐きながら語り続ける。

「俺の幼少時代はもっぱら高等教育機関または外国の大学で日々を過ごしていたからな、余計に笑われたり、バカにされたりしたものさ。正直、やめようかなって思ったりもしたぜ。ところがよ」

ここで健二はニヤリと笑う。

「中学時代、俺はある奴にその夢を真つ正面から告げたら『そうなの！？ 僕も乗りたい！』ってものすごい希望に満ちた、キラキラとした目で信じた奴がいたんだよ。誰だと思う？」

「さあ？ あなたと同じタイプの人なのではないのでしょうか？」

健二の質問に関してノイドは自分の予想を答える。それに対して健二は首を横に振り、ある人物を指で指した。俺は中学時代を思い出し、ああ、いたなっと思って思った。だってよ、ソイツこそが……

「そこで眠っている明久さ。俺の子供じみた、空想上の夢を初めて会った中学生の時から、今までずっと信じているのさ」

そう、当時周りから“バカ”と言われていた明久なのだ。あいつは子供じみた夢を完全に信じてしまって、今もなおその瞬間が訪れる

ことを待ち続けている。そう、そのロボットのパイロットになるための訓練？までもやって。まあ、それが結果的に勉強と運動に繋がっているのだが。

「俺は嬉しかったね。誰一人、信じずバカにされて、笑いのネタにすらされた男の、科学者としての、今の俺を形作った夢を疑いもなく信じる奴がいるってね！」

嬉しそうに健二は話した後、再度真剣な表情で言い放つ。

「だから俺は明久を守る！ 明久の異常性だとかそんなの関係ねえ！俺は明久に俺が作る合体・変形ロボットに乗ってもらうためにモ！そして明久の親友として！！」

健二が言い切った後、俺は健二に申し訳なくなった。

そうだ、こいつはこうゆう奴だった。破天荒で、予測不能で、周りを巻き込んで騒いで、そして明久が大好きな奴だ。疑う必要すらなかったじゃねえか。“研究対象”？ 違う、それは偶然知っただけのことで、こいつにとって見れば明久という人物に一つだけ付加価値が増えただけのことだ。それ以前から親友だということは変わらねえ！

俺と双月は再度ノイド達の方を見据えてた。そして健二が言い放つ。

「さあ、話を本題に戻そうぜAWSTOOのノイド。取引を始めようじゃねえか！」

ふむ、なるほど。規格外といえども人間で学生、その盲点を突けばあるいは……と思いましたが、どうやら本当に一筋縄ではいかないようだ。まあ、いいでしょう。良い情報も取れましたし、まだこちらが有利です。私は笑顔を浮かべながら取引を始める。

「そうですね、取引を再開しましょう。では、まずそちらからお願い

います」

私が言うと月宮健二は持っていた箱を地面に置き、滑らせてこちらに渡した。案外素直ですね……。私は素直に渡したことに疑問を持つ。他の奴らはこちらに来た箱に恐る恐る近づく。

「こっちは渡した。次はそちらの出番だと思うが？」

黒斗双月がこちらに吉井明久君を返せと言っているが、私は笑顔を浮かべたまま返答する。

「そうですね……本来ならこのまま身柄をそちらに譲渡するのですが、事情が変わりましたね」

「……返さないと？」

「ええ、そうです。おっと、下手に動かないでくださいね。そうすると君たちのお姫様が傷つきますよ？」

吉井明久君の身柄を渡さないと云った瞬間、アーカーシャ・アキトがものすごい殺気を放ったが吉井明久君を盾に取り動きを封じる。ふう、今の殺気、怪物か何かに睨まれたような気分でしたよ。状況はこちらに有利、と思っていたが、黒斗双月が月宮健二に何か指で指示を出しているのが見えた。

今更何を……？ と彼らから気配をそらさず周りをよく見渡すと、何か糸のような物が光った。糸……？ 私はその糸を辿ってみると月宮健二の指と箱の蓋に付いていることが分かった。

まさか……！？ 私は箱の近くにいた部下に慌てて指示を出す。

「今すぐその箱を抱えなさい！ 急げ！」

「もう遅せえ！」

次の瞬間、月宮健二が糸を引っ張り箱の蓋を開けた。瞬間、

ピカッ！ ドカッ！

眩い光と共に何かを誰かを殴った音がした。思わず閉めてしまった目を開けてみると、そこには吉井明久君を抱えた魔法戦士のような格好をした女性と、完全武装をしたロボットがいた。吉井明久君を

抱えていた私の部下は倒れている。どうやらあの一瞬で私の部下を倒し、救出されたようだ。

「よくやった、ソルとルナ！ そのまま明久を守れ！」

「分かりました、創造主」

「お任せを！」

「くっ、簡単には……！」

「どこ見てやがる、この野郎……！」

すぐに吉井明久君を奪い返そうとしたが、アーカーシャ・アキト君がすぐ目の前まで迫っており雄叫びと共に拳を繰り出す。私は両手でガードするが、

ドガッ！

あまりの威力にそのまま吹き飛んで壁に衝突した。

「ノイドさん！ 今助けに……！」

「行かせると思うか？」

「えっ！？ ぐわっ！」

ドガガ！

部下が私を助けようとするが、その前に黒斗双月が部下の間を駆け抜けて気絶させる。よく見ると彼の腰には刀がある。恐らく刃引きされているのだろっ、でなければ先ほどの音は出ない。

「覚悟しろよ……てめえら全員生きて帰れると思うな……！」

月宮健二の叫びと同時に私たちと彼ら三人の戦いが始まった。

第四十七話：俺は……（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3607w/>

バカとテストと規格外

2012年1月14日18時52分発行